
どうして俺の使い魔たちはこんなに可愛いんだ！

テンタロー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どうして俺の使い魔たちはこんなに可愛いんだ！

【Nコード】

N5566W

【作者名】

テンタロー

【あらすじ】

親父が残した術式から現れた3人の美少女使い魔たち。

召喚されたものの送り還すことができなくなりそのまま俺と同居することになってしまった、そんな彼らの日常を描いてます。

ご主人様（俺）と使い魔たちが織りなすハーレムのラブコメです。軽い感じで読んでください。

なにかと？惜しすぎる？美少女たちの？アレ？な表現（伏せ字します）が多数出しますので念のためR15つけときます。たまにバトルやシリアス展開もあります（予定）。

では楽しんでいただければ幸いです。

1 プロローグ

日が落ちて闇が街を包もうとしている薄暗がり。

俺は家の近所の小高い丘の上にある公園のベンチに座って一通の手紙と一枚の紙を眺めていた。

親父、阿部亘が俺に置き残したものだ。
そう、あのクソ親父がだ。

手紙を読みながら自分の将来、つまり『私立高校1年生の阿部隼人』のこれからについて、たまにこの公園にやって来て考える。

手紙を読むといつも俺は頭を抱え憂鬱な気分になる。

なぜなら内容が内容だけに……だ。

手紙の内容は次の通りだ。

——父さんは勇者になりました。そして勇者として冒険に旅立ちます。だって勇者だもの、冒険に行かないのは勇者の風上にも置けない。なので旅立ちます。冒険の旅が終わるまでは戻ってきません。あとはよろしく。

追伸 何か困ったことがあったら付属の紙を使いなさい。これは異世界から使い魔を召喚するための術式が描かれた紙です。きつとその使い魔たちはお前の役に立ってくれるはずですよ。しかし、どのように使うのかは父さんに聞かないでくれ。父さんにも使用法が分からないんだ（笑）。

ま、お前の将来にはいろいろと困難が待ってるかもしれないが、お前は長男なんだから母さんと真理花をしつかり守るんだぞ（笑）

俺はうす暗い空を見上げてため息をついた。

こんな短い文章でも突っ込みどころはいくらでもある。

異世界ってなんだよ。召喚って、使い魔ってなんなんだよ。俺に家族を任せる前にまずは一家の主のお前がしっかりしろよ。つうか妹の名前がひらがなだし・・・自分の娘の漢字も書けねえのかよ、まりかは茉莉花^{まりか}だよ。それに術式の使用法が分からないってなんだ、（笑）、じゃねえ。しかも追伸の最後の（笑）はぜったい必要ねえから、それが一番失礼だから！

仕事を突然辞め^や、その直後に家からいなくなった親父は家族一人（俺、母さん、妹）に似たような内容の置き手紙を置いてどこかに消えてしまったのだ。

親父は完全に頭がイカれちゃったらしい。

サラリーマンを辞める前はそんな様子は全くなかったのに人って不思議なもんだな。

俺はサラリーマンとしてばりばり仕事してた父の姿を思い出してどこか悲しい気持ちになった。

まあ、退職金は結構残して行ったことだし、俺たち残された家族はそれぞれ気持ちを新たに（できるかわからんが）生活することにした（そうでないといけない）。

母さんは親父の退職金の半分を使い空き店舗を改装して喫茶店^{きっさてん}を始めた。3人で食っていけるだけの収入はあるらしい。

俺は高校1年、妹の茉莉花^{まりか}は中学2年、それぞれ学生として普段通りに過ごしている。

親父・・・俺たちを置いてどこ行っちゃったんだよ。

異世界で・・・お前の頭の中が異世界だよ。母さんはあんたの退職金使って喫茶店始めちゃったけど、母さんの苦勞をあんたは知ってんのか？

俺がへんてこな模様（たぶん術式）が描かれた紙を眺めていると、紙の上にぽつぽつと雨が降ってきた。

雲が厚くなり一段とあたりが暗くなると遠くの方でごろごろと雷が鳴った。

終日晴れて予報してた天気予報もあてになつたもんじゃない。
俺は本降りになる前に帰ることにした。

「あ、いけね」

丘のちようど一番高い場所に着た時ポケットから術式の紙が落ちてしまった。

拾うと雨で粘着性を持った土が紙にべっとりと張り付いてしまっていた。

俺はその紙を持って帰る気になれなかった。

そのまま地面に捨てた。

ドオーン、と雷が落ちた音がした。結構近くだ。空気が細かく振動している。

そしてついに、丘を下る坂を走っているとき、すぐ近くに雷が落ちてしまった。

周囲が目が眩むような光で溢れた後、背後から激しい耳をつんざく爆音と体を打ち抜くような振動が襲つてきたのだ。

体がこわばった。

俺は膝から座りこむ。

そして振り向くと丘の頂上から火山が噴火したみたいに黒い煙が空に向かってもくもくと昇っていた。

やばい、火事になっていたらどうする。

その場合、消防署に知らせるべきだ。

俺は丘を登って確かめることにした。

丘を登りきるといつのまにか雨はもう止んでいた。

あれだけ厚く重なっていた雲も姿を消していた。

雷が鳴る気配すらなくなっていた。

煙は地面から上がっているが火事はなかった。

俺にはなんだか丘の頂上から上がる煙がこの世のものとは思えない異様さを放っているように感じた。

黒煙がだんだんと晴れてくる。

俺は煙が上がっている場所が術式の紙を捨てた場所だと分かった。

「まじかよ・・・」

煙が晴れると俺の前に広がる光景に目を疑った。

雷が落ちた場所には焼けこげた地面のかわりに3人の女の子が並んで横たわっていたのだ。年齢は俺と同じくらいだろう。

みんな美少女という言葉がぴったり似合う可愛い子だ・・・が、今はそんなことはどうでもいい。

「なんつーことだ」

丘を下りる時にはそこに人がいると気付かなかったが、彼女たちは丘の上で不幸にも雷に打たれたようだ。

だとしたらすぐに救急車を呼ばなければ。

俺は携帯を取り出し通話画面を呼び出した。

番号を押そうとした時、3人のうち1人の女の子が声をあげた。

「んんん・・・あふう」

苦しみをあげる声でなくて寝起きのような声だった。

そしてその女の子はむっくりと上半身を起こした。黒髪で長髪のクールビューティーな女の子だ。

よく見てみたら3人とも雷に打たれていなかった。

打たれてたら焼け焦げるところだろうが服は焦げていない。

「きみ、大丈夫？ 怪我は無い？」

俺がそのように声をかけた女の子は膝立ちで辺りを見渡すと理解できない言葉を発してきた。

「ここは・・・どこだ・・・日本か？ やはり召喚されたのか」

召喚された？

「たく、それにしても睡眠中に召喚されるとは・・・こちらの世界では夕暮れ時だとしても私たちの世界では深夜だぞ。立派な睡眠時間だ。使い魔の主人としてはマナーがなっていないな。もしも風呂中に呼び出されたら裸だぞ、ったく、エロ術師め」

こちらの世界？ 使い魔？ エロ術師？

そんなことを（そう言っているように俺には聞こえた）ぶつくさ言いながら黒髪の女の子はまだ寝ている二人の体を揺すっていた。

「おいみんな、起きるんだ。仕事だぞ」

5、6回体を揺すつたら二人がぞろぞろと目を覚ました。

「もうう、あさなのお・・・ぷはああ？」こちらも長髪で（黒髪よりは短い）金髪の女の子が大きな欠伸あくびをした。髪に少しウェーブが入っている。

「ううん・・・もうふいわけ（申し訳）ありませんごふいん（ご主人）さま」栗色の髪でポニーテールの女の子が寝ぼけている。

「ほら、いつまでボーっとしている。ご主人様の前だぞ、恥ずかしい恰好かっこうをするな」

「分かったわよ、起きるわ、起きりやいいんでしょ？ まだ寝足りないのに、どこの召喚術師が呼んだのよっ」金髪の子はかなり不機嫌な声で言った。

3人は立ちあがり姿勢を正すと、黒髪が俺に向かって声を張り上げる。良く通った聞いて惚れ惚れほれほれするような声で。

「ご主人様、御用ごようをお申しつけくださいっ」

「は？」

この女の子、やっぱり雷に打たれて頭がおかしくなったのか？

それとも倒れた時に頭を打ったのか？

俺は素直な感想を述べる。

「あの、何を言っているのか分からないんだけど、意識は大丈夫？」すると黒髪は俺を睨にらみつける。

「はあ？ 何を血迷ってことを言っている！ 貴様きさまが召喚したのだろっ。召喚術を使って使い魔である我々3人を召喚したのだ」

貴様きさまって、さっきまでご主人様じゃなかったっけ？

「召喚？」

もしかしてあの紙？

「た、たしかに妙な模様が描かれた紙を俺は持っていて、その紙が雷に打たれた後に君たちが出てきたんだが・・・」

「そっだ、それだ。やはり私の言う通りお前が呼んだのだろっ。術式と雷のエネルギーがあれば召喚術は成立するのだ」

いまだに理解できねえけど本当に俺がこいつらを召喚したのか？
あの術式が本物ってこと？

と、その前に・・・冷静になって気づいたのは3人の洋服のそれはそれは刺激的なことだ。

これからコスプレの集まりですか？ と訊きたくなるくらい奇抜な格好で、黒髪はポンチョらしき布切れの他は厚めの黒のブラ&シヨーツだけだ。しかもポンチョはシースルーで（もはやポンチョじゃない？）黒の下着がなまめかしく透^すけていた。金髪ロングの方は豊満なバストを強調するような胸の大きく開いた（もうちょっとで乳輪が見えそう）ライダースーツのような体にぴたりフィットする服を着用している。栗毛ポニータールはメイド服を来ていたが、それ着てメイド喫茶で働いたら犯罪だろつつうほどスカートが短すぎる。俺が栗毛より背が高いからギリギリ見えないもののもう少し背が低けりゃ下着が見えんじゃね、ってくらいの短さだ。

それに彼女たちの服は雨にぬれて下着が透けていた。栗色のポニータールは下着も付けていなくて二つの丘陵がもろ見えだった。体に熱いものを感じて俺は思わず目をそむけた。

「しょ、召喚したのか、俺が？」

「さ、分かったならさっさと用件を言え。魔物の退治か、護衛^{ごえい}か、戦争か？」

「用件つつたって・・・」

にしてもやけに気の強い女の子だなー。

俺が対処に困っていると金髪の子がからんできた。

「あなたねえ、さっきからうじうじとむかつくわねー、さっさとこっちは仕事を済ませて家に戻りたいのよ、眠いのよ、寝たいのよ！」
受け入れ難^{がた}いが俺が召喚をしたとして話を進めることにした。

「わかった、わかった、はつきり言うよ、用事なんて何もない。間違^{まちが}って召喚したんだ、俺のミスだ、すまない」

「ちよっと待ちなさいよ仕事が無いのに呼んだってこと？」金髪がその胸が俺に触れそうになるまで迫ってきた。

「とんだ召喚術師だな、呆れてものも言えんわ、ふうう」黒髪が嘆息した。

「それは残念のきわみです。せつかくこのような素敵な、につぼん男児にお仕え申しあげられると思っていきましたのです」栗毛の子が妙な言葉使いで話した。

「あ、ああ、何もしてもらおう事もないから帰ってくれ」

「せつかく来てやったのにね、帰りましょ、みんな」

「ふん、まったく、ふ抜けた術師だな、名はなんというんだ、それだけ聞いて帰ろう」

「阿部隼人だ」

「ハヤト？ ふん、日本人にしてはそこらに転がってるような平凡な名前だな」

「うつせーよ」

隼人はその辺にころがつちやいねえよ。

「じゃあハヤト、それでは術式を頼む」

「は？」

黒髪に頼まれたがあ紙は一枚だけだ。

「頼むって言われてももう紙は焼けて無くなっただけど、無いと困るものなのか？」

「困るも何も術式が無ければ帰れないわよ？」金髪の子が答える。

「マジか？」

「ええ、おおマジよ」

「もう一度紙に描いたらいいだろう」黒髪が俺に提案した。

「紙はもらいものなんだよ。どんな術式かも覚えてないし再現不可だ」

「バカかお前は、だったら貰った者にもう一枚紙をもらえばよいだろう」黒髪が再び提案した。

「・・・残念だがそいつは現在行方不明で戻って来ない」

「ちよつ、それって・・・絶望的じゃないのよ」金髪が顔を思いつきりしかめた。

「つつかさ、お前の方こそ術式を自分で描いたらどうなんだ？」逆に俺が黒髪に提案した。

「ふん、ばかかお前は、私たちはそんなもん描けん！」

「威張って言う事か」

俺をけなしてきた割にはお前も描けねえんじゃねえか。

「ん？ つつことは・・・」

・・・つつことは、なに？ こいつらはこいつらの世界に戻れないってこと？

「お前たち、3人とも戻れないのか？」

「そういうことです」栗色ポニーテールが答えた。

「どうしてくれんのよお、帰れないじゃないのよおお、いやああ、いやああ、もういやああ」金髪が長い髪と胸を揺らしながら脚をじたばたさせて半ベソをかいていた。

沈黙していた黒髪が怒りを押し殺した声を出す。

「お前・・・責任・・・取れよ」

「せ・・・責任？」

俺はしかたなく3人を自宅に連れて帰ることにした。途中、夕食の食材をかごに入れた自転車のおばちゃんやら仕事帰りの中年の男やら十代の若いカップルやらとすれ違った。彼らは目を丸くして俺たちを見ていた。俺はこんなありえん格好の女の子とは知り合いじゃない風を装ったがきつとごまかせかつただろうな。しかも金髪の子がずっと泣きべそをかいてるので俺が泣かせたみたいになつたし・・・（泣きたいのは俺のほうだよ）。も、もしかして俺がありえん格好を女の子たちに強制させている、とも受け取られたかも。そう考えると彼らの目線が俺の心にぐっさりと突き刺さるように痛かったのに納得がいく（ほんと、大泣きしたいくらいだ）。

そして10分の徒歩の末、俺たちはローンがまだ数年残っている

一戸建ての自宅に戻ってきた。

「あの人に似て、お前も立派になったわねえ、こんな美人さんを3人も家に呼ぶなんて。3人ともあんたの彼女かい？ やるねえ」

息子が複数の女を連れ込んでいる事に感心するよううちの母親が玄関で迎えた。

「違う・・・ええと、こいつらは・・・」

「ハヤトさまにせきにんを取らせるために参上たてまつりました」

ポニーテールがそう言うと言った母さんが驚いた様子で口に手を当てる。

「たてまつりました！？」 いや、そこじゃなくて、責任っ！？ ハヤト、お前ついにやってしまったの！？」

「んなわけあるかよ、そもそもやつちまつたって何なんだよ」

ついでに？ ついに？ ってなんだよ、いつ俺は母さんにそんなそぶりを見せていたんだよ。

「なんだハヤトそんなことも知らないのか、やる、というのはな、男性と女性が一つに重なり、そして二人の愛を確かめるために互いの唇をまじわせ・・・」

黒髪が余計なことを口に出すと母さんは深刻な表情になった。

「あんたつて子は・・・やっぱり人さまのうちの娘に・・・」

「だからそんなんじゃないで、えつと・・・まずは話しは後にして突然大雨が降ってきてびしょ濡れなんだ、とりあえずこいつらに着させる服ないか？」

母親はまじまじと3人の恰好を眺めてから3人に質問した。

「3人とも家は遠いの？」

「はい、ここから行くと遠いですね。まずこの世界のクパイストスの泉に入り、アリアドネの門をくぐり抜けてデメテル高原をティアマトルに乗って北にまっすぐ行くと・・・」

黒髪の子が電波まっしぐらの発言をしてきたので俺は途中で遮り焦りながら訂正した。

「ちよっ、わっ、今の聞かなかったことにしてっ・・・要するにかなり遠いってことだ」

「ふーん、そうなの」母親は何かを考えていた。
「なんたつて異世界だから。」

「電車乗り替えたりするの?」

「電車どころじゃないかもしれない。時間はどれくらいかかるかわからんし」

「なんたつて異世界だから。」

「そうねえ、確かにそんな恰好で帰れるわけないものねえ」

「びしょ濡れだからという理由ではなくありえない服装だからという理由で母さんは3人の服装を着替えさせようと思ったらしい。」

「こつちに来なさい、3人とも」

「うむ、かたじけないな。ここはお母さまの好意に甘えることにしよう」

「ありがとうね、お母さん」

「このご恩は一生わすれませんが、お母上さま」

黒髪、金髪、栗色の順番で三者三様に礼をしてバスルームに入っていた。

3人は体をバスタオルで拭いて母さんの昔の服を着て居間に戻ってきた。それは母さんが若かった頃に流行った洋服で、今の世の中でそんなもんを着て街を歩いているやつは一人もいないだろうが、3人が着てた格好よりはマシだ。あんなもんで生活しているやつは過去にも未来にもおそろくないだろう。

「それで、3人とはどういう関係なの? 学校のお友達?」

「えっ、とー・・・」

「なんて紹介したら良いのだろうか。」

俺が言い淀^{よど}んでいると黒髪の女の子が神妙な面持ちで、ありえないことを言った。

「私たちはみんな阿部^{わたる}亘の子供だ」

「「は？」」俺と母さんが声を合わせた。

そんな嘘が通じるわけが・・・。

「認知届も提出済みだ。ほらこれがその証拠だ」

黒髪少女は一枚の紙を居間の机に置いた。見ると、それは戸籍の写しで、子の戸籍の父の欄に親父の氏名が記載されていた。生年月日は俺と同じ歳だが生まれが俺より早い月になっていた。

そんなもののいつの間に捏造ねつぞうしていたんだ。

「お、おまつ・・・むぐぐ」

「こうするしかないんだハヤト」

俺が反論しようとしたら黒髪に口を押さえられてその間に母さんは納得してしまった。

「本物らしい・・・わね。ともかく、本物がどうかは置いて、お父さんならやりかねないことだと思うけど・・・」

やりかねねえよ。どんだけうちの親父は破天荒はてんこうな親父なんだよ。

「それで、どうしてうちに来たの？」

「ここに住むためだ」

「「え？」」再び俺と母さんが声を合わせる。

「私たち親戚がここしかないんです。ここしか頼るところが無いんです」金髪ロングの子がしおらしく言った。

「お願い申しあげます、お母様。わたくしたちはこのハヤト様におつかえしながら、ハヤトさまの身のまわりの世話、そしてこの家の炊事すいじ、洗濯、家事、なんでもご奉公いたすしょぞんでございます」茶髪の子が床にぺたんと座り両手を前で合わせながら床にすれすれまで頭を下げた。どこの奉公娘だよ。

母さんは腕組みしながらしばらく考えたのち深いため息をつき結論を出した。

「ふううー、まったく、あの人にはとことん苦労させられるわね。残していったお金もやけに多かったし3人分の面倒はみられるわ。こうなることがあの人に分かったのかしら。もういいわ、話が急で母さんもよくわからないけど、今日からこの家に住みなさい」

「ちょっと、母さんっ」まさか本当に住ませる気かよ。

「しょうがないじゃないの、可哀そうでしょ？ それにうち以外に親戚がいなくていうし。そのかわり父さんには思いっきり責任取ってもらうから」

父さんと連絡は付かないがな。

俺がぐったりと肩を落としていると3人が話しかけてきた。

「よろしくたのむよ、兄さん」不敵な笑みを浮かべる黒髪。

「こ、こうなったら、人間社会をエンジョイするしかないわね……いろんなこといっぱい教えてね、お兄ちゃん」沈んでいた金髪が最後は明るくなっていた。

「よろしくおねがい申し上げます。ご主^{ごま}にいさま」

「ご主^{ごま}にいさま、ってなんだよ、ご主人様と兄さまがくつついたのか？」

はあ、妹に何て説明しようか。妹にしてもかなりの迷惑だろうな。

これでプロローグは終わりだ。

こうして俺と使い魔たちの共同生活ははじまった。

つつか、その時の俺まだ3人の名前を知らないし……。

親父よ、あんたは何のためにあの術式を残して行ったんだ？

もしかして本当に異世界に旅立つちまったのか？

あんたがホントに勇者になっちまったって冗談は本当なのか？

俺にはあんたに質問したいことが山ほどあるよ。

口から出すにもほどがあるくらい電波な質問だがな……。

でもその前にまず3人に名前を訊こうつと。

1 プロローグ（後書き）

読んでくれてありがとうございます！
評価とか感想とかお気に入りしてくれたらうれしいです！

2 自己紹介

3人は玄関で自己紹介をした。

黒髪、金髪、ポニーテールの女の子が順に名乗る。

「美月^{みつき}だ。？美？しいに空に浮かんでる？月？だ」

「西梨^{せりな}奈よ。えつと・・・方角の？西？に・・・それと梨は・・・えつとお・・・まあ適当で良いわ、あとは分かるでしょ？」

分からだろ。

「優衣^{ゆい}ともうします。いさましい兄上^{あにうえ}さまの御手^{おて}がわたくしの？衣？服を一枚ずつ？優？しく脱がしてゆき、わたくしのからだがしぜんとあつく火照^{ほて}るのでございます・・・の優衣です」

・・・こ、こいつ、もはや説明する気ないだろう。

「つか、3人とも使い魔なのに日本の名前なんだな」俺は美月^{みつき}に言った。

「むろん仕事用の名だ。本名は別にあるが、わたしたちの召喚先は日本が多いから日本の名前を使うことにしている」

「へー。確かにその顔でへんてこな名前を名乗られても困るしな」

3人の顔立ちは（西梨^{せりな}奈だけはハーフ系美人だが）立派な日本人のものだ。

「ねえ、あなたたち何の話してるの？」

「ご、ごめん、こつちの話だ」

あぶねー、あぶねー。俺が普通に使い魔とか母さんの前で口に出すとかありえねーだろ。

「じゃ、母さん喫茶店に行ってくるから、おかずは冷蔵庫だから、炊飯器^{すいはんき}のスイッチ押しといてね」

「ああ、分かった、いってらっしゃい」

母さんが駆け足で喫茶店に出かけたあと、3人を俺の部屋に連れてあれこれと質問した。

俺は勉強机のイスに座り、美月と優衣は床に座る。美月は俺の出した麦茶をケチをつけながら飲んでいた。

「やけに味の薄い飲み物だな。こんなものを人間は飲んでるのか？ うまいとは思えんが・・・」

「まあ、お茶だからな。そんなもんだ、俺もうまいと思って飲んでない」

「私は兄うえから頂いたものはどんなものでもとてもおいしいのです」優衣は大事そうにグラスを両手で口に運んでいる。

西梨奈はよつぽど眠たかったのか部屋に入るとすぐに「ううつひやゝ、待ちに待ったベッドよ、すいみんよォ」と叫びながら俺のベッドに飛び込んでしまった。今ではすやすやと気持ちよさそうに寝息を立て、たまに妙にエロい吐息を洩らして寝返りを打っていた。ただ、目のやり場に困る。

西梨奈と美月は俺のＴシャツをだぼだぼに着てるのだが、Ｔシャツの裾から白のショーツがもろにはみ出しているのだ。

で、なぜか優衣はまたもやミニスカートのメイド服。それは今乾かしてるメイド服じゃなくてどこから持ってきたのか別なメイド服だった。

美月は電波で中二な言葉を繰り返して説明してきた。

俺は話半分に（いや1割以下だな）聞いてたし、こいつらは新詐欺師たちで決して使い魔などという得体のしれないものではない！と自分に何度も言い聞かせたりもした。

しかし。

「ちよ、待てよ、ずっと聞いてたが、俺には到底理解も信用できねえことばかりだよ。つつか、まともな頭を持つてる人間だったら世

界中どこ探してもお前の話を信じる奴なんかいねえぞ」

そついうと美月は深いため息をはく。

「・・・ふううう、これだから、低脳な工口術師は世話のかかることだ・・・証拠を見せてやろう。おい、優衣^{ゆい}手を貸せ。こいつに魔法を見せてやる、ふふ」

「魔法？」

「まずはハヤト、お前を宙に浮かべてやろう、優衣」

美月にうながされて優衣は俺に手をかざす。

「あねご、こうですか？」

「ぬわっ」

高速エレベーターで下階に降りはじめ時のような体がふわっと浮かびあがる感覚直後、ほんとに体が宙に浮いていた。

「ちよ、まてよっ、なんだこれ！？」

天井近くの高さで手足をじたばたさせる。

「ふん、それが魔法というものだ。さらにこの麦茶を・・・」

美月^{みつぎ}は麦茶の入ったグラスを思いっきり振り上げた。

当然、中身が飛びだし床が水浸^{みずびた}しになる・・・のだが・・・麦茶は空中で止まっていた。テレビでよく見る1秒間^{すいてき}に数千コマ撮^とれる超ハイスピードカメラの映像みたいに水滴^{つぶ}ひと粒ひと粒が静止しているのだ。

こいつら・・・まじで魔法つかえる・・・。

その後いくつもの種や仕掛けがあると思えない怪現象を次々に見せつけられたあと、ようやく宙から下ろされた。

「これで信じるか？」

美月がしたり顔できいてきた。

「はい、信じます」

俺は即答した。

そしてこいつらが話してくれたことも信じることにした。

俺が得た情報を箇条書き^{かじょうが}する（実際に俺の勉強ノートに書いた）。

・使い魔は召喚術師に呼ばれ両者の関係は契約によって成り立つ。

・召喚するためには術式が必ず必要で、手に入れるためには試験に通らなければならない（術式は運転免許証みたいなものらしい）

・どのような使い魔を召喚できるかは術式と術師によって決まる。呼び出せる使い魔は術式や術師によって異なる。

・契約とは、術師が使い魔に魔力を与える代わりに使い魔は術師に服従するという、ギブアンドテークなもの（俺は魔力を吸い取られているらしいが健康に影響ないらしい。ほんとかな？）。

・召喚されたら術師が返還^{へんかん}（元いた場所に使い魔を送り還^{かえ}すこと）するまで契約は続く。返還するときも術式は必要（俺はこれを失ったわけだ）。

・人間界に召喚される使い魔^{おも}の主な役割は魔物退治^{まものたいじ}や悪霊退治^{あくりょうたいじ}だ。

（備考欄^{びこうらん}）魔物やら悪霊ってわからんが次にまわす。

これだけノートに書いて俺は勉強机につっぱした。

「ふん、どうした？ もう頭がパンクしたか」

「ああ、もうだめだ、すまんが、続きは今度・・・聞いたことを理解するので精いっぱいだ」

「まったく。まあ、わたしのほうもダメ術師に一から教えるのに口が疲れた。それに魔法も使ったしな。人間界で魔法を使うのはかなり魔力を消費する」

「ふーんそうなのか・・・あ、そうだ、さらに質問、つつか苦情だ。どうしてお前らが親父の隠し子だつつう設定になったんだよ」

「あの時はああするしかなかったのだ。考えてみる、妹という設定にしなければお前と一緒に暮らせないだろう」

一緒に暮らすのは決定事項かよ。

「お前らには行くところねえしな」

「それと、あの手品みたいにとりだした戸籍こせきは？」

「そんなの魔法を使えばちよちよいのちよいよ」寝覚め西梨奈ねあが答えた。

「それは犯罪だつつの。お前らの世界に戻る前に刑務所行きになるぞ」

「さあて何のことかしらねえ、なんの罪になるのかしら」

「文書偽造罪きようぞうざいと詐欺罪さぎざいのことだよ」

「まあ、良いじゃないのよ、あたし人間界のものじゃないし、使い魔だし、法律なんてぜんぜんかんけーないし、ハヤトの妹になれたんだし、あたしはウルトラかわいーし」

「とんだ無法者の集まりだな・・・しかもいくらお前が可愛いつつても犯罪が見逃されるわけねーからな」

「かわいいのは認めるのね、うふふ」なぜか顔を赤らめていた。

ああ、いちいち突っ込むのが面倒くさくなってきた。

「つーかなんでお前らその服なんだ？ 母さんのがあつたろう」

「ふん、部屋着へやぎには不適切だなあれは。生地きじが厚いし、通気性は皆か無だ。着ていると汗をかくんだ」

あの服はどれも外着で秋物が冬物であつたことを思い出す。

「・・・ってその格好もどうかと思うが」

俺には刺激が強すぎて目を向ける事ができない。さっきから体が熱くなりっぱなしだ。

「しかたがないことだ、服は他に無かつたのだ、裸ではさすがにまズいだろう」

「べつにあたしは裸で良いんだけど美月みづきがダメって言うのよ、人間

界って面倒くさいのね。そうだハヤトを裸にしましょ」

「するな！」

「つーか、なんで一人だけメイド服が混じってるんだ？」

「兄上さま、もしやめいど服とは私のことをおっしゃっているのですか？」

「へえ、これってメイド服っていうの？　なんかあんたの妹の部屋に着的服ないかなと思って物色してたんだけど・・・」

「茉莉花まりかの部屋に勝手に入んなつーの」

注意したが西梨奈せりなは無視して話しを続ける。

「妹さんの服ってあたしと美月にはサイズが小さすぎたの。あ、でも、シヨーツはきつきつだけど入ったわよ」

「よく穿はけたな・・・」二人のシヨーツは今にもはち切れそうになるくらいぴちぴちに生地きじが伸びていた。

「でね、優衣はちよつと小さいけど着れたの。だからどれか優衣に似合うかしらねえーって3人で探したらどれもこれもつまらない服ばっか、あんたの妹のセンスを疑ったわ」

「俺はお前のセンスを疑うがな」

「でもねクローゼットの奥にこんな可愛い服があったのよっ、どうでしょ可愛いでしょ？　人間界にもこんな可愛い服があるのねっ」

「あにうえさま、いかがでしょうか、わたくしの姿はお気に召しましたでしょうか？」

「そりゃ・・・まあな、かわいいんじゃないかね？」

「・・・ぽっ」

優衣はぼって口に出しながら顔を赤らめた。

「おいエロ術師、鼻の下が伸びてるぞ、なんと汚けがらしい。そんなにわたしたちの姿に興奮しているのか？　ふふ」

「ち、ちげっての、んなわけ、あるかつ」

俺が強く（したつもりが完全に焦あせって）否定した。

それよりもどうしてわが妹はメイド服を妹が持つてるんだ？　もしかしてコスプレが趣味だとか？

茉莉花まりかに聞くこともできるが兄として黙って見なかったことにするか？

そのとき、一階から茉莉花まりかの声がした。

「に・・・にいちやあーん・・・ご飯がない——」

どうやら部活から帰ってきていたらしい。

台所に行ってみると炊飯器のスイッチを押してなかったことに気付いた。

「やべ、すまん、夕食はあと30分待つてくれ」俺は妹に謝った。

「むー、にいちちゃんのばか、一生口聞いてやんな・・・ひやつ!？」
茉莉花まりかのびつくりした表情を見て3人が台所に入ったのだと分かった。

いきなり現れた見知らぬ年上の女性に茉莉花まりかは見るからに警戒心けいかいしんむき出しに身構みがまえていた。

3人はあいさつする。

「よろしくな、茉莉花まりか、わたしは美月というものだ、みんな今日からお前の姉だからな」

「ふえ？」茉莉花はびくつとした。

「西梨奈お姉ちゃんよおおっほうつ。うはっ、ちょ、ちよつとなにこの可愛い子お？ ほら見てよ、か、かわいすぎるわっ、ハヤトと違ってほんと可愛いー、愛めでたいわ、あとでたっぷり愛めでてあげるね？ じゆるじゆるじゆる」

「ひっ!？」茉莉花は俺の服をぎゅつと握りしめた。

『ハヤトと違って』というフレーズが引っかけたが、よだれを出しながら茉莉花まりかに近寄る西梨奈せりなの気味悪さに突っ込みたい。

「ええと、ふつつか者で、まだまだいたらぬ者でございますが、私わたくし、兄上あにうえと連れ添そうことになった優衣と申すものでございます」

「連れ添そうことにはなってねえからな」

妹は俺の背中に回り顔だけ出して「むー」と怪訝けげんそうに唸うなりなが

ら3人を見つめていた。

俺は妹に事態を説明した。妹は黙って聞いてたが、俺が話し終わると何も言わずに自室に入った。まあ、無理もない。

こうして3人が茉莉花にした自己紹介は初めて会う人間に用いるのに、ちとファンシーなものだった。

3 バスルームで情事？

夕食時、茉莉花^{まりか}はひとりで食べると夕食を盆^{ぼん}に乗せ自分の部屋に行ってしまった。

当然だろう、親父に隠し子がいてそれも3人。

しかもこれから一緒に暮らすことになったのだから1人になりた
い気持ちもわかる。

「ねえ、ハヤト、もしかしてわたしたち嫌われてんの？」

「嫌われてるつつつか、急に知らない人間が家族になって同居する
ことになったんだからな、たいていああなるだろう」

「お二人の仲を悪くしまいもうしわけありません」

「でさあ、ところであたしたちってどこで寝ればいいの？」西梨^{せり}
奈^なが言った。

「うーん・・・そうだなあ・・・うん、3人は親父の書斎だった部
屋を使ってくれ」

「亘^{わたる}の部屋か？」美月^{みづき}が親父の名を出す。

「そうだ。あの部屋は親父が出てってから誰も使ってねえし、親父
の荷物も片付けてすっきりしてる。しかもけっこう広いからお前ら
3人の寝室には十分だ・・・それよりも人の親父を亘^{わたる}って呼び捨
てんな」

「わかったバカ親父の部屋だな」

「バカは余計だが、否定はできない・・・悲しいぜ」

食卓にあがったものは全て口にするのが初めてな料理らしく、め
ずしそくに、あるときは旨^{うま}そうに、あるときはまずそうに食べてい
た。3人の反応を見るのは楽しかった。

美月は納豆を腐^{くさ}ったものだど勘違いし、貴様、何を食わせようと
してる！ と俺にぶちまけてきて処理が大変だった。

西梨奈はコロッケを気に入り、優衣は味噌汁を気に入ったようだ。

夕食後、俺は食器を洗っていた。

「お前ら、俺が食器洗ってる間に、先に風呂に入れ。つかお前ら風呂とか入るのか？」

「失礼ね、ハヤト、わたしたちの世界にもお風呂くらいあるわよ。そうね、じゃあ一番風呂いただくわ」

3人はバスルームに向かった。

と、その前に美月がやって来てひと言だけ注意してきた。

「おい、ハヤト」

「なんだよ」

「のぞくんじゃないぞ」

「のぞくか！」

俺が即答すると美月はすこし悲しげな顔で小さな声で、

「いや、しかし少しならばのぞいても良いからな」と言った。

あいかわらずわけがわからない。

俺は食器を洗い終え茉莉花と格闘ゲームしながら時間を過ごした。

少しは妹の機嫌きげんは直ったようだ。

10戦して2勝8敗で俺がわざと負けてあげて（いや、妹のほうがうまいのだがここは兄のプライドとしてそのように述べておく）時計を見ると3人が風呂に入って1時間は超えていることに気付いた。

いつまで入ってたあいつら。

バスルームに向かい、ドアをノックする。

「おい、まだ入ってるのかー」

呼ぶと美月^{みつき}が返事する。

「ちようどいま髪を乾^{かわ}かしたところだ。このドライヤーとかいうやつは便利なものだなあ。すぐに髪が乾く」

「そりゃ良かったな。次は俺入るからさっさと出てくれよ」

「もうみんなすぐ出て行く。入っても良いぞ」

「そうか、じゃあ入るぞ」

俺がバスルームのドアを開けると・・・。

裸・・・湯でほのかにピンク色になった美月の肌。
そして美乳。

「な、なんで裸！」

「き、きさまっ、このエロ術師！ いますぐドアを閉める！」
すぐに閉めたドア越しに俺は苦情を言う。

「お前が開けて良いって言ったんだろ！」

ガサガサと服がすれあう音がする。

「もう開けていいぞ」

ドアを開けると新しくおろした俺のＴシャツ姿になっていた。

「ふん、やはりのぞいたな、ハヤト」

「のぞいたというか・・・す、すまん」

「まったく、見るときはこちらのペースに合わせる。急に見られると心の準備ができてないではないか！ このエロ術師が」

「申し訳ない」

「見せるときはこちらから裸を見せてやるから、驚かすな」

「結局見せる気だったのかよ！」

「ようするにタイミングの問題だ。お前に自慢できるだけのボディは持っている！ まったくエロ術師め！」

「あ、あねごはどうして怒っているのですか？」

そう言った優衣が生まれたままの姿で俺の前に立っていた。

ほっそりとした腰、そして華奢^{きゃしゃ}な体にはちようど良い小ぶりの胸

だった。

「ぶうつ」俺は思わず噴きだした。

すかさず近くのバスタオルを優衣の体に巻いてやった。

「たく、お前も恥ずかしくないのかよ」

「もちろんそのようなことはございません。わたくしは兄上さまに見られてとても嬉しい気持ちで心が満たされております」

「おい、ちよつと反応ずれてるぞー。普通は恥ずかしくて男に裸なんて見せないっつの」

「そうなのですか・・・兄うえさまは恥じらいを持った女性がお好みなのですか。きみにめいじておきます。つぎは恥じらいながら・・・脱ぎます」

「脱ぐなよ」

俺は二人をバスルームから追い出し、今の騒動でかいた汗を風呂で流すことにした。

浴室に入ると・・・。

m・・・バスタブの湯面の上にm。

横から見れば湯の水面からちょうどmの形をした島が浮かんでる。湯船の中に俺は見た。肌色の、張りの良いm型のドでかい島・・・その上にピンク色の突起。

そう、ぷかりと湯に浮ぶ西梨奈はその大きなバストを水面から突き出していたのだ。

・・・こいつを忘れてた。うかつだった。まだ西梨奈がいるはずだったんだ。でも浴室に人のいる気配がないから入ってしまったのだ。

「ん？」

俺は様子がおかしい事に気付く。

「ちょ、おまえ・・・のぼせてんのか!？」

「ハ・・・ハヤト・・・たすけ・・・て・・・」

西梨奈は右手を俺に伸ばして力なく湯に落とした。

すぐに湯からあげて冷まさないと。

俺は西梨奈救出に動く。

湯からあげるとき胸が体に触れるが今はそれどころじゃない(だがしかし、まっばの俺の肌に西梨奈のふくよかな胸が当たれば下半身はそれどころじゃなかったが)。

「いま、助けるからな・・・ぬはっ」足元が石罅(せつけん)(こんなところに置いてく)の上で滑(すべ)ってしまった。

そのまま俺と西梨奈は浴室の床に転がり頭を打ってしまった俺は少し(1、2分だろう)気を失った。

目を覚ましたのは西梨奈の喘ぎ声(あえ)のようなエロ声に起こされたからだ。

「ああん、やあん？ お兄ちゃんのかたいのがっ、あっ、あっ！き、きもちいいっ、あっはあん？」

「ぶっ——っ」俺は嘔(ふ)きだす。

俺は西梨奈の上になっていて、こいつの巨乳が俺の胸にこすれている。二人の足は絡(から)みあい、こいつはあえぎ声を出し続ける。

「ちょ、なにやってんだ、おまつ・・・んあっ」西梨奈の太ももがアソコにこすりつけられた。

「あ、あん・・・くう、うううあん・・・ハ、ハヤトおおっ、あああん？」

なんだこの状況は・・・裸の男と女の体が重なり合い、女はあえぎ声、血湧(ちわ)き肉躍(にくあど)る俺の下半身・・・って冷静に分析(ぶんせき)してんじゃねえ、俺のバカ、さっさと離れる。

「かったい、ふつとい、ハヤトのおち〇ち〇を早くいれてええっ？ いやん激しいいんっ！」

お前の言葉が激しいっつの！

いったい何やってやがんだこいつは。

俺はから体を離し西梨奈を見た。

「は？」

「……西梨奈は大口開けて寝ていた。あえぎ声は寝言らしい。」

「なっ……こ、こ、こいつ寝てやがる……寝ながら喘いでやがる……寝ながら恥ずかしいこと叫んでやがる……」

「そんなこと言わないでええ、もっと、もっとつよくうっ？ やんつ、あんっ？」

「なんつー激しい寝言……どんな淫夢見てんだこいつ」

「おおい、さつきからやかましいが、中に西梨奈がいるのか？ ……・……ッ！？」

で、タイミング悪く浴室に入ってきた美月と目があう。

膝立ちの俺は股を広げた西梨奈に体をくっつけてる。

「こ、これはどういうことだ、ハヤト？ ……ああん？」

「いや、ちょ、誤解だ、誤解だっ」

ぜってー誤解だと言い訳できねえ二人の状態だろ、と自分でつつこむ。

美月の視線が俺の下半身に向けられると彼女の顔はボンツと真っ赤になった。

「き、貴様……」

その目は殺気にも似たオーラを放っていた。

あ、殺されるかも……と思った俺でした。

4 ふたりは犬猿の仲

「ふああ〜っ」

俺はベッドの上で大きく伸びをする。そして時計を見ると昼前だった。

んー眠い。

まじだるい……。昼まで起きれなかった。

風邪じゃないんだが、とにかく体がだるい……。今日が休日良かった。

昨日の俺は風呂場の誤解を解こうと2、3時間くらい美月に弁明したが受け入れてもらえずにあきらめて寝たんだ。

その一件以来美月は俺がどんなに声をかけても『この工口術師』としか返事しなくなっていた。

階段を下りてリビングに向かう。

「隼人今日は遅いわねえ、もう昼よ、今朝はいくら呼んでも起きないんだから。目覚ましをかけてなかったの？」

昼近いのに母さんがダイニングにいた。きつと喫茶店の合間に戻ってきたのだろう。

「ちよつと体がだるくて」

俺は頭をかきながら眠そうに言った。

「風邪でも引いたの？ 早めに薬飲んだ方がいいわよ？」

「いや、風邪とも違うんだ、寝不足でもないし、寝過ぎたのかな？」

「そっぴゃあんたも遅いけどあの子たちもまだ起きてこないのよ、あんた起こしてきて」

「あの子たちって、あの3人か？」

「そっぴゃ」

ああ……。昨日のはやっぱり夢じゃなかったのか。

「分かった・・・ところで茉莉花は？」

「部活よ」

地区大会が近いらしく最近部活中心の生活を送っている。ちなみに俺は部活に入っていない。ちょうど父親がいなくなった時に俺は高校に入学したんだが、当時の俺は新入生入部歓迎どころではなくてそのまま入部のタイミングを逃して今に至っている。妹は進学なのでバスケ部を続けている。

「バスケ部も大変だな」

「バスケ部よりもあの3人と暮らすのが茉莉花には大変になりそうね、今朝も顔合わせたくないっていつもより早く出かけてったわ」
結局あいつは3人と口を利かなかったな。急にできた姉と仲良くすると言う方がおかしいやな。それに茉莉花のやつは大の人見知りだし。

「そうか。つつかさ・・・あの3人、ほんとにここに住まなんだよね？」

「ええ、もちろんここに置くわ」

あっけらかんとそのように言っただけの肝っ玉母さんだ。

「それがね、昨日母さんが帰って来たら詳しくあの子たちの事情を聞いたのよ。あんたは寝てたけど。あの3人に同情したわけじゃないけどそれはそれは大変な境遇だったみたいねえ・・・母さん泣くして聞いてられなかったわ。つらくて、つらくて、あたしが面倒見ないで誰が見るの！ って気になったの。あんな可愛そうな子たち、これ以上苦労させられないってね」

母さんは話を思い出したのか目に涙を浮かべていた。

「あ、ああ・・・そうなんだ」

にしても見事に母さんの人情、情け、慈愛を巧みに掌握することに成功している。あいつら母さんにどんなこと言っただんだ？

まあ、しかし面倒みるってよく言えたもんだ、さすが肝っ玉母さんだ。

「じゃあ母さん出かけるから朝食、いや昼食になるかしらね、あの

3人にも食事ちゃんと食べさせるのよ」

「分かった」

親父がいた時は気に食わないこともあったが親父がいなくなつてから毎日喫茶店の仕事を頑張つてゐる母さんには頭があがらない。

そんな母さんを手伝おうと、俺も少しは家事と洗濯を担当してる。料理も母さんが忙しい時は代わりに作っている。

「ああ、ほんと、今日はだりーな！。食事はコンフレークでもいいか」

俺は冷蔵庫の中の牛乳パックと棚の中のコンフレークを見て決めた。

さつそく俺は4人分の食器を出してコンフレークを準備した。バナナがあつたので輪切りにしてコンフレークの上に乗せた。

俺はで昨日から3人の寝室となつた親父の元書斎に行き扉をノックした・・・が反応が無い。

5回ノックしても反応がなかった。

もしかして幻みたいにとっさに消えてしまった・・・のか！？
急かされたようにドアを開ける。

「・・・お前ら」

床に敷いた布団の上で3人は爆睡ばくすいしていた。

3人とも今日はいたって普通のパジャマ姿だった。裸でもないし裸に近い格好でもない。

ぐごお、ぐがああ、とひと際きわデカイいびきをかく西梨奈せりな。

「にしても・・・すげえいびき。隣でかかれたら眠れねえ」

西梨奈とは正反対に優衣ゆいは小さな体を丸めやすやすと寝ている。

美月は・・・はだけた長い黒髪が揺れたと思つたら目をこすりながら眠そうないさつ。

「んんん・・・はやとか・・・おはよう」

「おう、おはよう。つーかこんにちはだけどな」

合つてなかつた焦点が俺に定まるとあわてて美月は髪を整えた。
「はっ、しまった、お前とは口を利かないことにしていたんだっ。

このエロ術師め！」

「まったくまだそれを言うか」

昨日あれだけ説明したのにまだ誤解が解けてないことが悲しい。

「ふん、今だつて3人を手当たり次第に凌辱りようじよくしようとしていたのだから！ わたしには分かっているぞエロ術師」

お前が犯人だ！ という風に人差し指を俺に向けながら迷推理を披露ひろうした美月。

にしても凌辱で・・・。

「うううん・・・くううん・・・だあれえ、こんな朝っぱらからあ・うるはいなあ」

西梨奈が目を覚ました。

「おい、お前のバカデカイいびきのせいで寝不足だぞ。でかいのは胸だけにしろ、この胸だけが取り柄えのビッチが」

「なんですつて美月、ビ、ビッチって何のよ。このあたしに向かつてそんな呼び方、謝りなさいよ、この協調性ゼロの分からず屋！」

「き、きさま・・・私が協調性がないだと・・・」

「そうよあんたなんかいつつも学校で一人じゃないのよ、友達なんかいないじゃないの！ この万年ひとりぼっち！ この腐くされぼっち！」

「く・・・ビッチにぼっち言われるとは・・・ずいぶん上から物を言う様になったな私より格下の使い魔のくせに、お前の家は金持ちだからどうせ学園にもコネで入ったのだろう。いい気なもんだ、昨日隼人と一回エッチしただけで」

「だから、エッチしてねえつつの！ おいおい、朝っぱらからケンカはやめてくれよ」

「はあ？ なんのと言つてんのよあんた、頭おかしくなったんじゃないの？ どうしてあたしがハヤトとエッチすんのよ！ できるもんならエッチしたいわよ・・・じゃなくて、被害妄想も良い加減しなさいよ美月！」

ずつとのぼせてた西梨奈は昨日のことを覚えていないのだった。

「ああん？ 被害妄想などしとらんわ、どうしてこのわたしがエロ術師ごときに被害妄想に陥^{おちい}らなければならぬのだ！ お前こそ会ってその日のうちに自分の体を捧^{さか}げるとはとんだ腐^{くさ}れビッチめ！」

「く・・・腐れビッチ・・・ですって・・・！？」

「いやいや二人とも落ち着いて・・・美月、昨日のは誤解なんだってっ」

「ハヤトは黙ってる」

二人は声を合わせてキレた。

「・・・優衣は信じるよな？」

俺はいつのまにか起きていた（こんなうるさいと起きるだろう）
優衣に言った。

「もちろんでございます」

「よかった」

感謝を表すために小さな優衣の頭をなでてやると「えへへ」と言
って優衣が笑った。

「あんがとよ、優衣」

「兄上さま。わたしは兄上さまがどんなおなごに浮き名を流しても、
かならずや私^{わたし}のもとに帰ってくるものとかたく信じております」

「・・・う、うん。お前の信じてるものはたぶん違うと思う」

それから、俺とパジャマ姿の3人は遅めの朝食（ほとんど昼食だ）
を取った。

体がだるくて料理する気にはなれない俺が用意した、コーンフ
レークに刻んだバナナを入れた簡単な軽食をおいしそうに食べていた。
どうやらコーンフ레이크も初めてらしい。

「む・・・お、おいしい・・・」

聞こえるか聞こえないかの小さな声だったが、美月がスプーンを
口に入れた瞬間に目を見開き『おいしい』のひと事を言ったのを俺

は聞き逃さなかった。

「毎日でも食べれるわこれ」西利奈も気に入っていた。

「どうだ、優衣も気に入ったか？」

小さな口にちよびつとずつ流し込む優衣に感想を求めた。

「かりかりとふわふわの触感がくせになります。そして兄上の香ばしい味がします。とてもおいしいです」

「俺のどこが香ばしいんだ？ それにいつ俺の味を知ったんだよ」
「やんわりと俺はつつこむと優衣は首をちょこんと傾げるだけだった。その姿がとてもかわいく映った。」

「さいてーだな。『俺の味を知る』なんて言葉よくもいたいたいげな優衣の前に出せたもんだ」

美月がなぜか絡^{から}んできた。

「そっぴや、隼人、すっごく寝むそうね。ものすごく変な顔してるわよ。右に出るものはいないほどの変顔よ」西利奈が言った。

「うるせーよ」

自分をイケメンとは思ったことは無いが変顔とは思ったことがないので心が痛い。

「あ、でも落ち込むことないわよ。言っとくけどあたしはあんたの顔そんなに嫌いじゃないから。どっちかっていえばタイプ」言いながら西利奈は顔を赤らめた。

「はあ、どうも」

西利奈に笑顔でタイプだと言われた俺はなぜか嬉しかった。

美月はスプーンを運ぶ手を止め眉間^{みけん}にしわを寄せる。

「ちっ・・・一度突き落としてからの甘いフォロー・・・いちいち西梨奈は隼人をたぶらかそうとして・・・油断できない。隼人を独り占めするつもりか」

美月がぶつぶつとなにか言ってたが聞こえなかった。

「ん？ 何だって、美月？」

「な、なんでもない。それよりも隼人。お前のだるさの原因は昨日わたしが魔法を使ったからだ」

「え？」

「あら、昨日教えなかったつけ。あたしたちの魔力は隼人からもらってんのよ。魔法使ったらそれだけ余計に魔力もらわないといけないの」

「そ・・・そうなのか」

これからは魔法使わせないようにしよう・・・と思ったが俺が命令しても聞きそうにないないいつら。本当に俺に服従してんのか？そこで聞いてみる。

「にしてもどうして俺が術師なのにお前たち使い魔はこんなに俺に反抗的なんだ？」

「ふん、お前のようなレベルの低い術師、いや、エロ術師には私たちは使いこなせない、ということだ。主従関係しゅじゅうけいが強くない」

「隼人も召喚術学んで力つけたら主従関係も強くなるわよ」

「ふーん・・・でも俺は召喚術師なんてわけのわからんものになりたくねえけどな」

「ちよつとしつかりしてよ隼人、あんたが力をつけなきゃわたしたち帰れないのよ」

「ふーっ・・・ったく・・・いろいろ大変になりそうだな、これから・・・」

しかし召喚術つつうのはどこで学ぶんだ？まさか書店に召喚術書が売ってるわけでもねえし。

「私わたしはお兄様の命令ならなんだって受けいれます。脱ぬげと申せつかえばこの場でも脱ぎます」

優衣がパジャマの上から順に第3ボタンまではずしていった。

「じゃ、じゃあ、命令に従ってくれ。これからずっと俺の前で脱ぬぐな」

「それはできません」

即答した優衣。

「言ったそばからすぐに意見を覆くつがえすな」

食事後、食器を洗う俺。

3人は手伝うことなくリビングのソファに座っていた。良い御身分なこった。

「おいしかったわね。なんて言う料理？ 隼人」

「コーンフレークとバナナ」

「へえ、コーンフレーク・ト・バナナ、ね。覚えとくわ」

「ほう、コーンフレーク・ト・バナナか」美月が繰り返す。

コーンフレーク・ト・バナナ。フランスのレストランで出そうな料理名。

「いや、コーンフレークとバナナはつながってなくて、コーンフレーク、つつうのに果物のバナナを入れたんだ。だから、覚えるんならコーンフレークだ」

「ハヤトって料理上手ね。作るの大変だったでしょ」

「んなとたねえよ。ただ買ってきた材料を混ぜただけだし、誰でも簡単に作れるぞ。そんなに気に入ったんなら毎日でも食わせてやるよ。安いしな」

美月は安いという言葉に反応した。

「そ・・・そうなのか。安いのか。ふん、どうりで安い味がした。わたしの高貴な舌には合わないようだ。しかし西梨奈、お前の安い味覚にはピッタリだな。さすが、安い女にはお似合いの安い味だ」

「たく、またケンカ始めんのかよ。」

「ちよつと美月、最後の安い女ってどういう意味よ」

「お前が尻軽ビッチ、という意味だ」

「ちよ、だから美月、昨日のあれは何も無かったつの」

何度も説明していたが聞く耳を持たない美月。

「ふん、どうだか、あの状況は誤解どころの話ではなかつ。わたしが警察なら現行犯で逮捕している」

「あんたねえ・・・被害妄想もほどにしなさいよ！ この被害

妄想女っ」

「被害妄想女だと・・・」

「その辺にしるよ美月」

「文句があるのかハヤト！」

「舌に合わないっていう割には、コーンフ레이크食べながらおいし
いってつぶやいてたの聞いたぜ」

「あ、あれは、あ、あ、あの時はだなっ」

恥ずかしそうにあたふたしてた美月であった。

はつきりと理解した。

美月と西梨奈は気が合わない。

二人は犬猿の仲だってわけだ。

そんな二人が一緒に生活する。

うむ・・・ケンカが絶えないことを確信する俺。

5 ゲームで汗

軽食を取った俺と3人は家で午後のひと時をくつろいでいた。相変わらず3人は依然パジャマ姿だが、だらしのないTシャツ1枚の格好・・パジャマもだらしがないが・・それよりもましだろう（にしてもパジャマ姿だと少し残念な気持ちになるのはなぜだろう）。

美月^{みづき}はダイニングで椅子の上に体育座りして文庫小説を熱心に読んでいた。

俺と西梨奈^{せりな}はリビングの床に座って格ゲーして過ごす。PS2のソフトで妹が熱愛するアニメのゲーム版だ。今ではそのアニメの派生ゲームをいろいろと買いこんでいる。ちなみに普段の俺は茉莉花^{まりか}に誘われない限り家でゲームはしないが今回は西梨奈^{せりな}に誘われてゲームに付きあってる。

優衣^{ゆい}は俺のあぐらのうえに頭を乗せて眠ってしまった（頭を俺向きにしているので優衣のあたたかい吐息^{といき}が股間^{こかん}にふきかかるのだが俺は全力でやせ我慢し意識をテレビ画面に集中させてる）。

西梨奈は金髪美少女キャラを選んだ。雰囲気^{きふき}が西梨奈にどこことなく似ている。

「ほら、この子あたしに似て可愛いでしょ？」

「ま・・・まあな」

同意してやったら満足そうにした。

「ふふ、そうやってこれからもあたしが可愛いことを認めなさいよ、うふふ」

バトルのステージを選ぶ。ジャングルの中っぽいステージだ。

「あたしテレビゲーム初めてやるのよ、ちゃんと教えなさいよっ」

「ふーん、お前の世界にテレビゲームないのか」

西梨奈は妹とゲームで仲良くなろうとしているらしい。

「さあ、これで茉莉花ちゃんとたっぷりイチャイチャ遊ぶわよ。体にベタベタお触りしてついでにペロペロするわ？」

「ペロペロはするな！」

全力でつつこむ。

1戦目がはじまる。

バトルがはじまった途端西梨奈はうるさかった。

「やんっ！　ちよっ、ハヤトっ、あんた手加減無さすぎっ、いやっ、あん！」

自分のキャラが攻撃受けるたび西梨奈はなぜか自分が攻撃されるように痛がって悲鳴を上げたのだ。

「ちよっとうっせーぞ」

「あん、でもっ、いたいっ！　ひゃん」

そう言う俺も西梨奈につられて「そりや、とりやつ」とか「オラ、オラっ、これでどおだ！」とか興奮気味に声を出していた。

そして勝負がつく時には二人とも息も絶え絶えになっていた。

「はああ・・・はああ・・・ああ・・・んはあっ」

「お、お前、キャラに自分を投影させ過ぎだぞ」

2戦目がはじまる。

「しょ、しょうがないじゃないのよ！　体が勝手にっ、反応しちゃうのよっ、きやつ、ちよっと、いやあん」

その後対戦を続けて俺の12戦11勝だった（最後の1戦はこの短期間でかなりの上達を遂げた西梨奈に足元をすくわれてしまった）。

「あああっ、んふうっ、はあっ、んはあっ」

西梨奈は激しい運動直後のように顔を上気させ額には汗をかいていた。

「はっ、はあ、ふうっ・・・あああハヤトっ、あたしっ、のど乾いた。ジュース飲みたい」

「みかんジュースで良いか？」

俺もへんな汗をかいて喉が渴いていた。

優衣が起きないようにそつと優衣の頭をそつと動かし床に置いて台所に移動し冷蔵庫からみかんジュースを出す。

ずつと熱心に小説を読んでる美月にも勧める。

「お前も飲むか？」

「いらない。それより、ゲーム中の二人の声をここから聞いているとお前が嫌がる西梨奈を無理やり犯しているように聞こえたぞ、このきちくはやく鬼畜隼人」

鬼畜で。

「たくましい想像力・・・お前の発想はどこから生まれてくるんだよ」

「きつとこのせいだろうな」

美月は読んでた文庫の表紙を見せてきた。

『鬼畜太郎と団地妻』・・・というタイトルの小説。

「なんつっーもん読んでんだ！どこから持ってきた！」

「わたる亘の部屋。本棚の奥にひっそりと身を隠していた」

「あのバカ親父・・・」

親のそういうものを見るのは恥ずかしい。

「なあ、鬼畜隼人、この本に書いてる通り団地妻と言うのはみなエロイものなのか？」

「んなわけあるか。フィクションだ」

「ふむ、日本人の生活について学ぼうと読んでいたのだが。無駄だったか？」

「ああ、無駄だったな」

性生活なら参考になったんじゃない？・・・とは口に出さない。

しばらくして母さんから電話があった。

『そう言えば、あの子たち着る服無いらしいから近くの店で買って来て頂戴。ふくまる商店街で良いから。いつまでもあんたのTシャ

ツとかパジャマじゃかわいそうでしょ？ お金は母さんの引き出しの中に入ってるからね。分かった？」

「・・・ああ、わかった」

体のだるさは買い物に行けるくらいに回復したので俺は了解した。言われたとおり引き出しから金を出す。

女の子の服なんて買ったことねえからどんだけ金を持つてきやいか検討つかないが念のために多めに（？）１人１万の計算として３万（俺の中ではかなりの大金）を俺の財布に入れた。

「つつわけで買い物行くぞ」

「わぁーい。人間界でショッピングねっ、はじめてだわっ、レッツゴー」西梨奈は腕を高く上げた。

「わたくしは、たとえ火のなか水のなか、地の果てでもお供します」

「その決意はありがたいけど商店街は火の危険も水の危険もないしすぐ近くにあるからその決意は胸にしまっとけ」

「ふん、しょうがない、ショッピングに行くか」

美月は面倒くさそうにしながらどこか嬉しそうだった。

「んーと、まあ、そんなでかい洋服店じゃねえから、そんな期待すんなよ」

つて、商店街に行く前に問題発見。

まずは商店街まで３人が着てく洋服はどうする？

まさかシースルーのポンチョとライダースーツとメイド服を着せて商店街を連れて回るわけにいかないし。

茉莉花まりかには悪いが優衣は妹のを着させるとして、残る二人は俺のＴシャツに・・・俺のパンツか？ いや、サイズが合わない、だぼだぼだ。

結局、二人には時代遅れだが今は肥えた母さんが瘦やせてた時の服しかねーな。

6 ショッピングと諭吉

結局、適当な母さんの服も妹の服も見つからず（3人が拒否したのだが）初めて会った日の3人の姿が商店街の中にあった。

3人は俺の後ろを歩いてる。

はあ・・・ため息出るし恥ずかしい。

俺たちが近くを通れば通行人は時に足を止め、時に商品を取る手を止める。

もちろん原因は後ろの3人。

彼らの視線は俺の背後にビビシ降り注ぐ。^{ふそそ}

ほぼ下着の美月・・・いやほぼ全裸の美月。^{みづき}

太陽光を全反射するくらいの白い肌がまぶしいぜ。

ライダースーツからはち切れんばかりの胸がはみ出す西梨奈。^{せりな}

ブラつけてないのでポロリ要注意！

ショーツが見えそで見えないチラリズムをまき散らすメイド服の優衣。^{ゆい}

こいつもブラつけてないから水透け注意！^{みすす}

「それでよく恥ずかしげもない」^は

俺が小さくつぶやいたが優衣に聞こえたらしい。^{ゆい}

「わたくしが見られて恥ずかしく思うのは兄上だけです。兄上さまの視線がわたしのからだをなでまわすように刺激し自然と濡れてしまいます」^{あにうえ}

優衣は見かけによらず（マジでそう思う）その口からおよそ出るはずの無い言葉が出てきて何度も俺はあきれてしまう。

「隼人は視線だけで美少女を犯す変態だから気をつけた方が良いでしょう」^{おか}

「しょうちいたいました。わたくしの体がたかぶりつづける理由がわかりました。兄上にずっとおかされていたのですね」

「犯してねえから！ ただ視線を向けたただけだからっ」

「ふつ、隼人はすぐにムキになるかわいい奴だ、ふふふつ、それでこそボケ甲斐がいがあるというものだ」

「いや、優衣はたぶんボケてる気はねえと思うけどな」

「なあ、隼人、これから買いに行くのもあのような不体裁ふていさいな衣服なのか？ 人間の服に対するセンスというものはたいがい受け入れ難がたいものだな」

美月は通行人たちを見て言った。

「んー、でもなあ、慣れないと人間界じゃ生活できんぞ」

あれ？ 今俺こいつらがずっと生活するものだと思っってしまったけど、すぐ帰るよな？

「ふん、露出の少ない服など、ダサくて外に着ていけないぞ。まだ着ない方がましだ、決めた！ 私は全裸で生活する！」

美月はさすがしく全裸宣言した。

「全裸で生活することをさすがしく宣言するなよ。つーかさ、美月たちの世界じゃ、なんというか、今着てるような刺激的な服装が当たり前なの？」

「これはパジャマだ。熟睡中に召喚されたと言っただろう。学園では制服を着ているんだがそれもこれに負けじ劣おとらずの露出度だ。でもそんなに刺激的だと思わないが・・・」

通いてゝ。そんなパラダイスな学園、いや、楽園に通いてゝ。

「興奮するか？」

「し、してねえよ」

思いつきり俺の顔はだらけてたけどな。

「ひとつ気になったんだけどさ、食事の事にしても服装にしても、人間の生活にお前らまさか人間界に来るの初めてなのか？」

「そうだ、人間界には昨日初めて来た」

そうだったのかよ。

「でも昨日、私たちは日本に呼ばれるのが多いつて言っただけがするけど」

「それは学園を卒業したプロの使い魔の話だ。学生はまずもって呼

ばれる事はほとんど無い。たまに優秀な学生が飛び級してプロの使い魔として働いてる。私は優秀だから今回お前に呼ばれた時に飛び級したものだと思ったのだが不良学生の西梨奈と優衣と一緒に召喚されたしお前はミスって召喚したというから残念だった」

「ああん？ 誰が不良学生だってえ？ 聞こえたわよ美月っ！」

「事実だろう、ふん」

美月は鼻を鳴らした。

へー、使い魔にも学校があるんだな。

こいつらはその学生で俺のように勉強にいそしんでいるのだろう。

日本語もそこで覚えたのだろうか。

まったく現実離れた話だ。

「二人とも、だべってないで早くしましょっ、『レンタル魔法少女マジカルカルマ』の再放送に遅れちゃうわ、マリカちゃんと一緒に5時からペロペロする、いや、観賞するんだからっ」

西梨奈は茉莉花とアニメと一緒に見たいらしく急いでいた。

「間に合うから大丈夫だ。それよりペロペロすんじゃねえぞ」

俺は西梨奈に言った。

「じゃあレロレロ」

「レロレロもペロペロもだめだっ！」

怖い、こいつの目、怖い・・・。どれだけ妹をペロペロしたいんだ。

『レンタル魔法少女マジカルカルマ』は妹が溺愛^{できあい}するアニメだ。

その愛しぶりは勝てば県大会ベスト4だという大切なバスケの試合とアニメの本放送の時間帯が重なった日、一点の曇りなく迷わずアニメを選んだほどだ。

録画しときや良いだろ、という俺の提案を「カルマは命よりも大事なの！ リアルタイムで戦つてるところを見たいのよ！ 応援するのよ！ あたしも一緒にカルマと戦うのよ！ 録画と生放送とはぜんっ、ぜん違うのよ！ あたしの決断に悔いなし！」と一蹴^{いっしょ}した。リアルよりもアニメを取ったお前にはリア充な学生生活はやって

こねえぞ、と妹の将来を案じた俺だった。

「あ、ちよつとあれ、アレ見てよ、あたしあのカワイイのが良い。ねえ、あれと同じの買って、ハヤトっ？」

金髪と巨乳を揺らす早足の西梨奈せりなが足を止めて言った。

視線の先には俺の通う高校の女子生徒がいた。

どうやらこいつは学生服を着たいようだ。

「無理だ、あれは学校の制服だからな、通う学生しか着れない」

「へー学校通えばあの服着れんのね」

西梨奈は何か思いついた顔をした。

・・・嫌な予感がする。

これって学校登校フラグ？

なんて思う俺だがこいつらと学校なんて冗談じゃない。

「おいおい、学校に通いたいとか言っつなよ」

「だめ？」

「だめだ！」

ぜってーこのフラグは回収しないぜ、と決意した俺。

俺たちは3人の年代に適した衣料品店にやってきた。

この商店街に似つかわしくないこじやれた店で店員さんは好印象な20代後半の女性だった。

「いらっしやいませ」

店員さんがこれぞ商売道具の満面の笑顔で出迎えた。

「な、何この人、なんでこんな笑顔なの？ 思いつきり笑ってるわ・・・気味悪いわね」

「え？ お前らの世界の店員さんは笑顔じゃないのかよ」

西梨奈は引いていたが店員さんには聞こえてないのが幸運。

「3人とも、かわいらしくて珍しいお衣装いしやうですねえ、コスプレの方ですか？」

店員がズバツと言ってきた。

「コスプレ？ なんだそれは、私たちはそんなものではない。使い

魔だ」

「つ、使い魔？」

使い魔と言うワードを前にして店員のスマイルが半減。

分かるよその気持ち、俺も初めて聞いたときにぞっとしたから。

「コ、コスプレで正解です！ 今度学祭の出し物でコスプレするんですよ！ あははっ。今日は学校帰りにこいつらの買いものに付き合ってやってんすよ」

俺がてきとーに紛^{まぎ}らわすと店員さんのスマイルは100パーセントに復活。

「そうなんですか。良いですねえ学生って、いろいろ経験できるのなんて学生のうちですからねっ」

「はは、そうですね」

「じゃあみなさんお友達ですか」

「いや、私たちは全員兄^{きょうだい}妹だ。この色気のない男は私たちの兄だ」

「え？ お兄様？ ずいぶん似てないお兄様ですねえ、特に目鼻立ちが・・・」

まじまじと俺の顔を見てきたなんて失礼な店員、こんな店出てっ
てやる。

「妹3人は母親似でこいつは父親似だから、な、兄さん」

「あ、ああ」

そっということにしてやる。

この場で泣き崩れたいほど悲しいけどなっ！

「なるほど・・・はあ、なるほどねえ」

なるほどってなんだよ！？

なに納得してんの！？

しかも納得しきってないし！

そんなに俺とこいつらが同じ親を持つことが信じられないのか！

こんな店二度と来ねーかな！

「ハヤト、早く買ってよ、マジカルカルマはじまっちゃうわ、茉莉花ちゃんとべたべたできないわ」

「ああ、そうだな、あの、店員さん、この3人に合う服を上下揃えてやりたいんですが・・・できれば何着か・・・しかも安く」

「わかりましたよ、それではさっそく、こちらなんかどうですか？」

それから3人は店員に勧められた服を試着し、感想を求められたがすべて却下きやつかしそうになったので俺がかわりに似合う服を選んでいった。

そのように順調にこの店での買い物は終わった。

他にも買ってやりたいやつがたくさんあったが予算オーバーのため断念。

途中トラブルはあった。

たとえば。

「こちらはいかがですか？」

店員に連れられ初めて試着室を利用する西梨奈。

「じゃあ、お兄さん、試着し終わったら呼んでください」

店員に任された俺は西梨奈の着替えを待っていた。

が、しばらくしても開かない。

「どうした」

開けたら着替えてない西梨奈。

「って、お前、着替えるよ」

「あら、誰か着替えさせてくれるの待ってたのに、ハヤト着替えさせてよ」

「どこのお嬢様だお前は」

「じゃあさあ、ファスナー下ろしてくれない？ 届かないのよ」

金髪をたくしあげながら俺に背を向けた西梨奈のファスナーを下ろす。

「ったく、しょうがねえ奴だな」

うなじがセクシーで少しドキドキしていた。

「もう良いわよ」

「どうだ、似合ってるか？」

開ける俺。

全裸の西梨奈。

「ぶっ」噴^ふきだす俺。

「いやん？ エッチ」

急いで閉める。

2日連続で自分の家族以外の女の裸を見ることになるとは（戸籍上は家族だが）。

「いけずね、ここは興奮してあたしに襲いかかってくるところでしょ？」

ちくしょう、完全に使い魔に弄^{もてあそ}ばれてる。

トラブルはまだあった。

「お客様ッ、お客様ッ！？」 し、試着室はあちらでございます！」

店員の困り声がする。

俺が振り向くと・・・。

全裸の優衣。

この流れはマストかよ、マストで全裸かよ。

「ばっ・・・かやろう」

優衣は店の中で堂々と着替えていた。着替えた場所がウィンドウの近くなので店の前を通る通行人はぎょつとした目で優衣の裸を見ていた。

「お客様、困りますっ」

店員は顔が真っ赤だった。

状況を飲みこめない優衣はぽかーんとしていた。

「あはは、すいません、ちょっと常識が通じない子なもので・・・あはは」

「お前ら・・・人前で脱ぐなよ」

俺はこんなことも教えてやらなきゃならないといけないかと思うと悲しくなった。

「その、美月のあね^{あね}がここで着替えてよいともうされたので」

「美月・・・」

俺が睨^{にら}むと美月はしたり顔でほくそ笑んでいた。

「・・・お前、優衣をだましたろ」

「ふん、さてなんのことだか」

こいつもしかしてS?

「ふふ、しかし人を貶^{おとし}めるといふのは実に気持ちの良いことだ」「いやDSだな。」

そのようなトラブルを経て店を出た。

そして次に訪れたのは女性物の下着店だった。

当然これも必要だろう。

しかしここは入るのをためらうなあ。

「お前たち好きなもの買ってきていいぞ、ほら、金渡すから。俺はすぐその本屋で立ち読んでから、買ったなら呼んでくれ」

俺が財布を渡すと美月が福沢諭吉を一枚ぬきとった。

「ほう、これが？金^{かね}?というものか、さっきもこの紙切れと商品交換していたな。学校の授業で習ったことはあったが実際に見たのは初めてだなあ」

美月は万札を指でつかんでひらひらと空中に泳がしていた。

「良いか？ 足りなくならないように考えて使うんだぞ」

「了解した。考えて使う」

その後俺は魔法を使うなということに注意し忘れたことを後悔した。

美月は本当に考えて万札を使った。

「お前ら・・・こんなにどうしたんだ・・・」

ぎゅうぎゅうにつめられた大きめの紙袋を5つを3人は手分けして持っていた。

中には下着以外にも、多種多様な洋服が詰まっていた。

「お前の言うとおり考えて金を使ったぞ」

美月が自慢げに言ってみせた。

さつき衣服店で予算オーバーのために買えなかったやつも入っていた。

「お金つてやつは便利ねえ。人間は金には目が無い、って理由も分かるわ。はいこれお財布」

「・・・・・・・・」

西梨奈が返してくれた財布には、なぜか俺が渡した金額以上の万札が入ってるのを俺は見ぬふりした。

「・・・・・・・・」

そ、そうだ、こいつらは短期間で高額アルバイトで儲けたんだ・・・。

そ、それかパチスロで儲けたんだ・・・。

俺はあえてその理由を聞くことはしない。

聞きたくねーんだ！

だ、断じて魔法使って万札をコピーたんじゃねえっ！

ぜ、ぜってーに通貨偽造罪の片棒を担いだりしてねえかなー！！

帰り道、パンパンにふくれあがった紙袋5つを持たされた。

家についた時にはへとへとでソファに寝ころび、夕食をつくれと西梨奈に起こされるまで爆睡した。

だがこの疲れは犯罪のために魔力を吸い取られたせいであつたんじゃないよ。

荷物持ったから疲れてんだよ・・・きつと。

がさがさと整理される洋服の間から万札が10枚以上落ちてきたのを見たのはきつと幻！

そうだ、あれは福沢諭吉のブロマイドだ・・・きつと。

7 学校登校フラグ

日曜日の早朝。

9時にセットした目覚ましを止めた。

ふと、寝てる俺の隣に違和感を感じる。
誰がいる。

人のぬくもりと肌の柔らかさ。

見るとタオルケットに浮かぶ人の形。

しかしタオルケットが頭まで隠っていて誰だかわからない。
それをがばつとめくる。

「ま、まりか・・・」

寝てたのは茉莉花^{まりか}だった。

しかしなぜ俺のベッドで寝てんだよ。

妹が俺のベッドに来るなんて考えてもみないことだった。

茉莉花が小さい頃（小学年低学年まで）は時々俺のベッドに潜り込んできた事はあったが今では考えられないことだ。
体を揺すって起こす。

「うううん、おにいちゃん・・・」

「おまえ、なんでここで寝てんだ？」

「う、うーん・・・お・・・おにいちゃん・・・こわかったよお」

茉莉花が泣きそうな声をだす。

「どうした？ 怖い夢でも見たのか？」

「うん。こわかったの」

茉莉花は泣きべそかきそうになりながら思い出す。

「まりかが寝てたら金髪の女の人が部屋にはいつてきて・・・変なことぶつぶつしゃべりながら近づいてきて・・・それで・・・ひつく・

・こわかったよおつ。夢じゃないくらいリアルだったのお」

金髪 Ⅱ 西梨奈。

「またあいつか」

たしかに悪夢を見ていた・・・が、たぶんそれは夢じゃなくてリアルだ。

西梨奈のやつ・・・このままだとほんとに茉莉花を襲いそうだな・・・。

「お前はもう少し寝てるか？」

「う、うーん・・・ねる」

二度寝に入る茉莉花を残し俺は部屋を出た。

リビングには昨日買ったピンクのＴシャツに白いスウェット姿の西梨奈がテレビ画面に齧りつくように『レンタル魔法少女マジカルカルマ』を観ていた。

西梨奈の姿を見て感じる残念な感覚はなんだろうな・・・やっぱり露出度高い服を期待してたのか俺。

「お前なー、勝手に茉莉花の部屋に侵入して不審者になってんじゃ・・・」

俺は西梨奈の不気味さに戦慄すら覚えた。

「ぬふふ・・・」

振り向いた西梨奈の目は真っ赤に充血し、およそ美少女とは思えない気味の悪い笑みを浮かべていた。

「せ、西梨奈・・・お前、目が真っ赤だぞ・・・寝てないのか？」

「ぬふふ・・・これで完璧よ・・・DVDをばっちり予習したわ・・・第2期の3話までしか見れなかったけど・・・」

テレビ画面は『レンタル魔法少女マジカルカルマ』を映していた。そういや昨日の西梨奈は茉莉花とカルマを観たのだが、その途中アニメを知らないこいつが茉莉花を質問攻めにした結果リビングから追い出されてしまい、その後リベンジを誓いマジカルカルマ全話

観賞を挑むと決意した西梨奈だった。

一期を13話とすれば二期3話まで合わせて16話。16x30分で8時間観賞し続けたことになる。

「まさか一睡^{いっすい}もせずに観てたのか・・・」

「ふふふ・・・寝不足だけど大丈夫。メルリンツカラリンツリカルマジカルッ（・・・たぶん回復呪文）。ほらぜんぜん平気よっ？ リロリンっ？」

リロリンって・・・毒されてる、完全にカルマに毒されてるよこいつ。

さらに机に並べた大量のマジカルカルマのDVDに顔をうずめてひと言。

「カルマちゃん、いっぱいいいっぱあい？」

うわー・・・ばかかこいつは。

昨日のゲームといい・・・こいつは純粹なのか、あるいはただアホなだけか？

「ぐふふ・・・茉莉花ちゃんにカルマちゃんのコスプレさせてペロペロ・・・」

うむ・・・こいつはただのアホだ。

俺は朝食を10分かけて作る。

母さんはすでに喫茶店^{きっさてん}だろう。

学校のある日は母さんが朝飯を作ってくれるけど、休みの日は俺が自分たちの分を作っている。

5枚の皿の上にこんがり焼いたトースト目玉焼きと茹^ゆでたソーセイジ、そしてプチトマトを乗せた。

コーヒーも淹^いれる。

俺はコーヒーの香りが好きだ。

茉莉花が『マジカルカルマ』を愛するように、コーヒーを愛する粹^{いき}（自分じゃそう思ってる）な高校生だ（思うのは自由だ）。

母親が喫茶店から持つてきてくれる挽きたての粉から淹れるコーヒーの香りが今では得も言われぬ快感となってしまった。

俺の顔が恍惚の表情を浮かべる。

美月が隣にいることにも気付かないほどさぞやだらしない顔をしていた。

「エロ術師、何一人で思い出しオオニ〇してるんだ」

「お、おまえ、い、いつのまに！」

紺と白のボーダー柄のワンピース姿の美月、そして赤いキャミにホットパンツの優衣。

自分の恍惚の表情を見られ顔が熱くなる。

「黒い液体に顔を近づけながらハアハアと気持ちの悪い」

「兄上のあえぎ声は私の心のなかの、兄上さませんようボイスレコーダーに記録しました」

「そんなレコーダー今すぐリサイクルショップに売ってこい」

「わたくしはその黒い液体にしつとしてしまいます。御手のいんりょうの名はなんと申すのですか？」

「コーヒーだ。飲んでみるか？」

優衣はくんとコーヒーに近づけた鼻をひくひくさせていた。

「はあ・・・良い香り」

「だろう。さすが優衣だな」

俺は上機嫌になって優衣の頭を撫でてやった。

「んん・・・」ぽーっと優衣は目を細めて放心していた。

「さつ、朝飯だ、顔洗ってこい」

二人を洗面所に行かせると茉莉花がやってきた。

その足音に西梨奈が反応する。

「はうつ、まりかちゃあん、ねえ、ねえ、カルマ一緒に観ようっ」

「きやつ」

茉莉花は俺の背に隠れた。

「ねえ、ねえ、カルマは後で観るとして、とりあえずお姉ちゃんっ

て呼んでよう」

「いやっ！」

あきれるくらいの妹萌え。

「ああんっ、その嫌がる表情もかわゆいつ、かわゆすぎるっ」

「ひゃっ」

うぜー、こいつ、うぜー。

「やめてやれよ、西梨奈、茉莉花が困ってんだろ」

「もうハヤトお兄ちゃん、この超美人妹のお願いが聞けないの？」

リロリン？」

両手でハートマークを胸元につくってから腕を伸ばして？を俺に飛ばしてきたが俺はATオイルドで弾き飛ばしてやった。

「んなこといいから、朝飯だ、テレビ消してとっとと歯磨いてこい」

「もう、ハヤトお兄ちゃんは恐いですねーまりかちゃん、恐いお兄ちゃんなんかほっとして優しいお姉ちゃんのところに来てっ？あ

たしがまりかちゃんの歯をぴかぴかに磨いたげるわっ」

「やーっ」

完全拒絶の妹は洗面台に走って逃げてった。

「なんで茉莉花ちゃんはなついてくれないのよおっ、ハヤトなんでなんでよー、もうっ」

「お前・・・自分で自覚ねえのかよ」

「決めたわ、ハヤト、あたし学校通うわ。そしたら茉莉花ちゃんと学校でもずっと一緒だわ」

くそ、また立ちやがったな登校フラグめ！

「無理だ。茉莉花は中学校でお前は高校に通うことになるから茉莉花とは一緒の学校に通えねえよ」

「ふーんそーなの・・・残念」

西梨奈はとぼとぼと洗面台に向かった。

どうだ、参ったかフラグ。

そのまま倒れてる！

二度と立つんじゃねえぞ！（いや、これ前振りとかそういうんじ

やねえからな！)

食事中の西梨奈は茉莉花にお姉ちゃんと呼ばせようとしつつこい。
そんな中、美月が西梨奈を先を越した。

「なあ、まりか。私を呼んで見ろ」

「み・・美月お姉ちゃん・・・」

美月のことをお姉ちゃんと呼んでいた。

「ちよつと美月っ、どうしてあんたのことは呼んであたしは呼んでくれないのよ！」

「ふん、格の違いだ。致命的欠陥だらけのお前に茉莉花だけじゃなく誰もなつくことはしない・・・」

「きーっ、あんたこそ偏屈で近寄りがたい女のくせにずるいわよ、これでもくらって地獄に落ちなさい！ ギガントハリケンクルリンマジカル〜ツツツ（・・・たぶん攻撃魔法の呪文）」

「・・・」

空気が白けて凍る。

美月はかまわずコーヒーをおいしそうに飲んでいる。

「ふむ、このコーヒーうまいな」

「あんた舌へんなんじゃない？ こんな苦くてまずいの」

「お前のバカ舌が子供なだけだ。もう一杯飲もうか。おい、茉莉花、美月お姉ちゃんにコーヒーのお代わりだ」

「うん。すぐいれてあげるね、美月お姉ちゃん」

どこか演技してるみたいな従順な妹。

「おいおい、美月・・・なんで姉ちゃんって呼んでんだよ、しかもお前のいいなり」

俺にも注いでくれない妹が従順すぎる。

美月はその理由を俺にだけ聞こえるように小さく話す。

「メイド服だ。やはりあのメイド服のことを隼人**に**はれたくなかつたらしい。ばらして欲しくなければ私の僕になれと言ったら喜んで受け入れたぞ」

「脅おどしてんじゃねえよ」

「ふふ、若くて従順な娘は実に可愛かわいがりのあるものだ。昨晚の私は久しぶりに3度も絶頂ぜっちょうを迎え茉莉花まりかの体を存分に堪能たんのうしたぞ」
妖艶ようえんな笑みを浮かべた美月であった。

「ぶっ」

俺は飲んでたコーヒーを吹きだした。

「お、お、おまえ、まりかになにしたんだっ!？」

俺があせる様子がおかしかったのか美月はぶつと笑う。

「ぶっ、冗談だ、冗談、私が興味があるのは茉莉花ではなく、はや・
・ゴホンっ、いや何でもない。なあ隼人。ここは妹の気持ちをくみ取り黙っておけばよいだろう」

この女王様体質め。

二人で密談してたのが気に食わないのか西梨奈が怒りだす。

「なに二人でこそそそしてんのよ! ハヤトお兄ちゃんみんなのお兄ちゃんよ、一人占めしないでよ」

「放置されるのもプレイの一つだと美月の姐御あねごに教えていただきましたので優衣ゆいはあえてなにも申しあげません」

「お前たち。羨やうましいいか? 私と隼人兄ちゃんはやととラブラブで羨やうましいか?」

「ぬぬぬ・・お兄ちゃんとイチヤイチヤって・・・羨やうましいに決まってるわ!」

「悔しかつたら私からお兄ちゃんを奪ってみろ」

「美月の姐御あねご、どんなに優衣ゆい以外のおなごにうつつを抜かしたとしても最後は優衣の元に戻ってくるのでどうかあしからず」

なんで朝っぱらから俺争奪戦?

ドンッ!

そんなとき茉莉花は美月の前にコーヒーを荒々しく置いた。

そして声を荒げる。

「さっきからお兄ちゃん、お兄ちゃんて言わないでよあつ!」

「ど、どうした、茉莉花」

怒っている？

「きゃっ、まりかちゃんか怒ってる、くあわいい？」

「ほう。隼人^{はやと}を私たちにとられると思っっているのか」

「むー」

「凶星だったようだ。」

「そ、そうなの？ ハヤトをあたしたちにとられると思ってやきもち焼いてるの？」

「そ、そんなんじゃないもんっ！」

「茉莉花は階段をどたどた上がったっていった。」

「ふう」

「俺はため息をついた。」

「朝から賑^{にぎ}やかすぎる……。」

「茉莉花がいなくなっただけで話を替える。」

「ところでさ、召喚術ってどこで学ばいいんだ？ お前らが教えてくれんのか？」

「私たちは使い魔だ。使い魔の勉強しか学んでない」

「そうねえ、魔法界に魔術学校があって、みんなそこで召喚術を学ぶんだけど、人間界には無いしね」

「方法は一つしかない。人間界に住む召喚術師に弟子^{でし}入りするしかないな」

「弟子入り？」

「しかしふむ。私たちは人間界の術師事情には疎^{うと}いし召喚術師なんて簡単に見つかるものではない」

「そりゃそうだな、人生で召喚術師なんて出会った事ねえし。」

「魔法界に連絡取れないのか？」

「無理ね。あんたの魔力じゃ通信できないわ」

「っーか、お前らってどんな魔法使えんの？ 洋服も魔法で生み出

せばよかつたんじゃね？」

俺はもつともな質問をした。

「私たちができることは隼人を浮かべたように物を動かすこと。隼人の言うように洋服を生み出せば良いというが、隼人の魔力では洋服よりももつと薄くて軽いものしか生み出せない。たとえば戸籍、諭吉とか・・・高校の編入手続きの書類とか」

「ふーん、そうなんだ」

・・・つて、高校の編入手続きつてなんだよ。

何気にまた出たよあからさまな登校フラグ！

完全無視だ。

つかこいつら確信犯で登校フラグ立ててね？

「そうだ、買い物で思い出したんだけど昨日見た制服どこにも売ってなかったのよ。あれって学校に通わなきゃ着れないんでしょ？」

「そんなに着たいのか。しょうがない西梨奈だな。なら・・・通うしかないだろうな」

おいおい立て続けにフラグつてもう対処しきれねえよ。

「優衣も制服を着て兄上さまにスカートの中をまさぐっていたきたいのです。日本の学校とはそういう場所だと美月のあねがおっしゃっていました」

「いや、誰もまさぐらねえから！ 学校はそんな卑猥な場所じゃねえからっ！」

あーあ、ほら言わんこつちやねえやな。

完全に立つちまったよ！

さつきからフラグ立ちっぱなしで倒れる気配なし！

俺は？普通？の高校生なんだよ！

ぜってーに俺の？普通？の学生生活を守るんだ！

こいつらと学校通うなんて想像もつかねえ。

想像もしたくねえ！

俺は？普通？が一番好きなんだよ！

しかし俺の普通はどこかに消えちまった・・・（涙）。

それは月曜の朝のホームルームだった。

ホームルームが終わりいつものように担任が教室を出て行った。いつもなら戻って来るはずのない担任が再び入室。

「今日からこのクラスでみんなと勉強することになった転校生を紹介する。さ、入りなさい」

教師にうながされると3人の制服姿の美少女が姿を現す。

教室がにわかに色めきだつ。

男子からは興奮の歓声。

女子からは羨望せんぼうのまなざし。

そして俺からは落胆らくたんのため息。

はいそうです登校フラグ回収に成功しました。

やったーっ、これで3人と学校に通えるー（涙目）。

っーか、どんな選択肢せんたくし選んでもこれって必須イベントなんじゃね、と思う俺だった。

8 青春ポイントは氏にました

そんなこんなで3人は俺のクラスの一員になクラスメートの前でそれぞれ自己紹介するわけだが・・・その自己紹介がとにかくアレなわけで・・・。

と、3人の自己紹介の前に私立高校一年生の俺とクラスメートとの関係を説明しておこう。

正直に言おう。

5月末現在、俺はクラスになかなかなじめていない。

1学期が始まってからひと月半、たいていの生徒は仲の良い友達ができ部活にも慣れて青春生活の一步を踏み出すことに成功したところだ。

が、俺は友達も少ない（つーかまだ特定の数人としかしやべったことがねえ）し、名前すら覚えられてねえんじゃね？

というのさ、わけがあるんだよ。

俺がこのクラスに入ったのはほんの2週間前だからなんだ。

クラスメートが一カ月以上仲を深めあつてんのに、俺は高校入学直前に親父が失踪（勇者になつてね）したことにより進路を見直さなきゃならなくなった。

自宅のローンも残つてたし、借金も少しあるなかの親父の失踪だ。親父の収入が無くなり将来のことを考えれば少しでも学費を抑えたかったから一年浪人して公立高校に入るといふことも考えていたのだ。

しかし親父の退職金が入った通帳が発見されたおかげで（たく、分かりやすい場所に保管しとけよ）学費の問題は解消された。

うちの家庭事情を考慮（きうりょ）してくれ入学を待ってくれた学校のおかげ

で、俺はひと月以上遅れたが無事入学できたんだ。

青春ポイント・・・それは青春謳歌度おつかを数値かんさんに換算したもの。

俺は自分の青春ポイントを考えてみた。

そうすると間違いなく俺の青春ポイントはマイナスからはじまっ
たんだ。

最初のポイントを取りあえずマイナス10ポイントとしよう。

俺は2週間でそれを少しずつ取り戻してきたんだ。

仲の良い友人を4人作り（人見知りな俺としては良くやったと褒ほ
めてやりたいよ）プラス3ポイント——合計マイナス7ポイント。
勉強の遅れを取り戻しプラス2ポイント——合計マイナス5ポ
イント。

心惹ひかれる女の子を見つけプラス3ポイント——合計マイナス
2ポイント。

そう、2週間で順調にポイントは回復してっ たんだ。

だがな、出会って三日、使い魔で妹でクラスメートで超美少女な
3人は教壇きょうだんの上で恥じらうことすらせず、以下のようなアレな挨拶あいさつ
したもんだから俺の青春ポイントがだだ下がりな事態に陥おちいってしま
ったんだ（つまりは氏しんだんだ）。

「こちらは今日からみなさんのクラスメートとなり一緒に勉強して
いく転校生です。3人とも阿部隼人君はやとの妹さんです。いろいろと教
えてあげてください。では簡単に挨拶あいさつでもしてもらおうかな」

そう言っつて50代男の担任は3人を教壇きょうだんに立たせた。

美月が長い黒髪をかきあげて良く通る声で自己紹介する。

「阿部美月です。兄の隼人と同じクラスとなり嬉しく思っている。

最近も風呂場で私の裸を覗のぞきハアハアと発情したり、横の金髪に風
呂場でエッチしたり、その隣のポニーテールを店の中で全裸にした

りと、少々アグレッシブな兄だがけっして悪いやつじゃない。まだまだいたらない隼人ともどもよろしく願います」

そう言っふがぶがて深々と礼をしてから顔をあげた美月が俺にウィンクした。

どうだ、うまいこと自己紹介できたろう、お前のこともさりげなくフォローしといたぞ、とでも言いたげなウィンクだった。

逆効果だ！ 逆フォローだよ！

しかも服屋で優衣を全裸にさせたのはお前だから！

「覗きだつて・・・」

「まじかよ」

「店内で妹を全裸にさせたんだつてえ」

「阿部君つてそんな人だったの・・・サイテー」

クラスのと口が俺を攻撃してくる。

くそ、俺はサイテーと言われ青春ポイントマイナス10——合計マイナス12ポイント・・・俺の2週間の努力は海の藻屑もくずと消えちまったじゃねえか！

次に西梨奈せりなが自己紹介。

頼む、俺をフォローしてポイントをあげるんだ西梨奈！

と思つたが、西梨奈にそんな期待できない・・・せめて普通に紹介してくれ、ケガしないでくれ・・・俺は念じた。

「西梨奈です。お兄ちゃんは美月にハアハアするような変態ではありません。ごくごく真面目まじめな男の子ですし美月のことはなんとも思つてません」

よし、よくやった、ナイスフォローだ。

これで美月の分は打ち消したか？

「だつてお兄ちゃんはこの超美人の妹のあたし、阿部西梨奈にしか興味ないんだからつ。昨日だつて服屋の試着室のカーテンを開けてあたしの裸に興奮したし、あたしは覚えてないけどお風呂場で裸どうし重なつたし、お兄ちゃんはあたししか見てないんです。そんなお兄ちゃんとあたしをよろしくお願いしますつ」

「どあああーっ・・・なぜこうなっちゃったんだ！」

西梨奈は会釈えしやくしたあと、美月に向かってふんっ、と鼻で笑った。

「おいおい、もしかして美月と西梨奈のやつ互いに張り合ってるんじゃないか？」

「ちょ・・・阿部西梨奈さん・・・なにを言ってる・・・」
教師が困惑していた。

「うわ、また覗きだって」

「しかも試着室でだつてえ」

「ぜったい試着室でやらかしたぜ」

「おいおい風呂場でも妹とやったのかよ」

「まじかよ、うらやまし、俺もあの胸さわりてえ」

「何言ってるのサイテーよ」

「そうよ兄妹きょうだいなのよっ、信じらんない変態よ」

ぐああああっ・・・痛いっ、痛いっ、心が痛いよおおっ！

ああ・・・事実が歪曲わいきよくしてるし・・・。

「っ！かなんで俺の事ばっか話してねえで自分のこと紹介しろ！」

俺は信じられない変態と言われ青春ポイントマイナス50――

合計マイナス62ポイント・・・取り返しつかなくなるって。

続いて優衣ゆうい。

もうひと言もしやべるな！

そこで一礼するだけで良いからなにもしやべるな！

「優衣ゆういともうします」

優衣がぺこりと頭を下げた。

「わたくしがお慕したいしておりますのは兄上あにうえただひとりでございます。

兄上さまは優衣のからだをまさぐり、もてあそび、いじりまわしております。優衣はそんな兄上さまに欲情せざるをえません。もう兄上に触られただけで優衣はイッてしまいます」

「イッてんのはお前らの頭だよ！」

くそっ！なんっ！ことをクラスの前で発表してんだよ・・・しまった・・・もはや取り返しつかねえ。

「まさぐる・・・もてあそぶ・・・いじりまわす・・・」

「妹に対してそんなことを・・・」

「ああつ、あんな可愛らしくて幼おさなげな子があんな言葉を・・・」

「ぜんぶ阿部君が教えたんだわ」

「触れられただけで・・・イク」

「調教・・・調教されてんだ」

「妹調教師なのよ・・・お、おそろしい・・・へ、変態よ・・・もうしゃべりたくないわ」

「そ、そうだわ、あたしたちに対しても・・・」

「きやつ、変な事言わないでよー」

「ご、誤解なんだよ、みんなつ、叫びてえけど信じさせる自信がない（悲）。」

俺は妹調教師の称号を得た・・・青春ポイントマイナス1000――

――合計マイナス162ポイント。

もう数えんのやめね？

そうして俺の青春ははかなく消え去った・・・って俺はあきらめねえよ！

頑張るよ（涙）

そうだ、3人に誤解を解かせれば良いだけなんだ！

そう、誤解を解かせ・・・いや期待できない・・・さらに変態の極みに俺を追いやるんじゃないかねえか？

そうして俺の青春ポイントは氏しにました。

誰かザオラルかけといて・・・。

9 神野つかさ（前）

休み時間。

俺は3人に不覚^{ふかく}にも見とれてた。

それにつけても制服姿の3人はとてつもなく美少女だった。

この学校の制服は県内の女子（いや全国の女子からも）人気のある制服で、制服目当てで親元を離れたり、遠方から通ったりする生徒も多数いる。

可愛い制服と美少女の組み合わせはもはや犯罪と呼んでいいんじゃないか？

うむ、美少女アイドルグループとしてこのまま売り出しても3週連続オリコン1位は堅いな（音楽プロデューサーじゃないが確信する）。

休み時間になると男子生徒は3人に声を掛けたくてうずうずしてたがあまりの美少女オーラに気後れしてるようで指をくわえて見るだけだった。

そんな男子の視線をしり目に3人が俺のところに来てくる。

「どう、可愛いでしょ？」

俺に顔を近づけながら西梨奈が訊^きいてきた。

「ま、まあな」

お前らは男の理想を具現化してるよ。

俺が頷^{うなず}くと西梨奈がくるりと一回転した。

「あはっ？　ありがとっ？」

ほんとに嬉しそうな笑顔で笑いかけてくるのだからこっちまで照れくさくなる。

にしても、こいつらいつの間にかこの学校の学生になりやがってど

んな手使ったんだよ。

「んなことより理由を聞かせてもらおうか。お前らが学校に通うなんて俺は聞いてねえよ」

俺が周りに聞こえないよう小さな声で話した。

「使い魔は主人に仕え、主人のそばを離れないのが基本ルールなんだ。主人が学校に通えば使い魔も通う」

美月が言った。

「だったら俺にひと言くらい——」

「だってさあ、隼人に言っても許してくれないでしょ？ 昨日学校に電話して学園長にアポ取って今朝早く学校来て美月が学園長口説き落としたのよ。で、さっそく登校よ？」

どーりで今朝起きたら家にいなかったわけだ。

母さんが散歩に出かけたと言ってたが学校で入学手続きしてたのはな。

入学のための書類も履歴書なんかも揃えたのだろう。

「学園長を口説くって・・・そりゃ私立だし多少の融通が効くかもしれないけど話しが急すぎる。よく学校の許可が下りたな」

「この私の話術力だから無論だ。私にかかれば誰でも口説き落とせる。経緯を簡単に説明してから入学の意志を明確に表す。そして身の上話を大袈裟に語り相手の同情をうまく引いて最後は泣いて落とす」

美月は自慢げに話した。

こいつ・・・母さんに同居の許しを得たことに加えて学園長も説得しやがって。

「今すぐ使い魔やめてネゴシエーターか詐欺師になった方が良いんじゃないねえの？」

俺が美月に感心していると優衣がスカートの裾を持ち、

「どうぞ、兄上好きなだけまさぐってください——」

と言ってスカートをめくりそうになったので、

「あほっ」

と軽く優衣の頭をぺこつとたたいた。

「ああんっ」

優衣がいかにもアレな声を出した。

男子の声が聞こえる。

「ちっ、さっきからいちゃつきやがって・・・」

「俺たちなんか声もかけられないのに」

「なんで阿部の妹があんなに美人なんだよ、羨まし過ぎる」

「くそ、あいつが兄じゃなかったらぶん殴^{なく}ってやる」

ぶん殴るって・・・今はじめて3人の兄で良かったと思ったかもしれない。

昼休みになると2人の女子と一緒に弁当を食べようと美月たちに話しかけた。

俺は聞き耳を立てていた。

「ねえ、一緒にお弁当食べましょうよ、美月さん。西梨奈さんと優衣ちゃんも一緒に」

「どうして私がお前と弁当を食べるんだ？」

「え？」

思ってもない冷たい美月の返事にその女子は戸惑いの表情を浮かべた。

「だ、だって、女の子どうし一緒に食べたら楽しいし・・・ね？」
もう一人の女子に同意を求めた。

「そ、そうよ、ねえ美月さん、わたしたち友達になりましょ？」

「ふっ、あいにくだが隼人と過ごすので断らせてもらう」

断っちまったよ、ふっー、友達になろうってやつを足蹴にするかよ。

「そ、そうなの・・・残念」

「で、でもさっきの挨拶もそうだけど、そんなに阿部君のことが好きなの？」

「父親は隼人と同じで母さんが違うんだが、見ての通り双子でも三

つ子でもない。つまり父は同時期に4人の女と関係を持ったのだ・
・・」

「うわ、また勝手に設定作りだしてるよ。」

「くそっ、すぐに話を止めなければ・・・。」

「と・・・その前にトイレに行きてえ。」

俺が戻るまで変なことになってんじゃねえぞ・・・そう思って教室に帰ってくると案の定大変なことになってました。

美月は自分たちの生い立ちを熱く語っていた。

二人の女子は涙を流して3人に同情していた。

「ひっく、かわいそうにねえ、ぐす・・・」

「隼人兄さんには毎日でもて遊ばれたが、これも実の母のためだと私は誓った。そして今では凌辱りやうじよくされることに快感になっている」

「な・・・なんてこと・・・やっぱり調教されてるのね・・・」

「わたくしは兄上さまのせい奴隷あにつえとして生きて参るしよぞんでございます」

「せ・・・性奴隷っ!?!」

完全に引いてしまっている二人の女子。

俺と同じく聞き耳を立ててたクラスメイトが俺の方をちらちら見ながらひそひそ話。

「た・・・耐えきれん。」

「も、もうだいたい手遅れだが・・・早く事態を收拾しなければ!」

俺は3人を黙らせるべく彼女たちの席の前に向かう。

二人の女子が「ひっ」と息を飲んだのは気にしない!

「おい、お前らっ、もうしゃべるなっ、いいからこっち来い」

俺が3人を教室から連れ出そうと手招きした。

「あはは、ちよっと3人お借りしますよお」

俺は好感を持てる笑顔(自分では精いっぱい笑顔)でその女子に笑った。

が、女子は、

「ち、近寄らないでっ」

と逃げていった。

おいおい、俺、完全に変質者扱い？

はあ・・・もう事態は收拾しませんでした。

「ああんっ？ 隼人ったら強引ねっ」

「兄上さま、これからみんなで逢いびきですね、優衣はとってもうれしいのです」

3人を連れ去るように教室から飛び出して行った。

またクラスのやつらがあらぬ噂を立てるんだろっとな、と思うと3人を男子トイレの前で待たせて少しばかり一人で（大の方の個室でね）泣きたくなった。

俺は3人を屋上に連れてきた。

学校の中で人気のない、昼休みに学生が訪れる場所ったらやつばここだろう。

「まったく、使い魔だったらご主人様に恥かかせるなよ、どーしてくれんだ俺の汚名！ 奈落の底に落ちた評判！」

「うむ。そうだな、確かにプライベートを明かし過ぎたか。人間界ではプライベートを無闇やたらに明かすところくなことになる、と学校で習ったがまさに今のお前のように困るのか、ふむふむ」

「ちげーよ、わざとらしく誤解されるようにプライベートを話すなってこと！ お前わざとやってんだろ！」

「まあ、そんなに落ち込まないでよ隼人、あたしが慰めてあげるからっ」

西梨奈が制服がはち切れんばかりの胸を寄せてくる。

「くーっ！ 反省してねーっ！ はああ・・・なんて羨のなってない俺の使い魔たち・・・」

俺が使い魔ワードを連発してると後ろから女の子の声が聞こえた。
「使い魔・・・」

俺が振り向くと二人の女の子が立っていた。

一人は黒髪ツインテールに真っ赤なリボンをあしらった制服姿の小柄な女の子。^{こがら}

なぜか手にはよく神社の神職がお祓い^{はらい}のために使う白いひらひらがついた棒を持っていた。

もう一人の銀髪で長髪の子は・・・服装が制服じゃなくて巫女服^{みこ}だ。

しかも巫女服を着てるのが和風美人とは正反対の、青い瞳にハーフ系の目鼻立ち、そして妖艶な微笑^{たずさ}みを携えた、まるで北欧神話の女神のようなウルトラ美人だった。

「み・・・巫女服？」^{みこ}

巫女服がはだけて両肩丸見え、ついでに胸の谷間がチラリズムを演出するセクシーなまるで花魁^{おいらん}のように巫女服を着こなす姿に思わず見とれる俺——はひとまず置いてこう。

「使い魔^{くたり}の件を聞かれたんだ・・・どんな言い逃れしよう。」

「あ、あの、使い魔^{くたり}っていうのはね——」

「邪悪な気の気配が屋上にしたから来てみたら・・・なるほどこういうことね」

俺の言葉を無視して黒髪ツインテールは一人合点^{がってん}したように頷いた。

「邪悪な気？」

そしてなんの前振りなく確信を付く。

「その子たちは使い魔^{くたり}ですね」

「へ？」

なんつー超意外な展開。

「な、なんで、そのこと・・・」

驚きで言葉に詰まる俺。

「やはりそうですか・・・わたしもあなたと同じ？召喚術師？をしている？神野^{かんの}つかさ？と申します。高校1年生です」

あらまー、こんなに簡単に召喚術師見つかっちゃったよ・・・。

なんて超急展開・・・。

「やったじゃないか隼人っ、召喚術師がこんなところにいたとは！」
美月が興奮気味に喜んでいた。

俺もこれで召喚術やら術式やら使い魔やらのもやもやが頭から一掃できる喜んで。

美月は説明こそしてくれるものの、細かいことまで説明を求めても教えてくれない(きっと人間に対してどう教えればいいのか分からないのだろう)。

この子はこっちの世界の人間だし俺でも租借できるような説明が期待できる。

「同じ召喚術師として以後お見知りおきを」

神野つかさはそう言って丁寧な会釈をした。
その会釈には気品すら漂っていた。

おおっ！

使い魔関連ではじめてまともな奴に出会えたことに俺はすごく感動を覚えていた。

「この子はわたしの使い魔のライチです」

神野つかさに紹介されたライチは礼をした。

「こんにちは、よろしくおねがいします」

頭をあげた時の上目遣いが妙に色っぽかった。

「あ、ああ、こんにちは。よろしく」

おおっ！

使い魔がちゃんと挨拶してる！

俺の3人の使い魔には持っていない礼儀正しさに感動！

常識的で利口そうな神野つかさだったら俺を救ってくれるに違いない。

神野つかさはまさに救いの神だ！

騒がしい最悪の日常から普通の日常へ俺を戻してくれる！

と、神野つかさを救いの神だと認識した俺だが、数分後に『こ、

この妄想ド変態女っ！』と突っ込みを入れるなどとは思いもしなかったその時の俺でした。

10 神野つかさ（後）

「どうも、はじめまして、高校1年生の阿部隼人です。そこでいつらが俺の使い魔の美月、西梨奈、優衣です」

3人の使い魔はそれぞれ自己紹介した。

神野つかさは品定めするように3人を観察した。

「ぐへっ、まさにハーレムまさに夢のような現実！ こんなハーレムありえないっすよ、クールビューティーにダイナマイトボディにご奉仕天然っ子！ まじでパねえっすっ！ よだれダラダラ・・・くはぁうっ」

ぶつぶつと小声で超早口でつかさは何やら言ってたが聞き取れなかった。

ハーレムがどうこうつぶやいてた気がしたが・・・ま、まあ気のせいだろ、こんな上品そうな子からハーレムつつう単語出てこねーよな。

「隼人さんですね、よろしくお願いします。実はわたしは召喚術師でもあります、学校の近所の神社で神主かんぬしをしております」

「へー、それって神事を行う神職ですよ」

神々しいほどの清楚さを身につけてるわけが分かった気がする。

「はい。神野家は300年以上先祖代々睦代神社むっしろの神主を務めております」

睦代神社は俺の家の近所で、どこの町にでも建ってる小さめな神社だ。

しかし高校生で神主か・・・珍しいな。

この子の持つてるひらひらの棒は神主の道具なのだろうか。使い魔に巫女服を着せてるのも理由があるのだろう。

「それでつかささん、隼人を弟子にしてもらえませんか？」

西梨奈がいきなりストレートに尋ねやがった。

「おい、話が急すぎるっつの」

意外な提案につかさは目をぱちくりさせるつかさ。

「弟子？ 隼人君をですか？」

俺は事の次第をつかさにざっと説明した。

「ええとー、実はですね・・・」

神野つかさとライチは時折相槌をうちながら俺の話^{ときおりあいづち}を熱心に聞いていた。

親身になるとはこのことだ、と俺の使い魔に教えてやりたいくらいの熱心さだ。

話が終わるとつかさは俺に同情してくれるように優しく微笑みかけてくれた。

「なるほど、隼人さんのお立場は理解しました。3人の召喚と返還に必要な術式が入手不可能でさらに描き直すこともできずに困ってるんですね」

「そうなんですよ！」

俺は自分の悩みをストレートに話せる人間ができたことにマジで嬉しかった。

「それで、こいつらを元いた世界に戻すにはどうすりゃいいんですか？」

「うーんと、隼人さんが自分の手で契約を破棄^{はき}するしかないと思います。しかしそれには召喚術の知識がありませんし魔力も一般人並みですので、ご自身での契約破棄は今の段階じゃあ無理でしょう。そのため知識と魔力を得るしかないですね」

「やっぱり召喚術を勉強しないとダメですか・・・」

学校の勉強もめんどくせーのに、召喚術の勉強だなんてしちめんどくせーことしないといけねえのかよ。

「それが嫌なら他の方法があるんですが」

「まじっすか、教えてくださいっ」

「私のような第3者の召喚術師が契約を強制的に破棄させるんです。つまり無理やり契約を断ち切るんです」

「強制破棄・・・できるんなら頼みます、神野さん」

「うーん無理ですね」

無理って・・・なら言ってくれるな。

「強制破棄は従者と主人の体に大きな負担をかけてしまいます。特に隼人さんは召喚術師じゃないんで、下手すれば生命エネルギーをすべて失って死ぬかもしれません。死ぬのが恐くないなら別ですが」

「恐いつすよ」

「でしたら自分で契約破棄する術を身につけるしかないですね」

「はあ・・・やっぱそーなんすか」

そこで美月と西梨奈が横柄おうへいな態度で質問する。

「で、どうなんだ？ 隼人を弟子にする気はあるのか、貴様」

「あんた、隼人に召喚術教える気なんてあるの？」

貴様とかあんた、て・・・物を頼むのに失礼な呼び方は主人として恥ずかしい。

美月も西梨奈もなんでか知らねーけどだかムスツとしていた。

「えっと、弟子でも生徒でも良いんだけど俺にその術とやらを教えてほしいんだ。もし召喚術師とか神主の仕事が忙しいなら、週に何度か少しの時間だけでも先生になってほしいんだ。君しか頼れるのはいないし」

つかさはうーんと悩んでから大きく頷いた。

「・・・昼の師弟関係が夜に逆転して弟子が師匠に色ごと、秘戯ひぎを教える・・・ぐひひっ・・・教室で体育館で職員トイレで教師と生徒の背徳性交、そこに美少女3人セットが加わり大乱交パーティー・・・こ、こんなおいしい話は二度とめぐって来ませんぜ、ぐへへっ」

と、またも聞き取れないほどの速さで独り言。

なんてしゃべったのか分からんが悪寒おかんが走るのはなぜだ。

「か、神野さん、なんか言いました？」

「いえいえ、なんでもありません、あつちの話です」

「あつちの話？」

なんか独り言してる時の彼女の表情・・・変質者の匂いを感じるが・・・きつと気のせい。

「で、どうでしょうか、教えてもらえますか？」

俺が訊くとつかさは迷いなく快諾^{かいたく}してくれた。

「わかりました。わたし神野つかさが喜んでお引き受けいたしましたよう」

「ほ、ほんとに良いんですか？」

「わたしも使い魔の主人である身。親心なんでしょうか、他人の使い魔が困っていても放つてはおけないんです」

な・・・なんて良い人なんだ、まるで天使じゃないか・・・素直に感激した。

俺はつかさに（尊敬の意味で）熱い視線を向ける。

数秒視線が交わったつかさの顔はぽつと赤くなった（え？ どうして赤くなる！？）。

「やんつ、そ・・・そんなに見つめないでください、体が火照^{ほて}ってしまいます・・・」

「え？ 火照る？」

「おっほん、なんでもありません。では、さつそくいろいろとアドバイスを差し上げたいところですが今は昼休みでゆっくりと話せませんしここは学校、誰かに聞かれると変な誤解が生まれてしまいます。ですので後日改めてお会いしましょう」

「そうですね、俺も聞きたいこと山ほどあるし、じっくり質問した方が良いでしょう」

俺と神野つかさは携帯のアドレスを交換し後日改めて会うことにした。

ここまで話がとんとん拍子。

二人とも礼儀正しいし上品だしうまくやってけそうだ。

まあ、つかさの持つてる学生服に不釣り合いのひらひらの棒とラ

イチのセクシーな着こなしが玉に瑕きずだけだな。

「ふん、よかったな隼人、これで私は帰れる。だがひとつ忠告しておく。召喚術を教えてもらうのは良いが、変なことは教わるなよ」

「なんだよ変なことって？」

「アナ。セツ。スとか」

「教わるか！ 神野はお前じゃないんだからそんなこと教えねーよ」

「いや、分からんぞ！ ほら、きつとつかさはあの棒を使って自慰にふけてるんだ！ そう考えればなんて卑猥ひわいな棒なんだ。お前もその棒をお前のアナ。につつま——」

「つつまねーよ！ それに神野さんはそんな娘じゃねえし神聖な棒になんつー想像してんだ！」

美月がアホな忠告した次に西梨奈が続く。

「ハヤト、浮気なんかしたらあたしの胸を二度と揉もみしだかせないんだからねつ。揉みたかったら浮気なんかしないのよっ」

「浮気って・・・俺は別に本命いねーし誰と付き合っても浮気じゃねえし西梨奈の胸を揉みしだいたことなんてねーつつの」

「優衣はりっぱな胸を持つてはおりませんがメイド服が似合う自負を持つております。なので優衣がメイドをりょうじよくさせる気分をいつでもご賞味させますので、どうかつかささんをりょうじよくせずに優衣をりょうじよくしてください」

「おい、俺がいつメイド好きだと言ったよ、そんなことされても俺は嬉しくねえぞ」

俺が3人にツツコンでるとつかさの息づかい、はあはあと荒くなってきた。

気分悪くしたのか。

そうだろう、きつとこんなアホな発言するアレな使い魔なぞ見たことねーだろ。

「ごめん、俺の使い魔はライチさんと違ってかなり変わってるんで、あはは」

俺が心配してつかさの顔をのぞいた直後、つ——っ、と鼻血

を出してしまった。

「うわ、鼻血つ、大丈夫か、保健室行くか？」

あれ・・・なんかつかさの顔がこわい・・・。

「も、もう、我慢できない・・・こんなにいちやつきやがって・・・はあ、はあっん？」

彼女の全身から狂気にも似たオーラが放たれていた。

俺はその時に察した。

ヤバイ、こいつヤバイ奴だ。

「わたしからも質問しても良いですか？」

「・・・は、はい」

「4人で毎日毎日やりまくってるんでしょね。それはそうよ、だって高校生男子の頭の中は95%性欲でできてるんです。性欲の塊かたまりつすよ。今朝も寝起きに一発ヤツてきたんですか！？ いや一人一発だから3発ですかあ？ どうせ登校中でも学校でもヤツたんでしょね、どんだけ絶倫なんですか！ この種馬召喚術師め！ いーな、いーなあ、あたしも混ぜてもらいたいなあつ、ハーレムに混ぜてもらいたいなあつ、あはあつ、ぐふふへえつ」

ぐああつ・・・こいつもアレなやつだったああつ！

俺の期待感返してくれ！

こいつに一生ついていくと俺に言わしめた期待感返してくれ！

ご主人様の変貌へんぼうぶりに慣れているのかライチがため息をついて首を振る。

「またこれか・・・うちのご主人はリア充見るといつもこうなのよねえ。自分もリア充なりたくて、仲間に入れてと彼らに近づくけどいつもこんな感じに何のよね。これじゃあ友達作んのもままならないのよ」

俺は別にリア充じゃねえけど、傍はたから見れば美少女3人といつも一緒ってことはリア充なのか？

「そ、そーなんすか・・・まあ、このテンションを見る限り当然だと思います」

「ぐふふふ・・・ギャルゲーですよ、こりやリアルギャルゲーですよ！ わたしが主人公なら出会ったその日に全キャラ攻略してハレムエンドでイキまくりつすよ、ペロペロなめ尽くしてやりますよ！ はあはあっ」

「うわ、なにこの女の子・・・ペロペロってありえないんだけど」

西梨奈も完全に引いていた。

お前も茉莉花にペロペロ言っーとるだろ！

「へー、ギャルゲーね俺は良く知らんが」

「興味ありますか！？ 美少女たちがエッチなことしまくりゲームです。わたしギャルゲーなら少々詳しいです。隼人くんにもプレイさせられますよ！ 召喚術の勉強の疲れを抜くためにやりましょう。あ、抜くのは疲れじゃなくて別のものでも良いですよっ、わたしが抜いてさしあげます！」

・・・良いんだ。もう良いんだよ。

神野つかさはあきらめよう。

こいつの事は完全にあきらめたよ、乙。

「やらねーよ！ てか、お前女だろ。女子が美少女にそういうことするゲームして楽しいのか？ まあ、趣味は自由だけど」

「ぐふふ、わたし妹萌えなんですよ、2次元世界で兄と呼ばせて妹たちと乳繰り合っちくんです！」

うわっ、俺が使い魔にお兄ちゃんて呼ばれてるなんて知れたらこいつ昇天すんじゃないか？

「まあ、でもBLも百合もカップリングもすべてカバーするのがこのわたし神野つかさなのです！ 一つに固執しないのはある意味で邪道なのかもしれませんが・・・まあ、それは置いて、今度うちに来たらたっぷり教えてあげますよ、愛弟子隼人君まなでし？」

「か、勘弁してくれ・・・」

つかさは早口でしかも俺に理解不能な単語を連発してくる。

「隼人、こいつはもしかすると腐女子と言っものなのか？」

美月が訊いてきた。

頭をひねる俺の代わりにライチが答える。

「はい、ご主人様は完全な腐女子です」

「腐女子か・・・っか、そもそもそういうゲームって18歳未満プレイ禁止じゃなかったけ？ 高1のお前がやっちゃダメだろ」

「え？ あれは18時間連続プレイ禁止の意味ですよ」

つかさはとぼけてみせた。

「ちげーよ！」

「しかしはじめて会った時から隼人さんにはわたしと近しい匂いを感じましたよ。自分の使い魔に制服コスプレさせてんですから。仲良くやってけそうです」

「コスプレじゃなくて、こいつらが勝手にやったことで・・・」

「はいはい、わかりましたよ。どうせ3人の設定は想像つきますよ。クールビューティーの美月さんは生徒会長、そして西梨奈さんにはお嬢様で学園のアイドル、大人しめの優衣さんは先輩に心を寄せるご奉仕下級生ですね？」

設定って・・・本当に妹っていう設定させてるから反論しづれーよ。

「そして清楚でしっかり者の生徒会長、美月さんの全身を熱い白濁液でどろどろに汚して——」

こわっ！ こいつまじこわっ！

こいつを見てたら西梨奈の茉莉花に対するペロペロ発言が可愛く見える！

「西梨奈さんには大勢の生徒の目の前で巨乳に練乳かけてペロペロ

——」

いや、もう暴走止めたほうが良いよな？

これ以上放置するとこの世界がギャルゲー一色に染まるよな？

美月と西梨奈と優衣もどん引きだし。

「優衣さんは後ろ手に手錠をかけて隼人さんの肉棒を優衣さんの小さな口に——」

そしてついに俺はキレた。

「いい加減にしろ！ こ、この妄想ド変態女っ！」

と突っ込みを入れた。

つかさはビクンと体を震わせてから硬直してしまった。

つかさの頬が上気してピンク色になり、涙がぼろぼろとこぼれ落ちてきた。

しまった、言いすぎたか？

もしかしてこいつ責められるの弱いんじゃないの？

俺が謝ろうとしたけどそうじゃなかった。

「ああんっ、言葉の暴力っ、最高です、もっとですっ、もっとつかさを罵倒してくださいっ！ なじってください！ つかさは責めるよりも責められるのが好きなんです！ そうですっ、DMなんですっ！」

こぼれる涙は歡喜の涙だった。

「.....」

羞恥心なくカミングアウトするつかさに言葉をなくす俺と3人の使い魔。

人の評価っつーのはものの数分でこんなに変わるものなのか、と学んだ日なのでした。

11 創部フラゲ

神野つかさと出会った日の夕食前（今日の夕食は母さんが用意した物をレンジでチンするだけ）俺はリビングのソファに座ってた。使い魔3人は自分の部屋（元親父の書斎）にいる。

夕方の報道番組をばーっと眺めてると神野つかさからメールが届いた。

携帯画面に家族以外の名前が久々に表示されることが正直少し嬉しかった。

友達が少ない（数人だけでそれもさほど親しくない）俺の携帯の履歴には母さんと茉莉花の名前がずらりと並んでいるのだ。

さっそく読んでみる。

タイトルは『授業日』。

本文『こんばんは弟子一号の隼人さん。

さっそくですが今週の土曜日か日曜日は空いてますか？

召喚術師の仕事を教えるために狩りに連れてってあげます（●、

3、）ノゝ』

俺は『土日は一日中フリーだから大丈夫だ。でも狩りってなんだ？』と打った。

1分後に返信。

『では土曜の午前9時に使い魔を迎えに寄越しますので隼人さんの住所を教えてください。』

それと、悪霊とか魔物を退治することを狩りと呼びます。

楽しみにしててくださいね。』

楽しみって・・・悪霊やら魔物やらに会う事楽しみに出来ねえよ。逆に不安だけが募ってくよ。

不安なんだが・・・3人を元の世界に戻してやりたいし偶然の事

故とはいえあいつらを召喚したのは俺だし、送り還す責任が俺にはあるだろう。

だったら悪霊、魔物、異形いぎようの化けモノだろうが誰でもかかって来いっつー気持ちじゃないとだめだな。

俺は住所を書いて送った。

30秒後に返信。

『ぐへへ、これでつかさはいつでも隼人くんを夜這よだうことが出来ます。

待っててくださいえ、今猛ダッシュで自転車乗って隼人くんのもとに向かっていますからε||ε||ε||（o・-・）o』

俺は『夜這うな、近づくな』とだけ即返信。

30秒後に返信。

『冗談ですよ。じゃあ、土日に狩りに連れてきます。

それから、平日は昼休みにでもレクチャーして差し上げますよ。』

俺は『マジ助かります>（――）<

明日また連絡する。』と返信した。

そうしてメールのやり取りを終えた。

画面を見つめて俺は物思いにふける。

3人と出会って三日目。

使い魔だとか魔法だとか召喚術だとか悪霊退治だとか・・・それらの単語をリアルなものだと受け入れることができる自分にも驚いてる。

コペルニクスの転回を果たした俺のことを自分で褒ほめてやりたいよ。

しかしあのバカ親父は俺に何をさせたいんだ？

あまりにも？惜しすぎる？美少女との騒がしい日常、さらにこれからの悪霊と魔物とのバトルに巻き込みやがって。

美少女に囲まれて浮かれ気味の俺って、3人に振り回されまくってるな！。

これ以上3人のペースに流され続けないようにしつかりしないと。

俺が携帯の画面を見つめていると、急に美月の顔が横から出てきた。

「うわっ、驚かすなよ」

俺と美月の顔が接近していて振り向いたら美月の横顔が目の前にあった。

長い黒髪から良い香りがする。

美月はグレーのキャミソール（へそ出し）にスキニーデニム（体に超フィットしてるジーンズ）姿で携帯をのぞいてる。

「ほう、携帯を使って手紙のやり取りもできるのか、実に面白い。しかしつかさと密会の約束とは・・・あんなツインテール妄想女にも触手を伸ばすとはさすがエロ術師め」

つかさとのやりとり知ってるってことは結構前から俺の背後にいたんじゃないか・・・俺って鈍感！

「お前、盗み見てたのかよ」

「たまたま目に入っただんだ」

「うそつけ」

「ふん、隼人も私の体をヤラシイ目で盗み見てるくせに」

「ばっ・・・そんなじゃねえよ・・・」

確かに見てたが・・・別に高校生男子なら正常だから恥ずかしがることーねえさ。

まったくこいつらの美少女ぶりには3日経っても目が慣れねー。

「別に隼人にならそういう目で見てもらっても・・・」

「ん？　なんか言ったか？」

美月はもじもじと急に照れ出した。
変な奴だ。

「つかさ、美月の世界には携帯って無いのか？」

もじもじ美月からクールな美月に戻る。

「うむ、機械に頼らずとも魔法を使えば簡単に交信できるから必要

ないな」

「へー、じゃあさ、お前らって今もやろうと思えばテレパシーみたいに交信できた・・・あ、もしかして俺の魔力じゃ無理か？」

「うむ、お前のクソ魔力じゃあ無理だな。日本人の生活は豊かで便利らしいが私にとっては不便このうえない。早くつかさにしごかれて魔力を上げてもらいたいものだ」

「そのうち上がてやるから待っとけ」

「ふん、せいぜいクソ魔力がチンカス魔力になるだけだ」

チ、チンカスで・・・その単語一つでせつかくの美少女が台無しだよ。

「美月、俺が前向きにやる気出してんだから少しは励ませよ」

「がんばってくれ隼人。私はお前を信じている。きっとお前ならできる。応援しているぞ」

と、棒読応援してくれた。

「まるで感情がこもってねえな」

「そんなことより隼人、今日学校で女子生徒から部活なるものに誘われたぞ」

「部活？」

「部活とは学生が放課後に集まりヤラシイ事する活動らしいな」

「ヤラシイ事なんかしねえよ。誰に聞いたんだよそれ」

「変だな。その女子生徒に、学生たちが集まり乱交するんだろ？」

と尋ねたらしばらく黙ってしまった。否定しなかったからてつきりそういう活動だと思っさっていたんだが・・・なにせ昨今の日本の学生は初体験も早々に済ませるからな」

おい、うそだろ・・・なんつー発想・・・こいつの頭の中はつねにエロが渦巻いているのか？

「たぶんその女子生徒は美月の発言にどん引きしてたんだと思うぞ。部活は運動したり文化活動に励むとこだよ」

「そつなのか、残念だな。興味があるから入部体験とやらをしてみようと思ったのだが・・・そつだ、隼人はどんな部活をしているん

だ？」

「俺は入ってない」

入るタイミング逃したし、使い魔どうかしない限り入らないと思う。

「ほう、では私と一緒に部活に入ろうじゃないか。私にとって人間社会を学ぶ良い機会だ」

「ダメに決まってるって。人間社会を学ぶなら学校に通うだけで十分だろ？それに部活は一般生徒と接する時間が長くなる。使い魔ってばれたらどう説明すんだよ」

「ふむ・・・一理あるな。ならばだ、全員が私を使い魔だと知ってる部員だけの部活なら隼人は入部するんだな？」

「もちろんそれだったら喜んで入部してやるよ」

そんな部活なんてねえけどな。

「ふふっ、その言葉覚えていろよ？」

美月は不敵に笑った。

こんな顔をする美月はたいてい悪だくみをしている時だ。

「あ、ああ・・・覚えてやるよ・・・」

あれ・・・俺、変な事約束しちゃったか？

「明日の学校が楽しみだなあ、くくっ」

そう言って美月がリビングから出ようとする。

俺は美月の態度にピンと来た。

こ、こいつ・・・もしかしてっ!？

「ちょっと、もしかしてお前っ——」

もしかして新しく部を作るなんてこと・・・!!？

「ふふっ・・・明日も早めに登校して創部手続きの書類を申請してと——」

「おまえっ、やっぱり自分で部をつく——っ!」

追いかける俺が美月の肩をつかもうとしたところ、リビングに現れたタンクトップ姿の西梨奈に鉢^{はちま}合わせ。

勢いそのままに西梨奈のむっちり巨乳に体当たりした。

「ああんっ？」

西梨奈が声を出す。

「いてっ・・・ごめん、西梨奈・・・」

西梨奈を壁に押し付け互いに抱きつく格好になっていた。

俺は謝って体を離れた（やわらかくも張りのある感触に別れを告げるはつらかったが）。

「もっ、ハヤトったら気が早いわよ？ ご飯よりもお風呂よりもあたしを先に召し上がるのね？」

「おい、腐れビッチ、お前など腐って食えたもんじゃない」

美月が容赦なく言い放った。

「ううっつ、腐れビッチ言うなっ！ あんたの方は人に食べさせるほどの果実なんて持っていないって自覚ないの？ 前から思ってたんだけどさ、あたしの巨乳がうらやましいんでしょ。性格も体もあたしの完全勝利なのよ、性悪女っ！ ねえ隼人？」

西梨奈は俺の腰に手を回し自慢の胸を押し当ててきた。

美月が慌てて俺の体を引き離す。

「わ、私だって脱いだらすごいんだ。ふんっ、さすがは胸の大きさだけが取り柄の腐れビッチめ、やれ胸だこら胸だと、そんなに揉んでほしかったらな、どこの馬の骨とも分からぬ中年オヤジたちに集団。イプされて好きなだけ揉みしだかれてこい！」

「はあ？ 集団。イプ？ それってあんたの趣味なの？ まじでキモいんですけど」

またケンカはじまった。

こいつら一端ケンカ始めるとしばらく終わらねーんだよ。

しかも罵倒セリフが絶望的に悪い・・・。

「はあゝ」

二人を無視して夕飯を作ることにした俺は息を大きく吐いてから台所に向かった。

俺は明日の予定として神野つかさのレクチャーと創部フラグ回収を立てました。

12 禁断のクラブ

翌日早朝。俺が起きると3人の姿はいなかった。
先に学校行くなら俺に声くらいかけろよ、と俺は嘆息^{たんそく}して登校した。

が・・・あいつらは教室にもいなかった。
一時間目がはじまっても姿を見せない。
昼休みに入り、俺は教室の自分の席で3人が現れるのを待っていた・・・が、休みが終わるころになっても現れなかった。

おいおい、どこ行ってんだよ。
なんで主人である俺を無視して自由行動！？
完全に主人の面目丸潰れ・・・。
しかもヤツらに連絡取る方法知らんし。
しかたなく、つかさにメールで相談する。
返信はすぐ来た。

タイトルと本文の出だしを見て「なッ！」と思わず声が出てしま
いクラスの注目を集めてしまった。

タイトルは『3人は預かった』。

本文『美少女使い魔たちはすでにわたしの手に落ちた！

わたしの開発した性感促進剤によって悦楽^{えつらく}の極致^{きょし}を彷徨^{さまよ}いアヘア
へのイキっぱだ、ウヒヒヒッv()v

3人を返してほしくば隼人^{はやと}くんの熱いほとばり汁をわたしの顔に・
・・・、

てのは冗談です、エヘ(〃〃)
安心して下さい。

3人とも隼人くんの命令で新しく部活をつくるらしいですね。
創部状況は順調ですよ。

わたしも頼まれて入部しました。

創部条件の5名の部員数がそろったとあの子たち喜んでいました
『よ』

「・・・・・・・・」

俺はメールを読んでどつと疲れる。

創部は俺の命令じゃねえし、つかさの妄想ぶりにもあきれたし。

3人の無事（というより人様に迷惑かけてないこと）を確認できたのは良いが、やはり創部作りしてやがった（これであつさり創部フラグ回収）。

体が3時間目の途中から急にだるくなったのはそのせいだろうな。
つかさを含めて5人てことは、美月、西梨奈、優衣、つかさ・・・
そして俺、つてことになるな。

勝手に入れてくれるな！

午後の授業がすべて終わり生徒たちが帰り支度をしていると神野
つかさからメールが届いた。

タイトル『部活』

本文『旧校舎の3階、応接室2に来てください。3人も一緒ですよ
うやく3人に申し開きさせることができる俺は席を立った。

新校舎内にある俺の教室から旧校舎のその部屋までは、階段の上
り下り、長い廊下を歩き、（普段は通らない通路なので途中道を間違え）15分かけてたどり着いた。

黒髪ツインテールは俺を見つけると手を振った。

つかさは白衣（よく神主とか巫女が着てるやつ）を学生服の上から羽織^はつてる、

どうやら応接室2が部室になったらしい。

10畳くらいの広さの洋室で、シックな家具で統一された隠れ家

的なカフェといった感じだ。

長テーブルを挟んで二つのソファが対面している。黒塗りの木製の棚があり、ボードの上にはテレビが置かれている。

ソファに座り熱いコーヒーを飲みながらつかさに事情を聞いた。

3人は昼休みにつかさを訪ねたそうだ。

あいつらは午前中に職員室に行き創部願いを申し出たらしいが、そこで教師から、創部手続き書と5名以上の部員数が必要だと聞き、

例によつて書類の方は魔法でこしらえ、つかさを入部させることで5名を確保し創部願いを申請し、受理されたいらしい。

俺はあきれかえる。

こいつらがここまで部活に入りたい理由は何なんだ？

「なんか良い感じの部屋ですね」

まじで小奇麗で洒落た室内のインテリアなのだ。

「この部屋は去年までテイククラブの部室で、それが今年廃部することになり、家具やら道具やは引き取り手が見つかることなくそのまま残ったんです。まあ、ずっと置いとくわけじゃないんですけど、かは処分することになるんでしょうけど。奥の部屋にティーカップやら、紅茶、コーヒーマーカーもありました。それに冷蔵庫も置いてありましたよ」

つかさの視線の先にドアがあり奥にもうひと部屋あることが分かった。

「へー、ここを部室に使えるんだな・・・ずいぶんうまい話つか、運が良いつか、よくこんな部屋使わせてもらえた」

「わたし、テイククラブの顧問の先生と面識があつてクラブの事情を知つたので、その先生にお願いしてみたらと美月さんに提案したんです」

「ああ、美月は交渉上手だからな・・・」

「そうなんです。あっさり許可してもらえたそうですよ。さらにその先生が顧問になってくれました」

「へ、へー、かなりの交渉力・・・ちなみに俺が入った部活ってテイククラブじゃねえよな？」

「違いますよ」

「そりゃよかった」

一瞬5人がひざをつき合わせて楽しげに午後のひと時を紅茶をくみかわす光景が頭によぎった。

ぜってーやりたかねーよ（まあ、でもそれはそれで平和的で今より平穏な生活そうだけど）。

「まったく、どんだけ行動力あんだって感じ。俺はひと言も命令してねーし、これって全部あいつらの独断ですからね」

そう言うとかさは目を見開いて驚く。

「隼人くんの命令じゃないんですかつ！？」

その驚きに俺も驚く。

「な・・・なにかまずいの？」

「いや、驚いただけです。普通はいちいち主人に了承を得ないと単独行動しませんからね。とても珍しいですよ。そんな身勝手な使い魔もいるんですね。うーむ、やはり半人前の使い魔と半人前の術師とのコラボは予測不能ですな」

つかさは真面目な表情で首をタテに振って納得してる。

こういう真面目な時の表情・・・おしとやかそうで上品で普通に可愛いんだけどな・・・俺の使い魔3人に負けず劣らず？惜しすぎる？よ、こいつの性格は。

俺がつかさの顔を見ていると、つかさはポツと赤くなった。

「そんな見つめないでください。隼人くんったら、『男女が部屋の中で二人つきり。やることはただ一つ、それはセツ。ス！このままこの女を食っちゃおうか、ウヒヒツ』なんて顔をしてましたよ」

「してねーよっ！」

俺は全力でつつこむ。

これだから惜しいんだよな、神野つかさは。

「ところで、肝心のあいっらはどこ行っただ？」

「ユニフォームに着替えてもらってます」

「ユニフォーム・・・なんてあんの？」

「はい、もちろん、とびつきりカワイくて・・・グヒヒッ」

その時奥のドアが開いた。

「ぶ——ッ！」

俺は飲んでたコーヒーをふきだした。

「ガッデムッッ——！」

つかさが叫び、

「ツカサはもうだめですっ、軽くイってしまいました？」

と顔を上気させた。

そこにはエナメル調のブラック一色のボンテージ姿の美月が立っていた。

手には競馬の騎手が持つようなムチが握られてる。

「ど、どうだ、隼人・・・このユニフォームは・・・似合ってるか？」

照れくさそうにもじもじする美月。

美月は頬を赤く染めながら俺に聞いてきた。

いや！俺の方が顔が真っ赤になっちまうから！
後に続いて西梨奈と優衣が現れた。

「なっ・・・熱っ！？」

俺は持ってたコップを落としてしまった。

ピンクのブラに両サイドのみ覆われたピンクの光沢のあるショー
ツ（その下に白のTバック）姿の西梨奈は四つん這いになりながら
の登場。

そしてメイド服の上から全身を縄で縛られて歩くのもやっとの優
衣。

3人とも肌色率が高すぎる。

「な、なんであたしがこんな無様に這はいつくばる恰好しないといけないの？ でもハヤトに見られてちよつと嬉しいけど・・・あはん？」

「あ、あふうん、あにうえさま・・・歩くたびに優衣のあそこが・・・しげきされて・・・ふうん・・・兄上さまいがいのモノに、りょうじよくされて、感じてしまう優衣を・・・ああん・・・どうかお許しください、あふん」

つかさが鼻をピクピクさせている。

「キャツホオオオイ！ ハア、ハア、マジでパねえ、パねえっすよ、こりや・・・3回は軽くイってしまいましたよ、ベロベロ、ベロベロしてえよおおっ！」

つかさが壊れた。

「た、たしかに、これは・・・」

正常な高校男子にはこの光景は酷こすぎる。

体が熱い。

湧きあがるほとばしりをなんとか我慢する俺。

「お、お前ら・・・なにやってんだよ」

「な、なにつて、クラブ活動よ、ああん？ ちよつと美月踏まないでよつ、やんつ？」

美月にヒールで背中を踏まれる西梨奈は体をくねくねさせている。

「こ、これがこの部のクラブ活動らしいわ・・・あんつ、やだなにこれ、ハヤトに見られて気持ちいいかもお・・・」

「ふふつ、気持ちいいのか？ なら、これはどうだ？」

美月がムチで西梨奈の尻を軽くたたく。

「ああんっ？ えっ？ な、何これっ、あんっ？」

嫌がつてたはずの西梨奈の表情がうつとりしてきた。

「なんなの？ 気持ちよすぎるっ、変になっちゃうつ？ もっと叩いて美月っ」

「ほら、すこし強めてみるぞ？」
パンツ。

「あつはああんっ？ やっぱい、感じる！ お尻感じるの、やあん！」

長い金髪を振り乱しながら叫ぶ西梨奈。

こいつ・・・M属性が開花したようだ。

「ふん、実に気分の良いものだ、このクラブ活動は。ほらっ、これならどうだ？ もっとやらしく腰を振ってみろ！」

美月のSっ気はボンデー姿になりさらに増強されていた。

「あんっ！ 腰振りますからあ、もっとやらしくなりますからあ、もつとたたいてえ、あふん？」

美月と西梨奈の額には汗がにじんでいた。

耐える俺・・・冷静になれ、この状況に飲み込まれてはならんぞ。

「あふん、あにうえ、さま・・・あん」

優衣がはあはあ喘ぎながらちよこちよこ歩いてきた。

「あふう・・・あ、あにうえさまあ、どうぞお・・・優衣に猿ぐつわをしゃぶらせてください・・・あんっ」

上目使いの優衣はそれはそれは可愛らしく、猿ぐつわ（たぶん口にはめるやつ）を渡してきた。

く、クソっ・・・頭がくらくらしてくる・・・しっかりするんだ俺。

「遠慮する！ それやつちまったら人として終わる！」

「オー、マイ、ガッ・・・この記憶だけでつかさは1週間大丈夫です」

何が大丈夫なのか知れんが、つかさの手はわなわな震えていた。

「つかさ・・・顔が思いつきこえーぞ」

「泣きたいっすよ、こんなシチュはギャルゲー形無^{かたな}しっす、あはあっ、あはあっ。涙が出てくるッすよおおっ！！」

そう言ってほんとに涙を流し始めた。

「泣きてーのはこっちだ！」

「はあ、はあっ、ええじゃないか、隼人くん、優衣ちゃんに猿ぐつわをしゃぶらせればええじゃないか！ 君の教室では君を極悪非道

工口鬼畜調教師とする噂が流れているぞ。この際だから本当に3人を調教してみればいいじゃないか。ぐへへえ」

「するかよ・・・」

「ほらあつ、ほらつ、鳴け、もつと良い声で鳴くんだっ」

あー、美月は完全に世界に入っちゃってるよー。

西梨奈のDMスイッチもON状態。

美月と西梨奈の汗と熱気で部屋が蒸れてくる。

「あふうんっ、あああん、もっとですうう、もつとはいてくださ
いっ?」

西梨奈は形の良いお尻を左右に振り、尻にムチが当たると汗を飛び散らせた。

「ほらほらどうだ、これで良いのか! この淫乱メス犬が! もつと淫乱に喘いでみせろ!」

「あああんっ、いやあんっ、淫乱メス犬なんて言わないでええっ?」

・・・・・・。

・・・・・・っ!?。

し、しまった・・・3人のアレすぎる迫力に圧倒されて怒るの忘れてた。

耐える俺、耐えるんだ俺!

外に出そうな俺の熱いものを押し殺して、この暴走美少女連中に
つつこむんだ!

「てか、いい加減にしろ、お前らっ! このどこがクラブ活動だ
アッ!」

俺は思いっきり声を張り上げた。

「人の使い魔に何してくれてんだ!」

よく言えた俺、この宴うたげに参加したい気持ちをよく打ち破ったよ俺!
キレられたツカサは舌をペロツと出して片目をつぶった。

「ごめんなさいっ、てへっ」

「『うわっ、かわいいから許す』・・・って言うわけねーからッ!
そんな力ワイ子ぶつても許すわけねーからッ!」

「ちつ、さすが隼人くん、ひと筋縄じゃいかないですね・・・」

「どういうわけなんだこれは・・・本気で怒るぞ」

予想はできるが。

「もしや、このクラブって・・・」

「はい、SMクラブです」

「お前バカか！ そんな猥褻なクラブ学校につくんな！」

つかさはニヤリとする。

「あら？ 猥褻ですって？ 隼人君なにを想像してるんですか？」

「なにつて、SMクラブだろ」

「ま、まさか隼人くんったら、サディズムとマゾヒズムのSMだと思っただの！？」

「いや、それしかねーだろ！」

「もう、早とちりさんつ。出張睦代神社クラブのことですよ。」

ローマ字読みで頭文字を取ったんです」

Sは出張のSでMは睦代神社のMだつてさ。

はあ・・・わざとらしすぎるひっかけ・・・。

「ほら、うちの学校にはJRC部（青少年赤十字）やらインターアクトクラブIAC部やらがあつて、地域ボランティアや国際ボランティアの活動してる部があるじゃないですか。この出張睦代神社クラブもそれと一緒に、睦代神社の神主であるわたしが校内の迷える子羊たちのお悩み解決の手助けをしようとする、神主ボランティア部なんです」

「いや、いまいち意味分かんねーけど・・・じゃ、じゃあこのユニフォームは何だよ！ 明らかに卑猥なほうのSMだろ！」

「まあまあ隼人くん、落ち着きたまえ、これはいわばSMクラブ宣伝用のユニフォーム。わが校にSMクラブありって感じで、校門の前で出張睦代神社クラブを宣伝してもらうんですよ」

「もつとダメだろ！ 校門前つて公然わいせつ罪になるつつの！ 誰でも卑猥なほうのSMクラブ想像するに決まってるだろーが！ どの高校に風俗の宣伝を学生にやらせてる高校があるんだ！」

「まあ、まあ、隼人くん、興奮しないで」

「誰が興奮させてんだよ……。それから3人とも、早く学生服に着替える・・・」

うなだれる俺をしり目に、

「さあっ！ SMクラブ創部だ！」

と、美月がムチを振り上げ高らかに宣言した。

「っーかさ、お前らってほんつとに？惜しい？よな・・・」

こいつら、絶世の美少女なんだけど絶望的にアレな性格のわけで。そこだけ直せばパーフェクトなわけで。

マジで惜しい！

惜しすぎる！

12 禁断のクラブ（後書き）

あとがき（by 隼人）

こうして出張睦代神社クラブ（SMクラブ）は誕生したとき。

つか西梨奈喘ぎすぎだろ・・・部室の前を誰も通らなかったから良かったものの、中に入ってきたら停学処分確定じゃね？

いや、もしくは退学・・・いやいや社会的に抹殺されることも・・・。

マジ危ねーことしやがるよあの使い魔たち。

13 靈感商法クラブ

次の日の放課後、得体のしれない出張睦代神社クラブは活動を開始した。

3人は部活だ、部活だ、とやけに嬉しそうに張り切っている。
一般の学生が来るので3人は学生服だ。

校内の部活動用の掲示板に次のような張り紙が貼られているのを見つけた。

『出張睦代神社むつしろクラブ。』

旧校舎3階応接室2において、睦代神社の神主、？神の子？こと神野つかさがあなたのお悩みを解決します。

小さなことでも喜んで相談に乗ります。

お気軽にお越しください。

お待ちしております。

？妹調教師？ことSMクラブ部長1年生阿部隼人より』

俺は部室に急行してつかさを問いつめる。

「なんで俺が部長！？ いや、それより？妹調教師？つてなに自分で恥ずかしいこと名乗ってんの！ しかもSMクラブ部長って出張睦代クラブの略だと書かねーとおかしーだろ！ 変態だる俺！」

「まーまー落ち着いてくだされ」

「落ち着くか！ それと最後の『より』って、この文章俺が全部作ってみたーじゃねえか！」

「そうですね、隼くんが書いた文章に見られますね」

つかさは淡々として俺の問いつめを受け流した。

「そんなこと言ってももう後には戻れません」

「いやいや……」

俺は言葉を失った。

？神の子？って……こんなことぜってー神の子はしねーよ。

こいつ、もしかして俺の使い魔よりタチわりーんじゃねえか？

「……っ」か、だいたいさー、神父が坊さんじゃないんだから、相談に乗るのは神主のやることじゃないよな。スタートから間違ってるよなっ」

「お、鋭い！ しかし！ そこは触れないでくださいっ、てへっ」
つかさはげんこつを作って自分の頭をポコツとたたいた。

「『てへっ』じゃねえよ」

「おっ、誰か相談に来たみたいですよー？」
部室の外から声が聞こえてきた。

「まったく、誰がこんなクラブに相談に来る……っ！？」

ドアを開くと部室の前には男子学生が大量に押し寄せていた。
10人、20人……もつというぞ。

「うわ、なにこの数……しかも男ばっか……」

オール男の群れだった。

「……おおお——ッ——」

開いたドアの隙間から中を覗いた男の群れが歓声を上げた。

「まじだっ、転校生がいるぞー！」

「美月さあんっ、こっち向いてっ」

「西梨奈ちゃんっ、愛してるーっ！」

「優衣ちゃんっ、大好きだーっ！」

さらに後ろからこそそと聞こえる。

「マジで美月さん綺麗すぎだ……やべえ……」
「クールな目でオレを上から見下ろしてほしい」

「西梨奈のあの胸、マジたまんねーよ」「しかもブラウスのボタン開けちゃって、ちょーエロっ」

「優衣ちゃんカワイーよなー、あーいうー大人しめで可愛い子、タ

イブ」

明らかに男子学生は3人目当てだった。

「ぐししっ、思った通り・・・ぐふっ」

つかさの声が聞こえた。

こいつ、なに企んでやがるんだ。

つかさは俺と美月に指示する。

「さあ誘導係の隼人くん、はやく招き入れてください、ただし一人ずつですからね、それから美月さんは外の学生さんの整列係です」

「よし、私に任せろ」

美月はクラブ活動を楽しむように張り切って部室を飛び出した。

そして学生たちを人気ラーメン店に並ぶ長蛇の列のごとく整列させた。

美月の一挙一動に釘付けの男子学生たちは彼女の言葉に素直に従う。

誘導係にされた俺は男子を部室の中に入れた。

片方のソファにつかさと西梨奈が座り、俺はもう一つのソファに学生を座らせた。

つかさは上品な笑顔をつくり学生の相談を親身（内心はどーだか知らんが）に聞いた。

西梨奈はつかさの隣でへー、そーなのー、大変ねー、とてきとーに相槌あいづちしてる。

優衣はメイド服姿（いつの間にか着替えてた）で茶汲ちやくみしていた。

誘導するだけの俺は相談の間は特にやることないため相談話を聞く。

つかさは相談に乗るなんつっという、ボランティア精神のかけらも無かった。

「それでは悩みをどうぞ」

男子学生が悩みをつかさに話す。

それは悩みでもないような小さな悩みだった。

そりゃそうで、美少女3人を冷やかしに来たのが目的なのだ。それでも悩みを聞いたつかさは解決法を与える。

「うむ、あなたが悩みの原因・・・それはあなたの背中に水子の霊がついているからです・・・」

つかさが真面目な顔で胡散臭いことを言つてのけた。

「ええっ!？」

「でも安心して下さい。今から除霊して霊を成仏してさしあげます」
「じよ、じよれい・・・え・・・え、遠慮しますよ」

男子学生が怪しげな空気を察知してソファを立ちあがった。

よし、それが正解だ。

逃げたほうがお前の身のためだ、こっちに来るんだ、俺がすぐに部屋から出してやるから!

俺は救いの手を差し伸べかけた・・・、

が、西梨奈が上目使いで、

「お願い、お被いして? あたし、あなたのことが心配なの」

とお願いすると、急に男子学生の目がとろんとした。

そして、

「ぜひっ、除霊してくださいっ!」

と叫んだ。

あー捕まっちゃったよ。

つかさは何か唱えながらひらひらの棒を振る(30秒くらい)。

「はい、これで霊は成仏しました。御被いの代金は3000円です」

「は!?! 金取るの!?! え・・・いや、あの、オレ、金持っていんで・・・」

出すな、そんなもんに金出すな、と俺は念じる。

が、男子が渋っていると西梨奈がすかさず体を前に乗り出し、

「えゝ、3000円くらい良いじゃない、出して出してえん?」

と、ねだりながらブラウスからはみ出した胸の谷間を見せつける

と、さらにその男子は目をとろんとさせ、

「だつしまーす、すぐ3000円払いまーすッ！」
と、3000円払ってしまった。

「ありがと、チュッ？」

西梨奈が投げキッスすると男子は「ああッ！ はああッ！」と歓喜の雄叫びおたけを上げてソファの上に倒れた。

優衣は倒れた男子を引きずりながら部室の外に出した。

こ・・・こいつら・・・がつつり連携プレー組んでやがる・・・。

「さ、次です、隼人くん」

つかさは次の客を急かした。

「お、お前・・・悪魔かよ」

「え？ 何か言いました？ 召喚術教えてほしいのでしょ？ だつたら言うこと聞きなさい」

・・・今その話を出すかよ、これって脅しおどですか？

やつぱこいつ悪魔だ。

同じようなやり口で、次の学生には御守りを買わせる。

「それは先祖の因縁のせいですね。御守りを持てば因縁は解消されます。優衣さん持って来てください」

はい、と返事した優衣が金の刺繍入りの御守りをテーブルの上に置いた。

「4000円というお手頃価格です」

「いや、そんな金なんて・・・」

「買って、買ってー、あたしのためにこれ買ってーっ？」

と御守りを胸の谷間に挟んで体をくねくねさせてねだると、
「わ、わかった！ 西梨奈さんのために買いますうッ！」

目をとろんとさせた男子が4000円を支払った。

「あはんっ、ありがとっ？」

「あはは、とんでもないよ、西梨奈ちゃんっ」

「これはお礼の・・・チュッ？」

「もはあっ！ し、あ、わ、せ・・・ぐはあっ！」
そして優衣が引きずりながら外に連れ出す。

・・・ぼったくりだよな？

これ、ぼったくりだよなあっ！？

だめだ、ぜったー止めなければ・・・。

「おまえら、もうその辺にし——っ！？」

こいつらに思いつきり突っ込もうとしたら突然体が急に重くなる。
そして頭がぼうつとして・・・、

「・・・ど、どうしたんだ・・・い、いしきが・・・」

俺は突如として意識を失った。

「ん・・・んん・・・」

意識が戻る。

頭が重い・・・。

目を開けて周りを眺めると部屋には5人だけだった。

俺はソファの上に寝かされている。

どれほどの時間がたったのだから、部屋の中が夕日で真っ赤に染まっている。

「もう、驚いたんだからね、倒れちゃったりして」

ソファの隣で、床に膝立ちの西梨奈が俺に上半身を乗せて顔を近づけてきた。

巨乳が腹の上でむにゅっと押しつぶされる。

「ふん、貧血のようだな、しっかり栄養を取った方が良いぞ。男なのにだらしない」

美月が腕組みしながら言った。

「もうしわけありません。兄上さまの体調をかんがえていなかった
優衣をおしくください」

心配そうな優衣。

「・・・男子たちは？」

「もう相談はすべて終えました。さ、隼人くんも目覚めたので帰りましょうかっ」

廊下を歩きながら俺は聞いた。

つかさと西梨奈は男子学生（30人くらい）からぼったくり続けたらしい。

つかさのやつ・・・3人を客寄せパンダにして、学生から金をぼったくるつもりだったのだ。

俺が指摘する。

「バレました？」

つかさが両肩を上げた。

「それから・・・どーも気になるんだが・・・あつさりと西梨奈の魅力にあいつら負けてたんだが・・・もしかして魔法使った？」

「あら、それもバレました？ 西梨奈さんをお願いしました」

「俺の使い魔だから！ なんてお前が命令してんだよ」

「でも心配しましたよ・・・だって倒れてしまったんですもの。隼人君の魔力を吸い取り過ぎたんでしょうね」

「いや気絶した後も俺の魔力奪い続けたからぜってー心配しなかったよな・・・」

こいつ俺を殺す気か！

翌日、そんな悪徳商売はすぐに男子生徒の足を遠ざけ、その日部屋を訪れる者はなかった。

「どうしてでしょうかねえ・・・」

不思議がりながら（ほんととは分かってるくせにしらじらしー）つかさが俺に訊いてくる。

「お前のせいだろ！ どーすんだ、活動できねえじゃん」

「クラブの名前は売れましたよ」

「悪名だろ！」

「まーまー、これは想定内です。実を言うと冷やかしの男子学生を厄介払いしたんですよ。これで本当に困っている人だけがやってくるはずですよ」

「いや、そんな悪名流したら逆効果だろーが。それに金はどうすんだよ。問題だろ、ちゃんと返すんだろ？」

「大丈夫です。今回集めたお金はすべて？愛の小鳩事業団？に送りますっ！」

「そんな問題じゃねーっ！！」

結局、俺が全額学生に返しに行く羽目になった。

ぼったくられたのにも関わらずあいつらを悪く思ってる学生はいなかった。

生徒たちは文句ひとつ言わないで金を黙って受け取った（これも西梨奈の魔法の効果なのだろうか）。

それどころか中には返金を断る生徒さえいた（まだ魔法が解けてないみたいで目がトローンとしていた）。

まー、これで学校内で問題になることはなさそうだ。

これで事態は収束した・・・、

・・・、

かに思われた数日後。

美月と一緒に廊下を歩いていると男子学生がSMクラブについて噂話をしていた。

「出張睦代神社クラブって知ってるか？ あそこに行くと身ぐるみはがされるらしいぜ」

「ああ、知ってる知ってる俺の友達なんか1万も払わされたらしいぜ」

「ひでー話だよな」

「なんでも部長がすべてやらせたことだとさ」

「まーね。部長の言う事は絶対、って風習だもんね、うちの学校っ

て」

「しかもその部長があのア部だってよ」

「うそ、あの妹調教師で噂の1年の阿部？ ま、まさかあの神野つかさまで調教・・・う、うらやましい・・・じゃない、今度バチが当たるぞ！」

「とんでもねーよな阿部隼人って、美少女妹と神野つかさを使って金儲けとは・・・妹を調教したかと思えば、今度は靈感商法かよ」

・・・事態は大問題に発展していた。

俺は汗だくだくになりながら廊下の角に隠れていた。

「・・・・・・・・」

諸悪の根源は俺になっていた。

俺が眉毛まゆげをぴくぴくさせていると、一緒に隠れている美月が、

「さすが隼人は部長だ。すべての決定を握り、すべての汚名を着るのが一番上の部長だ、とつかさに教えてもらったぞ。やはり汚名を着せられたら右に出る者がいない隼人が部長にふさわしいな」

と当たり前のように言った。

・・・ようやく俺が部長にされた理由が分かった気がした。

「これも想定内なのかよ、つかさの奴・・・恐ろしい女」

つかさが神の子でなく悪魔の子に思えた俺だった。

14 教えてっ、つかさ先生！（前）

放課後、部室。

SMクラブが悪徳クラブと呼ばれるようになって数日、部室には
かんこどり
閑古鳥が鳴いていた。

特にやることはないのだが5人は旧校舎3階応接室2に集合する。
窓際の一人用カフェテーブル（いつのまにか2脚置かれてた）に
つかさと西梨奈がそれぞれ座っている。

白衣姿（神主が着るやつ）でツインテールのつかさはヘッドホン
しながら自前のノートパソコンで18禁ゲームをしてるらしく画面
を見ながらニタニタしている。

近くによると時々ヘッドホンから女性の喘ぎ声みたいな音が聞こ
える。

よく公共交通機関で音楽プレイヤーの音をイヤホンから出しまく
って迷惑かけてるシャカ男ノ女よろしく、エロボイスを響かせてる。
西梨奈はつかさが持ってきた同人誌なるものを読んでいる。

タイトルは『僕の妹が魔法少女になっちゃった』。

こいつも周囲に雑音をぶちまけていた。

「めっちゃカワインですけどーこの女の子おっ、はあ、はあんっ？
マジで触手ってサイコーよねー。あたしの乳首にも巻きついてく
れないかしらあ・・・はあ、はあ、やだ想像しちゃったら興奮する
わね、やあーだああ、もー、やあん？」

こんなセリフをすべて独り言で口に出している。

しかも声がでかい。

・・・カオスだ。

・・・カオスすぎるよこの2人。

優衣はメイド服姿でなにをするのでもなくぼーっと突っ立っている。

のどか たたず
長閑な佇まいになんかほっとする。

俺がソファに身を沈めると栗毛のポニーテールを揺らしながら紅茶を持ってきてくれた。

「お、気が効くなー、ありがとな」

俺が礼すると優衣は照れくさそうにはにかんだ。

「ご主人様にごほうしすることは当然のことでございます」

優衣は膝立ちになり頭を俺に向けてきた・・・頭でも撫なでてほしいのか？

優衣の頭をなでてやると「あふん」と声をもらした。

「感じさせてくれてありがとうございます兄上さま」

優衣がくりつとしたけなげ過ぎる目でじーっと見つめてきた。

か、可愛いすぎる。

優衣に心高なる俺の様子（きつと鼻の下を伸ばしてデレてた）を見た美月がクールな視線で睨んできた。

「ちっ、なにをデレっとしているんだ、このエロ術師」

美月は俺の正面のソファの上に体育座りになって分厚い文庫小説を読んでいる。

タイトルは『論理哲学論考（ウィトゲンシュタイン著）』

タイトルからして西梨奈の読んでる同人誌とは真逆の哲学的な内容だろう。

「ずいぶん難しいもん読んでんだな」

「ふっ・・・私を誰だと思っている。使い魔学校の成績優秀者の常連だ。エロ術師などには到底理解の及ばない哲学的な本が私のお気に入りだ」

どれどれ、どんだけ難しいのかなとテーブル越しに身を乗り出して頁を覗くと、

「ブツ」と吹きだしてしまった。

「へ、へー……哲学的ねえ……」

頁のあちらこちらにチ。コ、ペ。ス、マ。コ、アナ。、と伏字に
しなけりやまずい単語が点在していた。

美月が顔を赤らめ慌てて文庫を胸に伏せる。

「な、何をかつてに盗み見てるんだ！」

黙って俺は美月の手から本を取り上げる。

「こら、なにをする、ばっ、やめっ」

「……」

『論理哲学論考（ワイトゲンシュタイン著）』のカバーをめくると
内側から、

『禁断の密室遊戯／ガマンできない熟妻たち』のタイトルが現れ
た。

美月は男のトレジャー（エロ本）を見つけた思春期男子のよう
に慌てふためいていた。

「ち、違うぞ、別に私は隠れて読んでいたんじゃないぞ……」

「じゃあ、なんだよ」

「こ、これは、これは……」

美月は言葉に迷ったあと、

「これはっ、私が欲求不満なだけだッッ！」

とすがすがしく断言した。

「言い訳がちが——うッ！」

俺は全力で突っ込んだ。

カオスすぎる。

カオスすぎるよこの３人（優衣以外）。

そんな感じで放課後のひと時を過あおぎしているのは有意義でないと
感じた俺はつかさにレクチャーを仰あおぐことにした。

つかさの背後に行き、エロ声ダダ漏もれのヘッドホンをつかさから
取り外す。

次の瞬間、

『あんっ、あんっ、出してっ、出してっ！ あああんっ！ イク、イクウーッ！』

と、はつきりとセリフが聞き取れる大音量が溢れだした。

美月はビクッと体を震わせ、

「き、貴様っ、な、なにを、卑猥な音を流してるんだッ！」

と卑猥な小説を手に叫んだ。

「・・・（じーっ）」

目をギンギンにさせてるつかさに俺は冷たい視線を送る。

「もゝ、なんなんですか！ 私もう少してイクとこだったのにい、？イキかけなう？だったのにーっ！ 責任とって隼人さんがわたしをイカしてください！」

と、俺に訴えかけてきた。

「部室の中でイク気になってんじゃねえよっ」

突っ込んだ俺は深いため息をつく。

「はあゝ。お前さ、暇だったら召喚術のことやら魔法界のこと教えてくれないか」

「暇？ 心外ですよ、わたしは暇じゃありません。わたしは今リア充の研究してるんです！」

「は？ リア充の研究？」

「そうです。二次元の中に自分の精神を没入させて二次元に住んでいるリア充のお友達と一緒にリア充生活を体験させてもらってるんです。その経験を現実世界に生かすんです」

おーい、努力が逆ベクトルだぞー。

二次元のお友達って誰だよー。

「・・・お前って・・・リア充に近づきたいと思えば思うほどリア充から遠ざかってくタイプなんだな・・・」

俺は冷めた目でつかさを見た。

「な、なんですかその同情的な視線は・・・はっ、まさか、その視線でわたしをイカせる気ですか！？」

だめだこいつ。

「ついかさ、学校でギャルゲーすんのどうーかと思うけどな。顧問の先生に見つかったら叱られるぞ……って顧問の先生って会ったことないんだが」

「あー、その先生なんですけど、一応は顧問になつてもらいましたけど部活に來ないことで有名な教師なんで大丈夫です。ティークラブの時も年に数回程度しか顔出さなかったみたいですし」

「そうなの？ それはそれで都合が良いけど……」

こんな力オスな現場を見せられるわけねーよ。

でもそれはそれで顧問として失格じゃね？

「おっほん、それから隼人くん、わたしだつてたまには18禁じゃないギャルゲーもするんですよ」

「18禁じゃないギャルゲーつてのもあるのか？ 俺、そういうのに疎いけど」

「もちろんあるに決まつてますよッ！ もしかしてギャルゲー遊んだことないんですか！？」

ああ、と俺は頷いた。

「かゝつ、信じられない！ 人生だいぶ損してますよ！ やっぱり『CLANNAD』とか『アマガミ』はおすすめですね！ その二

つをなんてプレイしない人生なんてクソみたいな人生っすよ！ 特に『CLANNAD』は一度プレイしないと死んでも死にきれませ

んよ！ それから『リトルバスターズ！ Converted E

dition』なんかもおすすめっす！ この作品は前半部分のギ

ャグやミニゲームが充実しながらに学園生活を楽しめます。しかし

この作品の真骨頂はやっぱ終盤！ ハンカチなしにはエンターキ

ー押せません！ ですが各ヒロインの攻略だけではこの作品の魅力

は伝わらないです！ 初心者に向きですね、それから――」

みたいなことをつかさは鼻息を荒くして早口でしゃべり倒した。

このまま止まりそうにないので話を進める。

「わかった、わかった、今度一緒にプレイしてやるから、今は召喚

術師の世界について教えてくれ」

俺がそういうとつかさは目を輝かせた。

「本当ですか！？ 絶対ですよ！ 絶対一緒に遊ぶんですからね！
？ 全裸で！ ぐひひっ、なんにしょーかなー、まあ、隼人君は初心者だから『ときメモ』なんてどうでしょうかね。美少女との恋愛がメインの純粋なギャルゲーって感じですから初心者にはかなり向いているのかもしれないっ」

ギャルゲーの話をするつかさは輝いて見えた・・・でもそこでしか輝けないって残念すぎる！

「わかったよ、わかったから遊んでやるよ。だけど全裸じゃないぞ」
女の子と遊ぶ約束したのこれが初めてと言っていいのだが・・・
なぜだろうぜんぜん嬉しくねーや。

「ぐひひ、では授業しますかね」

そんなこんなでつかさの授業が始まる。

つかさはどこからか持ってきたホワイトボードを指し棒でタン、タン、と叩いた。

「ではこのわたくし、つかさ先生がレクチャーしてあげますので、みなさん、席についてください」

「は——いっつかさせんせーいっ」

ソファに座った西梨奈は張り切って手を上げた。

「うひひっ、美人女教師のメガネ姿に指し棒・・・さすがの隼人くんでもこのシチュにはそりますよね？」

つかさが俺にウィンクしてきた。

こいつ俺を誘ってる気か？

「・・・そそらん」

「貴様は何を考えている。そんなもので隼人が誘惑されると思っていいのか。そもそも貴様は美人ではない」

美月が言った。

「むききいっ！ な、な、な、なんですとっ！？ だ、だったら、こ、これはどうですかあっ！？」

なんかのスイッチが入ったつかさ。

俺の膝の上にその小さなお尻をどすんと乗せ、俺の首に腕をからみつけた。

いきなりの展開に驚く。

「き、貴様っ、隼人になにをしている！」

「ちよつとハヤトから離れなさいよ」

「は、は、隼人くんっ、じゅ、じゅ、じゅぎょうちゅうに先生のこ
とずっとヤラシイ目でみていたわよねえ、悪い子ねえ、これからお
仕置きの時間よおっ、うつぶん」

動きを堅くしたつかさは微妙な嘔み方でたどしくしゃべった。
どうやら誘惑しているよーだが慣れてないのが手に取るよーに分
かる。

「は？ 何の事言ってんだよ」

「担任のわたしが放課後に個人面談に誘った理由はわかってるわよ
ねえ？ これから先生があなたに大人の面談をしますからねっ、
うつぶん、あっはん」

再びウィンクしながら言った。

「は？ 担任じゃねえし個人面談でもねえけど・・・」

「む、むむ・・・どーしてですかー隼人くん。なんでコーフンない
んですかー？ 本当はコーフンしてるんでしょ？」

「コーフンしてない」

俺は無表情で答えた。

演技力ゼロだし、なんかつかさはこういうのが似合わない。

つかさは少し悲しい目をして、

「ちっ、ギャルゲの世界じゃ、この導入部から教師と男の子はヤラ
シイ授業を開始するんですが・・・ふふっ、リアルはむずかしいも
のですね、隼人くんを落とすのは遠い道のりのようです」

と俺の首から腕をはずした。

「お前、何がしたかったんだよ……」

こいつのノリにはついていけない。

「つかさはそんな誘い方しても無理よ。胸が無いもの」

西梨奈が巨乳を強調するように前に突き出した。

「む……胸！？ た、確かに、西梨奈さんほど豊満な胸はないですけど……がくっ……どーせわたしはエロキヤラじゃないんですよ……悔しいですがその胸には敵いません」

そう言っただけで俺の膝からつかさの尻が離れて行った。

つかさは清楚でふっふに可愛いんだけどな。

「つかさは清楚でふっふに可愛いんだけどな」

「な、なんですと！ 可愛いですか！！」

「え！？ 俺、口に出してた！？」

なんか恥ずかしいことを口に出してしまった。

「はい、それはもうはつきりとモノローグ出てました。もう、隼人くんだったら本当はコーフンしてたのね、なんだよもう、ぐふぐふっ」
そして上機嫌のつかさは召喚術師についてのレクチャーを開始したのだった。

15 教えてっ、つかさ先生！（後）

俺は熱心に授業を聞きホワイトボードにつかさが書いた文章を勉強ノートに写した。

以下がノートに記した内容だ。

『ISO』

国際召喚師機構、英語で「International Summoner Organization」の略。

世界中の召喚術師が所属する組織で召喚術式と召喚術師と使い魔を管理統括する国際機関で、ごく一部の人間だけが知る最高機密組織。

ISOは魔法界（魔法世界）から侵入した悪霊と魔物を早期発見し、召喚術師を派遣して悪霊と魔物を速やかに駆逐する。

魔物は魔法界の凶悪生物。悪霊は魔物の靈魂（魔物は死後も凶暴）。

悪霊や魔物は爆弾や銃弾などの武器・兵器攻撃は通用せず人間には手に負えない脅威である。

彼らを駆逐するためには魔法が効果できめんで、召喚という形で魔法界の住人（魔人^{まじん}）の力を借りる。

その時召喚された魔法界の住人を使い魔と呼ぶ。

狩り成功時には狩りの難易度に応じた報酬を術師と使い魔に支払う。

「ISOねえ、そんなものがあるのね」

西梨奈が言った。

「え？ お前たち学校で習ってんじゃないの？」

「使い魔と人間界との関係って卒業学年で習うのよ。それまでは魔法の勉強が主なの」

「へー、そうなんだ」

俺は意外に思ったが西梨奈の言葉に美月が鼻を鳴らす。

「ふん、私は知っていたぞ。西梨奈は必要最低限のことしか学ぼうという低い学習意欲しか持たないからダメなんだ」

「さすが成績優秀者のおっしゃることは違うわね。友達も作れないほど勉強熱心なだけあるわね」

西梨奈はどこかバカにするような言い方をした。

「な、な、な、なんだと！？ 私だって友達くらいいるぞっ！？」

美月はムキになりまたケンカになりそうなので話を進行する。

「召喚術師はISOとやらに雇用されてたひとつの職業として考えて良いんだな？」

「そうなんです。召喚術師の仕事一本で食べている術師は多いです。わたしも稼ぎの良い時なんかは、神社の収入より多いんでギャルゲ代には困りません、ぐしし」

「もしかして、全部そっち系に費やしているのか？」

「もちろん、わたしはバイト感覚で術師やってるんで、報酬は小遣いみたいなものです」

「貴様・・・由緒ただしき召喚術師で得た報酬をそういう卑猥なものに浪費しているのか・・・なんか引くぞ、この二次元術師」

「美月さん、二次元術師とは心外ですよ。わたしは3Dモノのギャルゲーも大好きです！」

などと美月にさらに引かれるだけのつかさはレクチャーが再開する。

『マナ』

魔力を持つ微粒子のことをマナと呼び、魔法界の大気にはマナが含まれている。

魔法界の住人^{まひと}は呼吸から取り込んだマナの魔力を生命維持と魔法の源としており、マナを大気中に含まない人間界では魔法界の住人は生存不可能（魔法も使えない）。

『召喚術師』

ごくまれに（一万人に一人くらい）マナを体内で生成する人間がいる。

ISOはそのような人間をスカウトし、その者に術師になる意思があれば適性試験を受けさせ、合格した者を一定期間研修させ、術式を交付し召喚術師として雇用契約を結ぶ。

術師はISOからの要請によって狩りを行い狩り成功時には報酬が支給される（自ら悪霊・魔物を発見した場合も狩りをする）。

召喚する使い魔は召喚する都度変えてもよいが、たいていの術師は特定の使い魔を召喚する場合が多い（つかさは常にライチを召喚している）。

召喚できる使い魔はマナの生成量に左右され、マナが多ければより力の強い使い魔が呼べる。

『使い魔』

狩りに協力するため人間界に召喚されることをISOに許可された魔法界の住人。

自分を召喚した術者（主人）からマナを吸収することで人間界でも生存可能となり魔法も使える。

主人の命令に服従する契約を結んでる（術師のレベルが高ければ

服従度は高い)。

契約は主人が使い魔を魔界に還すまで有効(返還の際も術式が必要だが、召喚時と違う術式でもよい)。

使い魔専門の教育機関を卒業したプロの使い魔で、ISOに登録され、ISO所属の使い魔だけが人間界に召喚されることを許される。

狩り成功時には報酬を得てそれを生業にする。

『召喚術式』

地面、紙、空中に描かれた幾何学的模様。

術師が自らのマナを術式に込めることで発動され、召喚ゲートと呼ばれる人間界と魔法界をつなぐ出入口を開く。

雷や火薬(TNT爆薬数百キログラムほど)の爆発エネルギーを用いても発動できるがこちらは実用的ではない(ほとんど不可能)。

術式はどれひとつとして同じものはない個別なもので、各術式はそれぞれの使用権と管理義務を特定の一人の術者に持たせる。

また各術式には召喚できる使い魔^{リミット}のレベルの制限があり、たとえばマナ生成量の多い術者であっても、リミットが低い術式では弱小使い魔しか召喚できない。

使い魔を呼ぶ時と返す時に使う術式が異なっても良いが、術式の特異性から普通は同じ術式を使う。

不正使用防止のため、術者は術式の使用(使い魔の召喚)をISOへ事前または事後報告する義務がある。

また、術者は自分の術式を一時的に別の術者に使わせたり(貸出)他の術者に譲渡したりできる(貸出や譲渡の場合もISOに報告しなければならない)。

俺は眉間にしわを寄せながらペンを動かしてた。

俺には一回聞いただけじゃ理解できない内容だ。

そんな俺につかさは説明をやめて訊いてくる。

「隼人くん、ついてきてますか？　なんか理解できてないみたいですよ」

「・・・いや、なんかゲームみてーな世界だよな・・・これ、全部つかさの妄想つてのがオチじゃねえよな？」

「妄想で・・・そんなにわたしは妄想ばかりしてるわけじゃありませんよ。隼人くんの方こそわたしの指し棒をケツ穴にぶち込まれたいとか思っでないでしょうね？」

つかさが指し棒を俺の方に向けてきた。

「しつかり妄想してんな！」

でもマジなんだよな、つかさの話してることで・・・。

マナとかいう微粒子なんかわけわかんねーし。

「もしかして俺の体からマナって出てるのか？」

美月がすぐに答える。

「当たり前だ、でなければ私たちはとくに死んでいる」

「兄上さまのかぐわしいマナがなければ優衣は生きられないからだよ」

優衣はなぜか俺の体につけてくんくと匂いをかいだ。

「ならさ、俺も術式発動できるんじゃないのか？　つかさの術式貸してもらって還せないの？」

「それにはまずマナのコントロールと術式の発動方法を学ばないといけません。ISOの研修でそれを学ぶんですが、代わりにわたしが教えてあげます。土曜日に狩りに連れて行くのもそのためです」

「じゃあ雷を使えば・・・」

「雷？　無理ですよそんなこと。そもそも雷のエネルギーを使って術式を発動させるなんて奇跡的なことなんです。偶然が何個も重ならないとできない技ですので、召喚術学んだほうが早いです」

「そうか、やっぱ、術師の修業を受けるのか・・・」

・・・そうだ、そんなことしなくても手っ取り早い方法があるよ

な。

「思ったんだけど、ISOに連絡すれば話が早いんじゃない？」

「そうだよ、修業とか強制破棄なんかよりもっとうまいやり方で契約解除してくれるよ。」

俺の提案につかさは渋い顔をした。

「うーん、まあ、連絡したいところではありますが、ISOは残酷な顔も持ってますよ……」

「残酷な顔？」

「彼らは問題解決のために手段を選ばない組織で、ISOの規則を犯し仮に厳罰が下される場合、術師や使い魔の命なんかお構いなしで問題解決します。隼人くんのケースは、ISOにとって人間界と魔法界の関係を乱すような解決急務な大問題だと考えられますんで、もしISOに知れたらただじゃ済まないでしょう」

「そんなに俺のケースってヤバい問題なの？」

「そりやそうですよ。術師じゃない一般人が召喚術を使うなんて明らかに問題です。さらに、使い魔として登録されてない魔人まひとを召喚したんです。車に例えれば、無免許運転で不正改造車両を運転して、るようもので厳罰の対象です。それから、学生を無断で召喚された使い魔学校がISOを訴えたりしたら大問題。魔法界に協力してもらってる立場のISOは彼らのご機嫌をつねにうかがってるんです」

魔法界に頼らなきゃ悪霊・魔物を退治できないISOが魔法界に気を使うのは分かる。

「そんなわけで、事情が事情だから厳罰にならないとしても、契約の強制破棄は避けられませんか。前も言いましたが隼人くんの力では命を落とすと思います。それでもお構いなしなのがISOです」

「こわいわね……ISO……」

西梨奈が背筋が凍るように体を震わせた。

「あたしのハヤトは殺させないわ！　つかさ、あんた連絡しなくて正解よ。はじめてつかさに感謝するわ」

西梨奈の感謝につかさがすぐに反応する。

「だったら感謝してる証拠に胸を揉ませて下さい」

なんでそーなるんだ、真面目な話をぶち壊すような発言。

「いやよ変態、あんたになんか揉ませるんだったらハヤトに驚づかみにさせるわよ」

「ちよつと待ってくださいよ！　今は胸を揉ませる流れじゃないですか、指し棒でツンツンさせてくれる流れじゃないですか！？」

つかさは口をとがらせた。

「おい、どこにそんな流れがあるんだよ」

残念そうに西梨奈の胸を凝視するつかさに突っ込んだ。

「ちつ・・・では次です。あと少しで終わりますから頑張ってくださいね」

つかさは舌打ちをしてレクチャーを再開。

『ゲート』

人間界と魔法界をつなぐ出入口。

召喚術以外の魔術によっても出入り口は開かれるが、それらを総称してゲートと呼ぶ。

その中で召喚術によって開かれたゲートを召喚ゲートと呼び、使い魔は召喚ゲートを通過し両世界を行き来する。

世界秩序安定のため、魔法界の住人（ただし使い魔を除く）と人間界に対してゲート使用（両世界の通行）は厳しく制限されていて、通行許可が下りなければゲートを通れない。

『不正ゲート』

無登録の術式によって開かれるゲート。

悪霊・魔物が人間界への侵入や犯罪者の通行に使われる。

『GSN』

ゲート監視ネットワーク、英語で「Gate Surveillance」

ance Network」の略。

世界のどこでどのゲートが開かれているのか探知するISOが保有するシステム。

術式に照応するゲートもまた術式同様に固有なので、GSNは使用された術式の所有者と使用場所を特定可能にさせた。

ISOは不正ゲートを発見することで悪霊・魔物や不正使用者（犯罪者）の侵入を探知し、不正ゲート付近の術師に狩りや不正使用者の捕獲を要請する。

「俺がISOに捕まってないってことは、親父が残した術式は登録済みってことか」

「そうですね。この辺りで一番不正ゲートに近いわたしに要請はありませんでしたし」

つかさが答えた。

「しかしゲートの使用報告をしなければISOは不信がるな」

美月が言った。

「ええ、おそらく所有者登録してる人物に連絡を取ってるかもしれないですね。そして術式が何者かによって無断使用されたと所有者が報告したら大事件。わたしに連絡してこないことからまだ事件化されてないみたいです。所有者は隼人くんが使うことを知っていたのでしょうかねえ・・・」

つかさは小首をかしげた。

親父が所有者なのか？ それを俺に譲渡したか貸したのか？

でも使い方しらねーと自分で置き手紙に書いてたし・・・いや、

そもそもクソ親父の言葉を信用していいのか？

親父を問い詰めたいが行方知らず。

「ふう」俺は息を吐く。

どっちにしてもこのまま事件化されないでほしい。

「そもそもさ、どうして召喚されたのはこの3人なんだ？」

「まあ、きつと偶然でしょうね。発動方法が方法だけに何が起こったのか皆目見当が付きません」

つかさが首を振った。

「あら、ハヤトはあたしたちじゃ不満なの？　こんなにちよー可愛
いあたしが使い魔になってあげたのに」

「そうじゃないけど、お前らはまだ学生なのに使い魔にさせて悪い
っか、お前らの生活を邪魔して悪いっか・・・」

俺がそう言つと、

「そうそうできる経験じゃないし、あたしは結構人間界楽しんでる
わよ」

と、西梨奈は笑顔で答えた。

「うむ、私も同意見だ」

美月は頷いた。

「わたくしは兄上さまの使い魔となれて幸せでございます」

微笑む優衣が従順な視線を向けてきた。

「そ、そうか、ならいいんだ」

優衣にそう言われると悪い気がしない。

確かにこいつら3人は楽しそうだ・・・聞くまでもなかったか。

「じゃあ、最後に使い魔学校について説明します」

『使い魔学校』

使い魔を育てるための学校。

10歳〜18歳までの魔人が通っている。

卒業試験に合格すればプロの使い魔として独り立ちする。

人間界の学校と生活環境は似ていて、宿題もあるし定期テストも
部活もある（もちろん勉強内容は違うが）。

美月、西梨奈、優衣はともに16歳で同学年だそうだ。

ちなみにライチは5年前に13歳で飛び級合格したらしい。

以上がまとめノートに記した内容だ。

約一時間でレクチャーは終わった。

現実離れしてるが信じる他ないだろう。

「だいたいわたしが知ってることはこの辺りです。まあ、もっと細かいことは実際に必要になった時に説明します」

つかさが教えてくれたことは俺の使い魔たちに聞いた情報よりも踏み込んだ内容だった。

俺はつかさに感謝する。

「助かった。少しすっきりしたけど、やっぱり現実感がねーよな」

「わたしも初めて聞いた時は信じられませんでしたし、最初はみんなそうですよ。ともかく、一番避けたいのは・・・仮定の話ばかりで申し訳ないんですが、もしISOにバレたら契約の強制破棄が待ってるので注意してください。使い魔3人は別にしても隼人さんは死んじゃいますから」

「死んじゃいますって・・・軽く言ってくれるよ・・・」

でもこれが現実。

俺はため息をつく。

なんだか最近ため息ばかりついてる気がする。

その後、つかさが契約解消プランを出してくれた。

マナをコントロールする方法や術式の発動法といった召喚術を習得し、つかさの術式を使って3人を返還する、というプランだ。

それがなんのお咎め無しに俺が普通の生活に戻る方法である。

つーわけで俺の召喚術師（非公認）への道はこうして幕を開けたのだった。

16 友情

つかさのレクチャーも終わり時間も6時を回ったので俺たちは帰宅準備に取りかかる。

水洗いする前にマグカップに残ってた冷めたコーヒーを飲みきると、

「兄上さま、わたくしにおまかせください」

とメイド服の優衣が両手のひらを差し出してきた。

奥に続く小部屋（4畳くらい）で洗ってくれるようだ。

小部屋は独立型キッチンになっていて冷蔵庫と食器棚の他、流し台とガスコンロに作業台があり、収納棚にはまな板、包丁、ボウルやらのキッチン道具が仕舞ってある。

ティークラブが簡単な調理でもしていたのだろう。

「サンキュ」

俺は礼を言う。

しかしなぜか優衣はマグカップを手に部室を出ようとした。

「優衣っ、洗い場は奥だぞ」

俺が奥の部屋を指差しながら言うとならぬ、優衣はマグカップを大事そうに胸に抱えながら、

「すこしお手洗いに・・・」

と答えた。

用足しに行くようだ。

「じゃあ、それ置いてけよ」

「これは持っていけます」

え、用足しじゃねーの？

「いや、だから、トイレ横の水道で洗わなくても、キッチンで洗え

るって」

俺の言葉に優衣はぽかーんとしていた。

「洗うなど、そんなもつたいのないことはいたしません」

「は？ だったらなぜカップを持つていく」

すると優衣は顔を赤らめながら理由をしゃべる。

「そ、それは、このマグカップをつかわせていただき、わたくしの秘部に兄上さまの間接キスをこすりつけてまいります。そんな恥ずかしいことは部室ではできませんのでトイレの個室の中でこっそりと――」

「こすりつけんなッ！」

俺は食い気味に突っ込んでからマグカップを奪ってキッチンで洗う。

マグカップ（俺と全員分のカップ）を水切りかごに入れ、最後にガスの元栓チエックと蛇口をしっかり閉める。

週明けまで使わないので（今日は金曜日）、冷蔵庫に何も入れなければ節電のためにコンセントを抜いておこうと冷蔵庫を開けると、

「・・・ッ!？」

俺は驚きに体を震わす。

「ど・・・どーいうことだ!？」

どろどろの白い液体を体からみつかせる全裸の美少女と目があつたのだ。

「・・・と言ってもプラスチックケースのカバーイラストに描かれた二次元美少女だ。

「なんだよ・・・これ」

なぜエロゲーが冷蔵庫に入ってる!？

俺がケースをとりだし不信がつていると、

「あ、忘れてました。それ、わたしのです」

と、案の定つかさがやってきた。

「いや、お前のつてのは分かってるけど・・・どうして冷蔵庫に入る」

「汗をかかせるんですよ」

つかさは真面目な顔して答えた。

「汗？」

「そうです、冷えたパッケージを常温に戻すと、そこに霧吹きでも再現できないモノホンの近い汗をかかせることができます。わたしはそれをハアハアしながらぺろぺろするんです」

「・・・」

どんな性的嗜好だよ！

しかもそんなことよくも臆面なく言える・・・その勇氣だけはそんけーしてやる。

俺が完全ドン引きしていると、真顔だったつかさの表情が崩れる。
「なーんてわたしはそんな変態さんじゃないですよーだ。そんなことしないですよっ、ぐふふ、隼さんの驚く顔が見たかっただけですっ、えへ」

冗談だと疑わなかったほどお前は変態だぞ、と思ったが口に出さなかった。

「そーいやさ、使い魔学校にも部活あんだな」

俺は長テールブルに乱雑に置かれた同人誌の束（つかさが持ち込んできた）をブックスタンドに戻しながら聞いた。

テールマナーやら菓子作りの本が並べられていただろうブックスタンドには同人誌やギャルゲー情報誌（もちろんつかさの私物）がぎっしり詰め込まれている。

「前に美月が部活のこと初めて聞いたような感じだったからさ、お前たちの学校に部活って無いんだなって意外に思ったんだ」

「どうせ美月が帰宅部だったからでしょ？ あんたみたいな性悪女、どーせ人付き合い苦手だから入部したくても気後れしたんでしょ」

そうやって西梨奈に小馬鹿にされた美月はすぐに反論する。

「な、ち、違う、私は図書館で勉強するのに忙しかったんだ、部活なんかやってる暇はないっ。まったく、帰宅部はやれ友達作りが苦手だとかやれコミュニケーション能力が足りないだとかやれ消極的なやつだとか、そうやって馬鹿にされる。私みたいに飛び級で使い魔になるという高尚な目標（うごころ）を持つ学生もいるのだ」

・・・結局お前も帰宅部馬鹿にしてるよな。

「西梨奈さんは部活やってたんですか？」

つかさが聞くと西梨奈はバツが悪そーな顔で、

「あ、あたしも帰宅部だけど・・・あたしは親が厳しくて入らせてくれなかったのよ」

「西梨奈さんはものすっごい魔法界のお嬢様なんですよ、ライチに聞きました」

つかさが言うのと優衣も合わせる。

「西梨奈さんのご両親はじょうりゅう階級の大ふごうでございます」魔法界の上流階級ってイメージ湧かねーけどすごそーな感じ。

「ふん、どうせ帰宅部なのは仲間の輪に入れなかったんだろ。高飛車で自分勝手なビッチはいかにも女に嫌われそうなタイプだからな」

美月に逆襲された西梨奈は凶星だったようで焦って反論する。

「べ、別に良いじゃないの、女子に嫌われたって、どうせみんな男子からモテモテのパーフェクトボディに嫉妬してたんでしょうよ！それに超金持ちで身分の高いこの西梨奈様がいくら部長だからって偉そうな平民の僕（へいみん）になるなんて両親が許さないのよ」

「別に部員は部長の僕じゃないぞ・・・」

しかも部長って偉そうにしてるわけじゃねーし。

「とにかく、両親が入るなって言っただから入れなかったのよっ。一回入部を誘われた時、部長をあたしにやらせてくれるなら入っても良いわ、って言ったの。そしたら断られたから入ってやらなかったわ！せっかく妥協してやったのにつ」

「・・・まー、そりや普通断るよな。優衣は？」

「わたくしは、使い魔学校に入学以来、主人以外にご奉仕しないところを誓いました。だからぶちように対してのご奉仕は将来のご主人様、つまりは兄上さまに対する背信行為だと肝にめいじておりましたので優衣もきたく部でございます」

「優衣、部長は奉仕する対象じゃないぞ」

俺が指摘しても優衣は首をかしげるだけだった。

「へーみなさん帰宅部だったんですか。わたしは術師との両立は難しいので部活は遠慮していました。だって部活の途中で至急要請が入って狩りのため早退しますって言えませんからね。それとわたしと同じ部のイケメン先輩と二人しかいない部室で甘い吐息をあんな所、こんな所に吹きかけあってる時に要請なんかあったらイキかけのわたしの純情ハートはどうしてくれるんですか」

「どうもしねーよッ！ 後半部分はまったく心配することだねえけど・・・つかさもいろいろ大変なわけだな」

言い足りない西梨奈がまた美月に食ってかかる。

「なんだかんだ文句ばかりだけどさ、部活やれてよかったんじゃないの美月？ あんたとクラス違うけどたまに見かけるといつも一人じゃない。どーせいつも一人でいたんでしょ？ この部活に入って一緒に放課後に過ごす友達ができて良かったわね」

「き、きさまっ、隼人の前で友達が少ない事言うな・・・わ、私は・・・自分からあえて孤独を選んだんだ」

「へえー、やっぱり友達少ない一匹狼なのね」

「一匹狼で何が悪いっ！ フン、確かに友達は少なかったが、そう言う貴様はどうだ、他の生徒との交流といたら男子を奴隷みたいにパシリに使うだけで友達はゼロだろう！」

「は？ あたしの周りはずねに賑やかだったわよ」

「ふんあれは、お前の給仕連中の取り巻きだろう。あんなもの友達ではない、ふふん、友達の少なさでは貴様は私の足元にも及ばない」
「あんたに言われたくないわよ！ あんたなんか孤独のうちに死ね

ばいいわ！」

なんて低レベルな争い。

「お前ら、友達が少ない者どうして争うなよ・・・」

美月は成績優秀、仏頂面で無愛想でいつも不機嫌そうなクールビ
ューティー。

高飛車なお嬢様で自分が一番の女王様な西梨奈。

話がかみ合わない不思議系な優衣。

そして何より、発言がアレなわけで、惜しすぎる美少女3人なん
だよ。

「確かに・・・付き合うのに疲れそうなタイプだよな」

「そうよね、こんな性悪美月なんか友達になれないわよね」

「な、隼人が言ったのは私ではなく貴様のことだぞっ、胸が少し大
きいだけで良い気になるな！」

「ちよつと、顔も良いでしょ、顔も！」

俺はお前ら全員に言ったんだよ・・・。

結局こいつら・・・。

「よしよし、わかったよ、お前らはずっと部活に入りたかったんだ
な・・・」

こいつらが一日で部活を作った溢れるバイタリテイの源が分かつ
た気がする。

「別に私は部活にずっと憧れてたわけじゃないぞッ！　べ、別に私
は・・・隼人と、なら部活をやっても良いと思っただ。ただそれ
だけだ。部活に入ったら友達がいっぱいできて楽しい学校生活を過
ごせるっ、なんて一つも思っていないからなっ！」

「あ、あたしだって、友達と一緒に青春の汗を流したいっ、とか、
放課後にみんな楽しく過ごしてみたいっ、なんてこと願ったこと
なんてないんだからねっ！」

「ご主人様になるであろうお方への堅い決意さえなければ、きつと、
わたくしはお友達いっぱいの果報者でございましたけれど別に気に
しておりません」

「3人ともしつかりと本音が出てますね・・・」

つかさがぼつりとつぶやいた。

まったく、こいつら変な事で悩んでやがる。

「お前ら、別に友達少ない事は恥じることじゃねえよ」

そう言つと美月の顔色が変わる。

「それは本当か！？ 隼人！？」

「ああ、俺は気にしねえよ」

「友達が少なくてもお前は変に思わないか！？」

「ああ」

だって俺も人の事言えねーしな。

「本当だな、隼人っ！ お前は友達少ない変な女だなんて嫌いにならない男なのかっ！？」

美月がえらく不安そうな顔で聞いてくるので、

「本当だ、そんなことで嫌いにならないって！」

と強く声を出した。

それを聞いた美月はしばしの沈黙のあと、とびっきりの笑顔になり、

「よかった・・・うむ、私も少し強がっていたな、実はちよつとは部活に興味があつたのだ」

と安心したように笑顔のままつぶやいた。

美月のこんな笑顔初めてだ・・・思わず見惚れてしまう。

「ん、どうしたんですか隼人くん、顔が赤いですぞ？」

つかさがわざとらしく言うので俺は話題を変える。

「お、おっほん・・・それにもう3人とも友達だろ？ よかったじ

やないか、友達できて、部活にも入れて」

そう言つと美月は西梨奈を一瞥^{いちべつ}。

「ふん、こんな腐れビッチなどと友達になるだと？ 笑わせるな」

「おい、そこは素直に友達になると言えよ」

「ちよつ、なによあんたせつかく今あたしが美月と友達になっても良いって思ってたのにっ・・・いいわよ、友達になつてくれないの

ね、悲しくなんてないわ・・・本当よ、ぐすっ」

西梨奈はマジで悲しそうな声だった。

こいつも友達ほしかったのだ。

「う・・・いや・・・その」

美月は西梨奈のマジへこみにうるたえる。

優衣も悲しそうにな目をする。

「優衣はみんなとくにお友達だとおもっておりました。美月さんはみんなのことをお友達と思っていなかったのですか・・・優衣は悲しいのです」

優衣の純粋な悲しみに再び心が痛んだらしい美月は言葉を訂正する。

「そ、そうじゃない、誰も友達にならないとは言っていないぞ・・・まあ、しかたない、隼人が言うならば友達になってやる」

友達になる、の言葉に西梨奈は元氣を取り戻す。

「なってやるって何よ、上等よ、あたしのほうこそし・か・た・なく、あんたの友達になってあげるわよ」

美月は「ふんっ」と鼻を鳴らし不機嫌そうにしてたが、ただの照れ隠しなのかもしれない。

「優衣も仲良くやれよ」

「はい、兄上さま、わたしたちはともだちでございます」

優衣ははにかみながら俺を見つめた。

そんな、どこかきこちなくも純粋な友情が3人の間に芽生えた瞬間、つかさが発狂する。

「ああああッ・・・友情って素晴らしす、素晴らしすッ、眩し^{まぶ}す、つかさには眩しすぎるっすよおおッ！　ぐほおげええおおッ！　ギヤルゲの友情シーン！　まさにここに降臨！　ぬはあうんッ！」

「・・・つかさ、お前大丈夫か？」

「もうだめです・・・つかさはノックアウトされました・・・ぐはうっ」

3人の友情シーンを見せつけられたつかさが鼻血を出してぶっ倒

れてた。

こうして3人は友達になったとき。

でも美月と西梨奈はこれからもケンカの連続で俺の仲介役は続く
だろうな。

ま、ケンカするほど仲が良いつてことで良しにするかな。

17 幼女

土曜、午前9時前。

リビングで朝日を浴びてまどろむ美月、西梨奈と優衣。

9時につかさが使いを寄こすと約束してたので待っている。

朝食を食べた後（茉莉花^{まりか}も含めた5人で）、俺は挽^ひきたてのコーヒー豆を使ってコーヒーを淹^いれていた。

リビングがコーヒーの良い香りで充満する。

俺は深呼吸してコーヒーの香りを肺に満たす。

なんて素晴らしい香り！

至福のひと時だ。

日ごろのストレス（使い魔が原因）が体から抜けていく。

「ふー、お前のコーヒー好きにはあきれ果てる・・・毎朝毎朝お前のイキ顔を見るのが日課になってしまった」

美月がうんざりするような顔をした。

いいじゃんか、好きなもんは好きなんだ。

「そんなに見たくないなら見るな」

「む、べつに嫌じゃない・・・。お前が私に興奮せずにコーヒーに興奮するから嫉妬しているだけだ」

ボソボソしゃべってから美月は俯いてしまった。

何て言っただんだ？

変なやつ。

にしても朝から目に毒な美少女の姿。

陽の光よりも眩しいほど白い美月のすらりとした脚がショートパンツから惜しげもなく伸びている。

うつ伏せになって雑誌を読んでいるタイトスカートの西梨奈は、弾力のありそーなブリっとした尻とムチムチのふとももを見せつけてくる。

超ミニのスカートから純白パンツをのぞかせる優衣。こいつはわざと下着を見せてるのか？

「ふー」と俺は息を吐く。

ほんとーに朝から目に毒の光景だ。

見るなと言われても見てしまうのが男心。

不惑なんて遠い未来の話。

高揚感が心に打ち寄せる。

体の一部分だけ血の巡りが良くなっていることに気付く。

そんな男子だけに分かる昂^{たかぶ}りをコーヒーの香りで押さえこんでいると、

ピンポン、とチャイムの音。

壁時計は9時3分を示してた。

約束の時間だ。

玄関の扉を開けた。

・・・誰？

目の前に身知らぬ巫女服の幼女（巫女服だからつかさの使いだとは分かる）が立っていた。

身長と顔から見ると小学3か4年だろうか。

肩までかかる銀髪と可愛い顔立ち（北欧系のハーフ）で、つかさの使い魔ライチを小さくした感じで、ライチが女神ならこの子は妖精のイメージ。

まさに？お人形？という言葉がぴったりの美少女幼女は、俺と目が合うと満面の笑みを浮かべた。

「ほんとだー、おにーちゃんだーっ！　ライチのいうとおり人間のおにーちゃんがおるぞっ！　あははっ、きゃははっ」

幼女は元気よく手をばたばたさせた。

なんか急に激しく動き出したぞ。

「えっと、つかさの使いだよね？」

「ぬほっ！ おにーちゃんがしゃべってきたぞ！ 人間のおにーちゃんがしゃべつとる！ なははっ、おもしろいなー、きゃははっ！」
なんだこのハイテンションの生き物！

俺の話聞いてねーし。

「えっと・・・だから、君はつかさの——」

幼女はハイテンションで俺の質問をさえぎる。

「そーだ、そーだ思い出したぞっ！ 人間の男にあつたら聞いたときたいことがあつたんじゃっ！ なーなー、おにーちゃん、おにーちゃんにはちんこついてるんけ？」

俺は思わず噴き出しそーになった。

「ち・・・ちんこ・・・？」

初対面でいきなり聞く質問じゃない。

絶対アホな子だと確信。

「ライチが言つとつたぞ！ 男にはちんこがついてるって！ 人間の男にもちんこついてるんけ！？ 見せてみーやっ、いくぞっ、ちんこ出発ちんこーっ！」

そう言つて幼女が俺の下半身めがけて突進してきた。

「うわっ、ちよつとやめろ！」

チャックに手をかけようとする幼女の手を俺は退ける。

玄関で俺の下半身の主導権争いをしてると、

ぽこっ、と幼女の頭が叩かれた。

「ぬきやっ！」

悲鳴を上げた幼女を叩いたのはライチだった。

「すまないねー、うちの妹はしつげがなくて・・・」

艶やかな微笑を浮かべるライチは今日もあでやかな巫女服の着こなし方（肩丸出し）だ。

こんな巫女さん神社にいるんだつたら、お百度参りでもピクニック気分だ。

「隼人くん、元気だった？ アタシのこと覚えてる？」

覚えてるに決まつてる、こんな綺麗な人忘れたら男じゃない。

「もちろんですよライチさん、お久しぶりです。俺のことも覚えていってくれて光栄です」

なんか年上で美人の人と話すのは緊張する。

「もー、こんな可愛い隼人くんのことを忘れるわけないさね」

「あはは、ども」

可愛いと言われて俺は頭をかいた。

「ほら、自己紹介は？」

ライチが幼女の頭に手をかけお辞儀させる。

「はじめまして。れもんです」

ライチの登場と供にすっかり大人しくなった幼女はれもんという名前だった。

「で、つかさの家に案内してくれるんですよ」

「そうだよ・・・でもその前に・・・」

ライチがもつたいぶるように色っぽい目つきで見つめてくる。

「な・・・なんですか・・・」

「・・・敬語はおよしなさいよ、アタシは堅いのは嫌いだよ・・・でも・・・堅くなって良いのは・・・ここだけ・・・」

さわさわ。

俺の下半身がライチの指先でいじられる。

「ッ!？」

「あははっ、ちんこさわつとるけ、ライチがちんこさわつとるけーっ!」

れもんはなぜか喜んでる。

「ちよっ、なにしてるんですか!」

俺はライチから後ずさりする。

「ふふ・・・良いモノ持つてるねえ、隼人くん、君は見込みがあるよ」

艶気を含んだ低い声で言って艶めかしく動かす腰を俺に密着させてきた。

「まあまあ、そんな恐がらなくて良いさね、リラックスしてお姉さ

んに任せなさい」

なにを任せればいいんだよ！

こ、この人は何をしてるんだ！

妹が、れもんが目の前に入るんだぞっ！

「おー、ちんこついてるのか確かめるんだなー、早くちんこ見せるんだ、おにーちゃん」

能天気なれもんを良い事に、ライチの指先が再び触れてくる。

「ほらあ、隼人くん、れもんに確かめさせるために協力してくれな
んし」

「や、やめ・・・ぬあっ」

「なはは、感じるかね隼人くん。君は可愛いし触つてるとアタシ
までぞくぞくしちゃうよ？」

なんか・・・頭がぼくっとする・・・が耐える俺の自制心！

「まじでほんとにやばいですからっ」

そう言つて俺が後ろに下がる・・・が、ライチの指先が後を追
いかけ絡みつくのをやめない。

そして壁際に追いつめられ逃げようにも後が無くなるとライチの
手の動きはさらに激しくなる。

「ほおら、さて、さてと、お姉さん、そろそろ本気で行こーかな？」

マジでだめだろ、れもんがいるんだ、美月たちも茉莉花もいるん
だぞ！

よーやく、状況のまずさを理解した俺はライチの肩に手をかけた

——その時、

玄関にやってきた美月は、傍から見れば俺とライチが抱き合つて
る状況を目の当たりにした。

「お、おい・・・き、貴様、な、なにを・・・」

顔を真っ赤にし、眉毛をピクピクさせる美月の後ろから西梨奈と
優衣もやってくる。

「・・・ハヤト」

「兄上さま・・・」

・・・なぜか修羅場な状況。

そんな凍りついた空気をレモンの声が消し去る。

「あはは・・・つかさの言ってた通りほんとに使い魔いっぱいおるぞ！ きやははっ、あははっ」

北欧幼女は美月、西梨奈、優衣を見つけると嬉しそうにぴょんぴょん飛び跳ねた。

「お前たち、みんな迷子何だってな！ あははっ、あははっ」

「なんだそのちっこいのは」

美月がれもんを指差す。

「おっ、迷子がしゃべっとるけっ！ おまえたち家に帰れないってつかさに聞いたぞっ！ 迷子じゃ、迷子じゃ、良い歳こいて迷子じやって、おもしろいなーっ、おとなげないなー」

おとなげない、は違うだろ。

「なによ、その失礼なガキは」

西梨奈が言った。

「二人はつかさの使いで・・・ライチのことは知ってるよな？」

修羅場な状況を救ってくれた（？）れもんに感謝していると、

「立ち話は何だから上からせてもらうさな、さっきからコーヒーの良い香りがするんだよ、ちよっとコーヒーでもごちそうしてよ、隼人君」

と言ってライチはずかずかと上がり込んできた。

「あゝ、それと、さっきのは冗談だよ、冗談、なはははっ！ アタシは冗談が好きなんだよ、驚かせて悪かったねゝ、うひゃひゃひゃっ！」

妖艶さが消えたライチが大声で豪快に笑った。

「冗談になってねーから、まじで色々とヤバかったから！

「で、どの部屋に入ればいいのかな？」

「あ、この廊下のつきあたりです」

俺がライチとれもんを招くと美月が耳元で文句を言ってくる。

「なんでこんな淫乱女を招き入れているんだエロ術師、さっさとっ

かさの家に行かないか！」

「いやないか、コーヒー飲んでもらってすぐにつかさの家に行くからさ」

俺が答えても美月はムスツと膨れながらライチを睨んでいた。

西梨奈と優衣も一言も発しない。

「せっかく来てくれたんだからお茶くらい良いだろ？」

それにライチの奴が勝手に入ってきたんだし、そりゃ入るなって断れないだろ。

レモンは俺の周りを「おにーちゃん、おにーちゃん」と、ぐるぐる回りながらくっ付いてきた。

そしてくんかくんかと俺の体につけまくる。

こいつは小犬か！

「いやーにおいするなー、おにーちゃんはすごいおいしーにおいするなー、れもんが大好きなおいだぞーっ」

ライチが理由を教えてくれる。

「この子はマナの匂いに敏感なんだよ。きっと隼人くんのマナの匂いが気に入ったんだろうね」

「マナって匂いするんですか？」

「まあ、常人じゃ感じない僅かな匂いだけどレモンは嗅覚が異常に発達しているのさ。でもそれはマナに対してだけで他の匂いに関するの嗅覚は常人並みだけだね」

「なはは、おにーちゃん、いいにおいっ」

ほんとに犬みたいじゃん。くんくん鼻をひくひくさせながらまわりつくレモンを見て思った。

「それよりどうしてお兄ちゃんって呼んでるんですか？」

これ以上妹が増えるのはもう遠慮する。

「れもんは隼人くんくらいの歳の男の子を見るとお兄ちゃんって呼ぶんだよ、そういう年頃ってやつ？」

「あー、なるほど」

茉莉花にもそんな時があったことを思い出した。

俺が中学の時自宅に連れてきた友人におにいちゃんと言って懐いてたな。

リビングのソファにどっかりと座ったライチに聞こえるように三人は話す。

「ちつ、なんてふてぶてしい態度だな、ド淫乱女め」

「ふん、あんな女が飛び級ですって？ 使い魔学校も見えないわね」

「会って二回目で子を授かろうと兄上にせいこうを求めるとはあなどれません。わたくしもライチさんを見習います」

見習うなよ優衣。

三人の冷たい視線を我関せずライチはオレ自慢のコーヒーを口に含む。

「おつ、これはなかなかおいしいコーヒーだねえ。挽きたてかね、コクが違うやね、香りも安っぽくないねえ」

目を細めながらカップを揺すり香りを愉しむ^{たの}ライチ。

「ライチさん、コーヒーのことわかるっすか！」

どーしてコーヒーに詳しいのかは別にして俺は思わず興奮。

「もちろんさね、人間界に来てからこんなうまい飲み物はあるのかと自分用の土産にコーヒー豆を魔法界に持ってくほどさ」

「そ、そーなんすかつ、ほんとに好きなんですな、あははっ」

俺は同志ができたようで嬉しかった。

その後、俺とライチは互いのコーヒー観を熱く語り合い意気投合した。

10分くらい話してるしびれを切らした美月が水をさしてくる。

「おい、隼人、いつまでしゃべってる」

美月は顎をしゃくって時計を指した。

そーだ、すっかり時間を忘れて話してしまった。

「我が主、つかさも待っていることだろうし行こうさね、隼人くん、おもてなしありがとね。すっごくおいしかったよ、また飲ませてちょうだいね」

「ぜひまた遊びに来てくださいよ」

よしっ、コーヒーについて語り合う仲間ができたぜ。

「ちっ、どうしてお前はいつもいつも、私以外の女にデレっとするのだ・・・おい、エロ術師、早くいくぞ」

「なははっ、やたー、れもんも一緒だからな、おにーちゃんまた来るからなっ！」

「おう、れもんもまた遊びに来いよっ」

俺は気分よくれもんの頭をなでると、れもんがいきなり飛び跳ねた。

「決めたっ！ れもんはおにいちやんの使い魔になる！」

元氣いっぱい大きな声で宣言した。

べしッ。

ライチがレモンを叩く。

「ほえッ」

「ご主人様はつかさだよっ、アタシたちは使い魔なの。忠誠を誓っているんだ、なにが隼人の使い魔になるじゃっ」

「いったあ、あほんだら、なにをするんじやいつ、うんこまみれになっちみやえ、ババアッ！」

「誰がババアじゃっ！」

今までは軽く叩いてたライチだったが『ババア』発言に今度はげんこつをけっこー強く見舞ってやった。

ごんっ。

「ほげえッ」

れもんは痛みを拡散するように手をばたつかせる。

「うー、いたいぞ、ただけ痛いかしらないからこんな痛いことするんじやっ、ひとの痛みをしないものは地獄におちるんだぞ、地獄に堕ちろクソババアッ」

クソババアと叫んだ瞬間、頭を叩かれないうちにソファから飛び降りたレモンはライチから距離を取る。

「ったく、うちの妹は・・・」

「いやいや、うちの妹も似たようなもんですよ、あいつも放送禁止用語連発してた時期がありましたし」

と俺が言ったらタイミング悪く、二階から降りてきた茉莉花がリビングに立っていた。

「むー」

身知らぬ人間二人を確認し、恨めしげに俺を見つめる茉莉花。

「えーと、この人たちは、俺の友達のライチさんとレモンで——」
紹介の途中で茉莉花は話しだす。

「『おにーちゃん』って・・・もしかしてこの人たちまた隠し子じゃないよね？」

茉莉花のやつ、いつから話聞いてたんだ？

「違うよ、この人たちは・・・えっと・・・友達だな」

「ともだちちゃうぞおにーちゃん。れもんはおにーちゃんっておにーちゃんのこと呼んでるから、おにーちゃんにとって、れもんは妹なんだぞ、わかったかおに——」

れもんがしゃべってる途中で茉莉花が大きく声を出す。

「人のお兄ちゃんをお兄ちゃんてよぶなっ！」

れもんも負けじと大きく声を張る。

「だっておにーちゃんはおにーちゃんだぞ！ れもんがおにーちゃんて言うのはあたりまえじゃ！」

「・・・なんでお兄ちゃんはこの人たちなんかといつもいつも一緒にいるのよ・・・」

茉莉花は下を見ながら肩を震わせていた。

表情に出さないけど怒ってることは長年の経験から明らかだ。

「あたしにはぜんぜん構ってくれなかったくせになんで新しくできた妹にはこんなに優しいのよ・・・」

「・・・？」

小さい声なので聞き取れなかった。

「なんか言ったか？」

「もーお兄ちゃんなんて知らないっ！」

茉莉花は怒鳴って玄関の方に早足で歩いてった。

茉莉花のやつ、最近怒りっぽいな、学校で嫌なことでもあったんだろーか。

「おい、どこにいくんだっ」

「部活っ！」

それだけ言い残して家を飛び出して行っただ。

俺がやれやれと首を振っているとライチが話す。

「あら、隼人くんの妹さんてかわいいところあるじゃない」

「は？　かわいい？　わけ分らないやつでしょ、いきなり怒ってなんなんだ？」

「へー、隼人くんてそーいうタイプなの」

「え？　そーいうタイプってどんなタイプっすか？」

「さーね。さっ、いきましょか」

そう言っただライチはリビングから出てった。

こうして騒がしい日常に幼女れもんが加わり、朝から4人の妹（茉莉花と使い魔たち）の機嫌を損ねさせた俺はつかさの家に向かった。

17 幼女（後書き）

<あとがき>

お読みいただきありがとうございます！

それから、お気に入り登録してくれた人、感謝しております！

今話は少々暴走気味な内容でした・・・いーよね？

それから小さい子のち○こ発言は伏せ字する必要無い思ったんで伏せ字ませんでした。

（このあとがきは次話投稿時に消します）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5566w/>

どうして俺の使い魔たちはこんなに可愛いんだ！

2011年10月12日02時57分発行